# 國語注音文選

99
206

トツメホマ

( i ) He sanctioned a belief in fatalism. Fatalism takes the heart out of a man. When misfortune cames to a fatalist, he folds his hands and says "Shikata ga nai,"—instead of struggling manfully against his destiny. God has given every man a free-will to make or mar himself; but fatalism destroys free-will.

( i i ) He allowed polygamy, concubinage, and slavery.

If you will study these two points carefully, I think you will find in them the reason why all Mahometan countries are decadent.

But your studies of Mahomet's life must have already shewed you these things; so all I have to do is to wish your book a good success.

Believe me to be,

Yours very sincerely

Arthur Lloyd.

99—206



# 序

佛教、基督教、回教、これ世界の三大宗教なり。佛教と基督教とは既に我國に傳はりて、其教祖の行實も亦世人の熟知する所なり。然れども回教に關りては未だ我國に傳はらず、從て其教祖マホメットの性行も亦世人之を知る者尠し。慮ふに佛陀と基督とは單に出世間的二宗教家たるに過ぎず、故に彼等の生活は極めて單純にして能く高潔なる操守を全うし得たり。されどマホメットの生活は徹頭徹尾世間的なり、渠は單純なる宗教家にあらず。渠はアラビヤ人の預言者たり、君長たり、將軍たり、政治家たり。故に其性行も亦大に前二者と異れり。是を以て佛陀は出家入道して多くの妻妾を棄てたるもマホメットは預言者として多くの妻妾を納れ、基督は一個の家庭すら形成するに遑あらざりしがマホメットは之に反して一大帝國を建設し、佛陀と基督とは戰爭を嫌ひて前者は平和に般涅槃し、後者は不幸にして人の殺す所となりたるも、マホメットは之に反して戰爭を以て宗教を擴め、敵を殺すこと其數を知らず。然れども之を以て渠が悖德を敢てし、惡逆を逞うしたりといふものあらば汗は過てり。

明治
38 11 22
内交

*13. Iigura Rokuchome,*
*Azabu, Tokyo.*
*6. Nov. 1905.*

My Dear NUKARIYA,

I am very much interested to hear that you are contemplating the publication of a Life of Mahomet. I shall be very much interested to see it: but I fear the style will be too difficult for me to read with facility!

I have never had time to make a special study of Mahomet and his religion, though I have, of course, some general knowledge of the subject.

I have always had a great admiration for Mahomet, because he was one of those deep-seeing men who realized the existence of a personal God—the Ruler of the World—with whom he seemed to be brought face to face. Nothing can give man such strength of character and such fortitude as the constant realization that God exists, and that he is the Protector as well as the Judge of those that seek him.

There are, however, one or two weak spots in his teaching

何となれば多數の妾妻を蓄ふるは東洋的君主の常慣にして、軍人が人を殺すは固より其本領なればなり。況や渠が生れたる社會は一夫多妻と同時に一妻多夫をも是認し、復讐の如きは道德的義務と信したるに於てをや。斯くマホメットの生活は多面的なり、複雜多端にして變化に富めり、豈基督及び佛陀の如き單純にして平和なる生活を送れる聖と日を同うして論ずるを得べけんや。是れ吾人が本論に於て宗教家としてのマホメットと政治家及び軍人としてのマホメットとを區別して立論したる所以なり。且つそれ渠が母國たるアラビヤは吾人の祖國たる日本と其習慣、風俗、言語、宗教を異にし、其思想と道德との進歩に於て大に懸隔あり、故に吾人が今日懷抱する所の意見を標準として渠が性行を批評するは妥當を失するを免れず、これ吾人が序論に於て渠が生れたる社會と其宗教學術の一班を略叙したる所以なり。然り而して吾人がマホメットの本傳を略述するに止めて詳細なる考證を避けたる所以は一は頁數に制限せられ、一は僅かに半月内外の短時に迫られ、一は他に同類の史傳なければ始めてマホメット傳を綴く者あるべしと信じたるに由る。また吾人は本書に於て一も創見を出さず、行文の拙劣なる見るに忍びざるものあり、這は吾人が研究の未だ深からずして火急に筆を操りたるの致す所ならずんばあらず。吾人が本傳を草したるは文學的作品としてにあらずしてアラビヤ的宗教家の面目を讀者に示さんとするの微意に外ならず。吾人は佛教徒なり、されば吾人は讀者をして回教を信ぜしめんと欲する者にあらず、然れども吾人は如何なる宗教にも一分の眞理あるを疑はず、從ひ而して回教の教理と其教祖とに對して尊敬を拂ふことを忘れず、讀者も亦公平と寛容とを以て本傳の主人公を見るあらば著者が望外の幸なり。何となれば公平と寛容とは我佛教の精髓なればなり。若しそれマホメットの詳傳と回教の教理とに至りては他日稿を改めて叙述する所あるべきなり。

明治卅八年十一月三日　東京市芝區南寺町南台精舍客寓　忽滑谷快天識

## 注意四則

一マホメットを指したる代名詞は必ず彼(カレ)の字を用ひ、他は彼(カレ)の字を用ふ。

一「」又は「」なく以て閲みたる對話的文字は多くは取意の文にして、必ずしも全文を引證したるにあらず。

一本傳の大部分は年代の順序によりたるも、或細の事項は必ずしも然らず、讀者は附錄のマホメット年譜を參照せんことを要す。

一同教の年月は陰曆を用ふ、故に西曆に換算するに方りて多少の差升を免れず、紀元何年何月と記したるは大約其年月に相當するをいふ。

# 怪傑マホメット目次


序論

第一章　マホメットが生れたる社會

第一節　總序……一

第二節　マホメットの容貌風姿……二

第三節　アラビヤの風土……六

第四節　アラビヤの人民……七

第五節　アラビヤの學術文藝……一四

第二章　マホメット以前の宗教

第一節　基督教と猶太教……一七

第二節　アラビヤの舊宗教……二三

第三節　カアバ聖殿に關する傳說……二九

第三章　アラビヤ舊宗教とマホメットとの關係

第一節　マホメットの祖先とカアバ聖殿……三
第二節　マホメット時代の宗教改革家……四

## 本論

### 第一章　修養時代に於けるマホメット

第一節　マホメットが運命の激變……四八
第二節　少壯時代のマホメット……五四
第三節　マホメットの結婚……六一
第四節　評論……七二

### 第二章　宗教家としてのマホメット

第一節　マホメットが宗教的煩悶……七六
第二節　預言者としてのマホメット……八四
第三節　マホメットの轗軻……九五
第四節　マホメットの出奔……一一〇
第五節　評論……一二一



### 第三章　政治家并に將軍としてのマホメット

第一節　殿堂の創建及ひ宗規の成立……一三五
第二節　マホメット創を拔いて起つベドルの戰爭……一三五
第三節　カイヌカア族の追放、オホドの戰爭……一四五
第四節　メジイナの包圍、コレイツアの慶殺……一五二
第五節　羅馬との交通海外の傳道……一六〇
第六節　メツカの征服……一六八
第七節　アラビヤ全半島を掌握す……一八一
第八節　評論……一八六

### 第四章　個人としてのマホメット

第一節　マホメットの妻妾……一九一
第二節　マホメットの家庭生活……二〇〇
第三節　マホメットの性質……二〇六
第四節　マホメットの病死……二一〇

第五節　總評……三〇
マホメット年譜

怪傑マホメット終

# 怪傑マホメット

忽滑谷快天述

## 第一章　總論

### 第一節　總序

マホメットが生れたる社會

マホメットは偉傑中の怪なるもの、雋髦中の珍奇なる者で、頗る其人物、性格等の說明に苦しむ所である。渠は眼に一丁字なくして能く流麗なる韻文を作り、動物的弱點を曝露しつゝ、能く預言者として神聖なる使命を果し、怯懦、爲すなきか如くして、能くアラビヤ半島を征服し、同種族にすら信認せられずして能く海外に布敎を試み、大慈悲の上帝を標榜しつゝ、能く慘虐なる殺人を決行し、一神敎を骨張しつゝ、能く荒唐なるアラビヤの傳說を信し、殆んと全アラビヤを掌握しつゝ、極めて單純なる生活に安んじた。換言すれば渠は無學の學者、

動物的預言者、怯懦なる勇士、慈悲なる殺人者、一神教的迷信者、一國の君主たる貧民、王國の建設者たる法師、天使と直接に談話を交ふる人間である。一言に之を約すれば渠は神性と動物性を兼有した怪傑である

惟ふにマホメットの全生涯は奮闘と成効の活劇である。渠が前半生は平和的奮闘で、後半生は武力的奮闘の歴史である。渠は其六十二年の短生涯に於て人生の所有苦樂を經驗した。渠は或時は可憐なる孤兒として近親の家に食客たるの悲況に沈み、或時はアラビヤの君主として威權赫々たる光榮を擔ひ、或時は富裕なる商估として遠く外國に貿易を試み、或時は三軍の猛將として萬馬千軍の間に馳驅し、或時は質朴なる牧羊者として悠々山野に從容し、或時は上帝の使節として新たなる福音を宣傳し、或時は天地の間に身の置き處なき逃亡人の辛苦を嘗め、或時は敏腕なる外交家として縱横の策をも講じたのである。從ひ而して渠は冷酷、石の如くにして殘忍なる殺戮を行ふたこともあり、又温乎たる春風の如くにして慈悲深き行ひをしたこともある。されば一方に於て非常に鄙陋なる悖德を行ふと同時に他方に於て非常に高尚なる道德を實踐したこともある。一言に謂へば渠が一生は多くの變化に富み、多事多端を極めたのである、



其結果として渠が言行の上に少なからざる矛盾を生したのは自然の勢といはねばならぬ。これ渠が怪傑の怪傑たる所以である

是を以てマホメットは一面より見れば菩薩の如く、他面より見れば夜叉の如く、一方より評すれば希代の聖人の如く他方より評すれば凡夫中の凡夫の如く見えるのである。これ古よりマホメットを評するもの、多く誤謬に陷り、又は斷案の千差萬別なる所以である。併し如何なる評家も彼が人傑たる點に於ては異議をいふものはない。又渠が牧羊者より身を起して現代二億に近き多數の信徒を有する大宗教の開祖と仰かれ、天地の間に身の置き所なき逃亡人より立身して其生存中、印度半島の五分の四もあるアラビヤ大半島を掌握し、武威を八紘に輝したる榮譽は實に豪傑中の豪傑として人類の史上に不朽の文字を刻したものである

## 第二節　マホメットの容貌風姿

マホメットは斯の如き人傑であるが、渠が體貌は如何樣であつたか、此點に就ては固より確實のことを知る能はざるも、比較的信憑すべき傳說によれば胸膈

の發達した肩幅の廣い、强壯なる骨骼と筋肉を有し、中等の身長で關節は堅く締り、四角形なる雙肩の上に大なる頭腦があつた頭髮は黑色にして少しく縮れて長く肩に垂れ、顏面は赤色を帶ひて、眉毛は長く、眉間には大いなる靜脈管が隆起して渠れが情に激したる時は其の鼓動が見えるのであつた、眼は熒々として長い睫毛の間より黑き光を放ち、鼻は下方へ曲つた、鉤鼻で、齒は能く揃ふたる白い齒で、髯も澤山に生ひて長く一種の威風を添へた。故に一見渠は凜乎たる威風があり豪傑に相應しき風采を有したのである。併し概して渠は溫柔にして寧ろ沈鬱に傾き哄笑放言することはなく、擧動は飽くまで平靜に寡言であつた、かく渠は沈鬱にして冥想がちなるに拘はらず、情に激したる時は滿面輝くばかりに赤くなり、また莞爾として微笑する時は乳兒も懷くべき一種の魔力をもつて居たといふ

渠の身體の常人に異つた點といふは其背部兩肩の間に鳩の卵の如き隆起があつた、これを『預言者の印』といふて回教信者はマホメツトが天の使命を帶びた證據としたのである。されど斯は實際一の黑痣に過きなかつた。また渠の手掌と足趾とは其面が區平であつたといふ傳說もあり、路を行くに後を顧みざる特徵があり、全身を以て人に向ひ決して頸を回らして人に向はぬ異風がある、其顏よりは預言者の光と稱する光明を放つたと傳へてある。以上によりて大略マホメツトの體貌を想見することができる。略言すれば渠は溫柔にして沈毅、平靜にして威嚴ある英姿を具へたのである



如何に人傑でもマホメツトはやはりマホメツトである、神でもない天使でもない。渠は大改革家である、渠は社會を改造した、渠は非凡なる宗敎家である、渠はアラビヤの宗敎を改善した。渠は非常なる英雄である、渠は大國民を建造し、大帝國を打ち立てた。併し渠はアラビヤ人である、東洋人である。渠は時代を超越した、併しやはり時代の產物である、東洋的、アラビヤ的人物たるを免れぬ

凡そ人傑と稱し英雄と稱する人々の社會に處する有樣を譬へて見れば恰も巨人が海中に立つたやうである。時代の思潮は大海の如く廣く深く流るる故に平々凡々の小人物は此潮流の中に出沒して、浮きつ沈みつ流されて行く、然るに大人物は其思想が高く時潮の上に出ること恰も、巨人が大海を徒涉するやうである。故に彼は浮きつ沈みつ流れ行く所の人々を救ひ出し、又は潮流の方向を觀

察してより善き方向に導ひくことができる。されど如何に大人物でも同しく潮流の中に立つて居るから其足を濕ほし、腰を濕ほすことは到底免れぬ。即ち如何なる英雄豪傑にありても其時代と國土との特色を帶ひて居らぬ者は一人もないのである。然れはマホメツトは如何なる時代に生れ、如何なる人民の間に生長したか、これより少しく説明して見やうと思ふ

## 第三節　アラビヤの風土

回教徒はマホメツト出世已前を『無智の代』と名つけて、神の光明に浴する能はざる黯黑の代といふのである、勿論、當時は無智蒙昧の氓が多かつたのは事實である。元來アラビヤは北緯三十五度より十三度の間に横はる斧頭形の半島にして氣候は炎熱燬くか如く、空氣は乾燥し、磽确なる火山脈あり、暴風飄々砂礫を捲いて吹き、半島の三分の二は人畜の生活に適せざる砂漠である。さればアラビヤ半島は砂漠の國、自由の國、獨立の國として全世界に比類稀なる處である。所は當該半島は崔嵬たる山岳及び不毛の砂漠多く、且つ驃悍なる蠻族の漂泊する荒野なれば、他の强國も之を征服することができなかつた。さればアッ



シリヤ（Assyrian empire）帝國も領土をアラビヤに得る能はず、ペルシヤの諸大王もアラビヤより單に乳香の朝貢を受けたるに止まりて之を屬國となすを得ず、カンビセス（Cambyses）の如きはイジプト遠征の歸途、アラビヤ人に請ふて辛うじて其土地を通行するの許可を得た。また歷山大王は印度征服の餘勢を以てアラビヤに闖入せんと計りたるも遂に其企劃を實行するに及ばずして歿し、羅馬人もシリヤに住せる二三の種族を征伏して從屬を强ひたれども半島本部には其手を下すこと能はず、アウガスタス、シーザアの時にエリアス、ガラス（Elius-Gallus）を將として深く半島に侵入したれども、忽ち水に渴し、疫癘に襲はれて大半兵卒を失ひ、何の爲すこともなくして退軍した。かゝればアラビヤ人は太古より他邦に從屬したることなく、自由獨立を充分に享有したのである

## 第四節　アラビヤノ人民

人民は大約二種に區別せられて、一は『天幕の民』と稱して遊牧を業とし、牛羊等の群と共に水草を逐ふて移住し、他は『城壁の民』と稱して都城の中に住し、耕作牧畜をなし商業を營むのである。前者は狡猾にして復讐を好み、代々異種族間

に殘忍なる爭鬪を繼續して、掠奪、强盜を逞くし、後者は平和に都會の中に住して通商貿易の爲め海外に往來し、平和を尙ひ、社交に馴れ、智識を得て多少文化をも啓發した。之に反して遊牧の民は太古の族長の如く牧畜を唯一の業とし、駱駝の乳を飲み其肉を食ひ、原人的蠻風に誇りて却て都城の民を輕侮し、其隊商を攻掠し、又は物品を强請して其欲乏を滿すを常とした。且つ數多の種族は群をなして砂漠を漂泊するが故に往々衝突を惹起して紛諍を極むる、而して若し同族の一人が慘殺せられ又は侮辱せらるゝときは全族は之が復讎をなすべき義務ありと信じて必ず血を見ずんば止まぬ、故に數代を累ねて慘虐なる爭鬪を繼續することがある。同時に彼等は自己の家族や同族との結合は極めて親密で最後の一食までも其同胞と共にし、最後の羊を殺しても其困難を救ふの義氣があつた

概して之を論ずればアラビヤ人は天禀の軍人である、彼等は强健なる體格を有し、勇氣に充ち、豪俠を好み酒色に耽る。而して其原因の重もなるものは其國の風土にある、何となれば砂漠の天は常に晴朗で、空氣は乾燥して著しく活力を與へ、萬里一望、廣濶の野は身體の鍛練に最も適したる天然の運動場である。



故にアラビヤ產の名馬が全世界に比類なき逸物なるが如く、人間の身體も彈力に充ち、意氣に富み、活潑にして健康なるが多いのである。また掠奪爭鬪は絕えず行はるが故に、何人も幼少より武技を講ひて自家の利益を保護せねばならぬ、是を以て彼等は弓矢の術に長し、劍槍を巧みに用ひ、騎馬の極意に達した者が多い、殊に彼等の頑健なる體軀は能く饑渴に耐へ、辛酸を忍びて交戰に從ふに足りたのである。彼等の弱點は復讎を喜び、戰爭を好み、殘忍にも血を流して省みない蠻風である。此惡碩向は彼等が平生駱駝の肉を喰ふより生じたものと想像された、何となれば駱駝は動物中最も惡意强く、長く恨みを忘れぬものである。加之、彼等は自由放縱を尊ひ、秩序と制裁を厭ひ、農業は彼等を土地に結合するが故に不自由として之を嫌ひ、政治法律の拘束を好まず、宗教の束縛さへ拋棄せんとし、偏へに自由放恣の行動を重んじた。また彼等は未來の觀念に乏しく、貯蓄心少なく、節儉を嫌ふて寬大に物品を他人に與ふるの德を貴んだ。されば畜財家を賤めたるアラビヤの俚諺に、『守錢奴の手よりは芥子の種子すら落ちず』、『守錢奴は其の家の鼠にまで銜をつく』、『守錢奴は螢火の如く、一として有用なる光もなく熱もなし』といふてある。之に反して彼等が慈

善と寛大とを奬勵したる俚諺に、『汝の寛仁の急流をして汝の手より逃れ出しめよ、而して其音をして汝の耳に達せしむる勿れ』といふてある。是の如く寛大を尚ふの風は回教勃興後も尚ほ熾んに行はれた。一例を擧ぐれば、或時三人の青年ありてメツカの神宮に集り、アラビヤ全土にて最も寛大なる人は誰なるかを論じた、時に第一の青年はアブドアラ(Abdallah)即ちマホメツトの叔父の子が最も寛大であると主張し、第二の青年はカイス、(Kais Ebn Saad Ebn Obadah)が最も大量であるといひ、第三の青年はアラアバ(Arabah)と名くるアウス族(Aus)の人が最も寛仁であると論し、激論の末、三人各實際に上記の三名士を訪ふて彼等の施與を請ひ、果して何人が最も寛仁大度であるかを實驗せんと決した。依て一人は先づアブドアラを訪ふた、時にアブドアラは適々駱駝に跨つて旅行に出發せんとしつゝあつた、之を見て彼は訴へた、『神の使徒の叔父の子、予は旅行の途上にありて窮乏しつゝあり』と。アブドアラは乃ち駱駝より下りて、駱駝及び其荷物を悉く彼に與へ、且ついふ『鞍下に結びたる劍は有名なるアリイ(Alyの son of Abu Jalib)の使用したるものなり、愼み守りて失ふこと莫れ』と。依て彼は駱駝を受領し其荷物を檢するに絹布の胴衣數枚と、金貨四千個あり、且つ劍は



更に大なる價値のものであつた。次に第二の青年はカイスを訪ふた時にカイスは適々午睡をなしつゝありたれば、カイスの僕は何物を求むるかを彼に問ふた。彼は旅行の途上に於て窮乏に陷りカイスの救助を乞ふと答へた。時に僕は『然れば主人を呼び覺さんよりは之を與へん』といひつゝ、金貨七千個を入たる財嚢を與へ、且『此家には此外に一も金錢なし』と確言した。其後カイスは午睡より起きて僕の處置を喜び之を解放して自由の人となし、且若し僕にして彼を呼び覺したらんには一層多くの金品を與へんものをといふた。次に第三の青年はアラーバを訪ふた、時にアラーバは盲目となりて二人の奴隷の肩に縋りつゝ禮拜堂に趣かんとて出て來つた。依て彼は困窮の爲め救助を請ふと語るや否や、アラーバは奴隷を離れて「兩手を拍ちて嘆息し、身に半錢をも所有せずして彼に與ふへきものなきを哀しみて涕泣し、且つ彼が杖とも柱とも頼みたる奴隷二人を與へんといふた。然れども彼は餘りに氣の毒に感して辭退したるにアラーバは必ず奴隷を與へざるべからずと主張し、若し彼にして之を受納せざれば奴隷二人を解放せんとて、最早奴隷の肩に縋らずして盲目探(ノラサグリ)に壁に憑り添ふて聖殿へ參詣した。かくして三人の青年は神宮に歸り、一同異議なくアラーバを以てアラ、

ビヤ第一の慈善者と確定したといふ。之によりて如何にアフビヤ人が寛大であつたかを知るに足ると思ふ

さればアラビヤ人は野蠻麤獷の氓ではあるが、其野蠻麤獷なる中にも一種の武士的氣風があつたのである。故に彼等が隊商を劫掠し物品を强奪するは亂暴狼籍なるは固よりいふ迄もない、されど其亂暴狼籍の中にも一種の名譽を重んする風ありて、人間本性の最も尙ふべき良心の發露を見るのである。其一例を擧くれば、强盜が路人の衣服を奪はんとするには先づ慇懃に其人に挨拶して『何卒其着物を脱いてください、私の妻が入用でありますから』といふ。依て路人は止むを得ず自ら衣服を脱して之を與へるといふ風である。若し其路人が婦女であるならば、强盜は其女に向つて衣服を要求し、遠く離れて他方に其顏を向けて、決して女の裸體を見ない。如何に亂暴な强盜でも女の裸體を熟視するやうな無禮をしないといふ。是所謂盜跖の仁義である

土民の蠻風中最も太甚しきは其女兒を慘殺することである。女兒の多くは生るゝや否や兩親は自ら之を殺害し、又五六歲迄生長して後も之を殺すことがある。而して殺害の方法は生き埋めにするが通例である。此の殘忍なる習慣の原因は、



一は家計の困難、二は敵に女子を奪はるゝを恥辱とすること、三は劣等なる種族に女子を嫁するは禁制なるより起つたものらしい。これに就て悲慘なる話しがある、或時オトマンなる者が其少女を生き埋めにしやうとして穴を掘りたるに、少女は已れが今殺さるゝとは知ずして、父親の髯に土の附着したるを見て、其愛らしい手で拂ひ落したので、鬼のやうな父親も涙の落つるを禁し得なかつたといふ

女兒の慘殺せらるゝは婦人の位置の極めて低かりしを證して餘りある。尤も婦人の中には天才なる名媛才姫ありて女詩人として敬重せられたる者もある、然れとも一般の婦女は悲況に沈淪して、何等の權利もなく、財產を相續することなく、其身體は良人の遺產として其相續者へ渡さるゝので養子が其養母を妻とするやうな不倫のことも生した。而して劣等なる種族は優等なる種族婦女を娶ることは禁せられた、されど同等のものにありては比較的自由に夫婦の撰擇が行はれて、通例良人は其妻の種族に入り、子女は母方の種族に屬するのである。夫婦の關係は極めて簡短で離合常なく、良人が隨意に其妻を離婚すると同時に妻も亦隨意に其良人を離婚する。又概して從兄弟姉妹は結婚すると定まつたや

うになつて姪といふ字と妻といふ字と殆んと同意に用ひられた。一夫多妻は到る處に行はれた、又一妻多夫も同時に行はれた、さればにやオム、チャリヂエ(Oumm Charijeh)といふ婦人は四十人の夫を有して有名な人物として知られ、バルクハルト(Burckhardt)は五十人の妻を有するアラビヤ人に邂逅したといふ

奴隷制度は當時盛んに行はれ、他種族の小兒を誘拐して奴隷に賣り、戰爭の捕虜は勿論、戰敗者は一族の子女財產を沒收せられて奴隷となることもある、而して婦女の奴隷は同時に妾として用ひられた。此外飲酒の惡風もあり、賭博も行はれて自己の財產を一擲して賭博に耽り、或は自己の自由を賭して遂に奴隷となる程の惡物もあつた

## 第五節　アラビヤの學術文藝

マホメット己前のアラビヤ人が嗜好したる文藝は散文と詩である。前者は個々に散亂せる珠玉に譬へられ、後者は絲にて穿かれたる瓔珞に比せられた。而して彼等は此二種の文藝に於て卓越せんと競ふたのである。就中、集會などの席上にて雄辯を振ひ、人民を慫慂して大なる企業を起さしめ、又は賢明なる忠告



を與へて危險を逃れしめたる者はクハテブ(Khateb)即ち雄辯家なる稱號が與へられた。彼等の文章は前後の連絡緊密ならず、單に辭句の壯麗と、簡約なる但諺的警句とを以て聽衆に訴へたのである。而して此方法に於ては全世界の國民中アラビヤ人に及ふ者はないと自負しつゝあつたといふ。詩は特にアラビヤ人の尊敬したる所で、或る異常なる事件起りたる時、婉麗典雅なる韻文によりて自己の意見を陳へ得る者は拔群の天才あり且高貴なる人と思はれた。彼等は普通の談話中にも有名なる詩人の佳句を引用するを常とした。かくして詩歌の力によりて一族の系統及ひ權利、偉人の功績、言語の精粹等は保存せられた。故に大詩人の出現は其種族の榮譽であるから或る一種族に卓絕した詩人が現れると他種族は公けに之を祝賀し、又は饗筵を張りて盛裝せる美人をして歌舞せしめ、其光榮を賀するのである。何となれば詩人の力によりて一族の名譽は大いに保護せられ其血統は記錄せられ、其言語は正確に保存せられ、其功勳は子孫に傳へらるゝからである。且つ道德上、經濟上、詩人の智識と敎訓とは一族の疑問を決し、異說を調和する模範である。而して各種族の詩人は互に天才を競ふ爲めに毎年オカーヅ(Ocadh)等の市場で詩人の大會が開かれ、一ヶ月の間詩歌

の競爭があり、其他捕虜の交換、普通の通商等をもするのである。かくして優等賞を得たる佳作は國王の寶庫に珍藏せられ al Moallacât と稱して尊ばれた、右の如き光榮を得たる七篇の詩が世に傳はつてある、又傑作の詩はイジプト產の絹布に金字にて記しメッカ市の神宮前に掲げたので al Modhahabat と稱したといふ說もある。併し此等の詩歌は多く斷片的のもので、格律も充分には定らず、また記憶力にて保存せられ、筆錄の術は未だ盛んに行はれなかつた

マホメツト已前にアラビヤ人の學びたる學術に凡そ二種ある、されど何れも學術といふ程の進步ではない、第一は血統及び歷史上の智識で、彼等は過度に血統を重んし、其種族の歷史的功業を湮滅せぬやうに努めた、故に斷片的、口碑的に歷史といふ學問を有したのである、第二は星學上の智識で、彼等は長い歲月に亘りたる經驗より此智識を集めたので、決して天文學の規則や、專門的の研究によつて得たのではない、アラビヤ人は印度人の如く恒星を觀察した。之に反して他の國民は惑星を觀察して之を崇拜した、グリース人など其一例である、アラビヤ人は星座によりて天氣の變化を預言した、彼等は星座をアンウア(Anwâ)と名づけて二十八あり、此二十八に分たれたるゾディアック(Zodiac)の一部を月球が每夜通過するといふのである。彼等は此等諸星の出沒と月の位置によりて經驗上氣象の變化に注目し、遂に某々の星よりは雨を降し、某々の位置に月球のある時は風多く、某々の時は寒く、某々の時は暖なりと預言した。彼等は後に到りて天文學に非常の進步をなしたれども回教前にありてはこれ以上の智識はなかつた、而して彼等が砂漠を漂泊し晝夜蒼穹を觀察する機會を有したのが明かに天文學發達の原因である



# 第二章　マホメツト以前の宗教

## 第一節　基督教と猶太教

基督教史を一瞥する時は早くも第三世紀に於て教祖エスの根本精神たる博愛、平和、慈仁の光明は漸く輝きを減し、其純潔なる教理に附帶せし熱誠、敬虔、献身の優美なる情は冷却して、いつしか乾燥煩瑣なる神學的議論となり、派を分ち說を異にして相爭ひ、其間、惡意醜劣の行は自然に發生して、渾然たる基督が宗教の驪珠は爲めに四分五裂、土芥と共に朽ちんとするの前兆を呈した。これ實に紀元三百二十五年の有名なるニシア會議以來東方教會にては例のアリ

アン派(Arians)、サベリアン派(Sabellians)、ネストリアン派(Nestorians)、及ひ其猛烈なる反對派、ユウチキアン派(Eutychians)なと絶えす評論に從事し、其後屢々異說を排斥せんが爲めに開かれたる宗教會議に於ても僧侶は我見を維持せんが爲めに或は賄賂を行使し、或は軍人に結ひ却て腐敗を助長するのみであつた。之と同時に西方教會に於てもダマサス(Damasus)とウルスシイナス(Ursicinus)の如きは監督の椅子を爭ひて凶暴なる虐殺の手段に訴へ、知事も之を如何とする能はず、一日百三十七人以上の生命を犧牲にして前者の勝利に歸し、一朝其位置を占むるや豪奢銅臭、四馬を驅り、轎輿に乘りて倨傲尊大に振舞ふたるか如きは全く教祖エスの精神と矛盾したる非法である。然而して如上の評論と非法とは羅馬歷代の帝王之を奬勵したるやの觀がある、殊にコンスタンテアス(Constantius)及ひヂャスチニアン(Justinian)の如きは最も太甚しく、後者の如きは自派と異見を異にする者を殺戮するを以て正當の行ひと思ふたのである。斯くして基督教宗派は互に相迫害して寧日なかりしか故に同教徒にして難を遠く東洋に避けてアラビヤの砂漠に入り來る者を生し遂に各種族の間に傳播したのである

されはマホメット以前に基督教はアラビヤに多少の勢力を扶殖した。例せばエ



メン(Yemen)王國即ちメッカより東南方に位置して印度洋に瀕し、豐饒と富裕と氣候の爽快を以て有名なる地方の如きは第三世紀に基督教を奉したる王ありて之を統御した、されど人民の一部は基督教を信し、一部は異教徒であつた、依て基督教徒の猶太教徒との間に評論があり紀元五百二十三年以前に同國の一部なるナジラン(Najran)には多くの基督教徒を生した。傳說によればハムヤル(Hamyur)の猶太人が近隣の基督教徒に宗論を挑み、國王、貴族、及ひ公衆の面前にて三日間討論をした、此時基督教の代表者はテフラ(Tephra)の監督グレジエンチアス(Gregentius)といふ者で、猶太教の勇將はヘルバナス(Herbanus)といふ人物であつた。而して第三日に至りてヘルバナスは下の如く難問した、『ナザレのエスが果して天國に在りて信者の祈りを聽くとせば我等の面前に下りて其身を現はせ然らは我等は之を信せん』。猶太人等は大に喜び、『いざ汝の基督を見せよ、然らば我等は基督教徒とならん』と叫んだ。然るに不思議なる哉、一天俄かに曇りて雷鳴霹靂と轟き、電光は空中に閃きて眼を眩するばかり、紫の雲靄(タナビ)きて、基督は天より下り全身より光明を放ち、頭には寶冠を戴き、手に劍をとりて、音吐朗々として宣り給ふた、『見よ、吾、汝の眼前に現はる、吾は汝等の祖先に磔殺

せられたるものなり』。此時基督教徒は一齊に『主、我等を憐み給へ』と叫び、猶太人は皆盲目となつてしまうた。而して彼等は悔い改めて洗禮を受け、辛うして視力を恢復したといふてある。此傳説にて察せられる如く當時エメンには基督教徒が他教徒と雜居したのである。紀元五百二十三年頃に即位したる猶太人のドゥ、ナウアス(Dhu Nawâs)王は基督教徒を虐殺したるに隣國イジプトのアビシニヤの王アブラハ(Abraha)は基督教信者であるから之れを聞いて大いに怒り、大軍を以てドゥ、ナウアスを殺し、基督教を國教として主府サナア(Sanaa)に禮拜堂を建設した。又アブラハはメッカ市の神宮を一掃し、異教を根絶せんとする目的にて紀元五百七十年に大軍を以てメッカを圍みたるも、軍中に疫病が發生して十中の八九は斃死して、戰はずして大敗した。これがマホメットの生れた年の出來事である。又アラビヤ北方にありてはガアッサン(Ghassan)とヒラ(Hira)の二王國があつた。當該二國の建設は比較的新しいのである。アレキザンタア大王の時代より少しく後れて、紀元第二世紀にエメン王國に大洪水があつた、これをアラム(Aram)洪水と名けて非常に有名なものである、此洪水にて一夜の中に貯水池の堤塘が破壞して八個以上の種族が全く住處を失ふた、爲めに彼等は



止むなく北方に移住してガアッサンとヒラの二王國を建はつるに至つたのである。而してガアッサン國は紀元三世紀にアズド(Azd)族によりて建られ、羅馬の勢力範圍であつた、是に於てコンスタンチン大帝の時に基督教は此地に輸入せられて國教となつた。またヒラ王國は洪水後、エメンの移住民に建設せられアズド族の領有となり、ペルシャより文明を輸入して同國の附庸の狀想に陷つた。第五世紀にヌマン(Numân)第一世なる王が基督教を輸入して其保護政策の下に頗る勢力を得た、然れとも其後コンスタンチノープルと難を構へた爲め基督教徒は迫害せられつゝあつて、紀元五百二十四年に始めてヂャスチン(Justin)第一世の盡力に依り辛うして迫害を免れた。同時にエメン王國よりナワアス(Nawas)王の虐待に耐へずして逃亡し來る人多くして再ひ同教の勢力を強めたのである

かくして基督教は中央アラビヤ民族の中に擴布せられて、アクラ(Akula)、ヒラ(Hira)、ナヂラン(Najran)、ダフアル(Dhafâr)、などに監督が居つたのである、殊にナヂランの監督コス(Coss)はマホメットが其説法を聞いた僧である。併し當時アラビヤに行はれたる基督教は純粹なる教理でなく、極めて腐敗したものであつた。例せは或者は人間の靈魂は身體と共に死し、審判の日に復活すると信した、

これはオリジエン(Origen)の邪説だといふ。其外、エビオン(Ebion)の邪説、ナザリエン(Nazareans)派の妄信も行はれ、殊にコリリディアン派などは基督の母なるマリヤを神として拜した、此派は重もに婦人の間に行はれた。然れどもマホメット以前の基督教の勢力は微々たるもので、却てアラビヤ以外のシリヤ、イジプトのアビシニヤなとに盛んに行はれたのである

眼を轉して猶太教は如何と見るに、マホメットより七百年以前にエメンの王アブ、カルブ、アサド(Abu Carb Asad)なる者が猶太教を輸入し、種々なる同教の傳説、儀式、などは知られてあつた。其後聖府ジエルサレムの破壞されてより、多くの猶太人はアラビヤに殖民し、各地に都會を建て、部落を形成し、土人と雜居して一大勢力となつた。加之、彼等の傳説とアラビヤ人のそれと大約符合する故に自然人心に入り易くして諸種族の間に行はれ、エメンの王ドゥ、ナワアス(Dhu Nawas)即ちユセフ(Yusef)王の如きは非常に熱心なる信者となり、猶太教を奉せざる者を迫害し王命に遵はざるものは火坑に投入して之を燔殺するを常とし、殊にナヂランの基督教徒を慘殺せしが故にアビシニヤ王アブラハは大軍を以て惡王を討ち追擊して遂に海に投して死せしめた。これは紀元五百二十三年



頃であつたといふ。かくして猶太人は容易ならざる勢力があつたから、マホメットは最初猶太教の教理、習慣等を採用して彼等を懷柔せんと試みた、然れども彼等は頑冥にして容易に改宗せざるのみにあらず、却て回教の一大勁敵となつて、幾多慘劇なる血戰の後、回教徒に降伏したのである

## 第二節　アラビヤの舊宗教

『無智時代』即ちマホメット以前、アラビヤ人の多數はサビアン宗(Sabianism)を信奉した。同宗は無上神の存在を信し、天體を拜し、天使即ち天體の中に住する小神ありて無上神の治下に立ちて人世を支配すると信し、また來世の賞罰をも確信して德行を脩めて以て永久の幸福に入ることを教へたのである。然るに純粹なるサビアンの信仰は何時しか墮落してアラビヤ人は恒星、遊星、天使、偶像を神として崇拜し、無上神の媒介者として之に事ふるに至つた。彼等は無上神を以て造化の主となし、最高神(Allah Taala)と名け、其下位にある群神を單に女神(Al Ilahat)と稱したのである、此等女神はまた神の伴侶とも名つけられ、神の命令の下に立つと信せられた。此の如くにしてアラビヤ人は無上神よりは寧

ろ女神を直接に崇拜し其偶像を重んするやうになり、犠牲を供するにも女神の偶像には重くして無上神に輕くし、女神には良好の物を捧くるも無上神には粗惡の物を供へて怪まぬ、是に於てマホメットは慨然として無上神の信仰を復古せんとの志を起したのである

回教の聖書コラーンの中に三女神の名が記してある、これは皆當時『神の娘』と呼はれ、信者と神の中間に立て天惠を媒介するものと信せられた。其第一はアラート(Allât)とで、此女神はタイフ(Tayif)の人に祭られナクラ(Nakhla)なる所に宏大なる殿堂があつた。併しマホメットが回教紀元第九年に之を破毀した、此時タイフ人殊に婦女子は此偶像を毀たるゝことを痛く悲みて、三年間の猶豫を願つたが許されず、更に一ケ月の猶豫を悃請したが聽かれないで破却されてしまうた。第二の偶像はアル、オッザ(Al Ozza)で、コレイッシ族(Coreish)ケナーナ族(Kenânah)、サリム族(Salim)などの崇拜したものである。一説にこれは肖像ではなくて護謨樹で、ガトフハン族(Ghatfan)が禮拜した、而してダアレム(Dhalem)なる者が始めて之が爲めに拜殿を建てたといふ。此偶像は回教紀元第八年に回教軍の爲に殿堂は燒かれ、樹は斫られて之を守護し居りたる尼僧は慘殺され、ダアレムは誅罰せられたといふ。第三の偶像はマナア(Manah)で、ホドハイル族(Hodhail)、クハザー(Khazâah)族アウス族(Aus)、カズラジ族(Khazraj)、トハキイフ族(Thakif)などの崇拜した神である。此偶像は大なる石であつたが回教紀元第八年に破毀せられた。此外にコラーンに其名を記載したる偶像が五個ある、第一はウァッド(Wadd)といふて天を象つたもので。人形の肖像である第二はサウア(Sawa)で婦人の肖像である、此像はノアの洪水後水中に沒してあつたのを惡魔が發見し、ホドハイル族(Hodhail)が崇拜したと傳へてある。第三はヤグフス(Yaghûth)で獅子の形に作られ、エメン人の多くが崇拜した。第四はヤアウク(Yaûk)で馬の形の偶像である。第五はナスル(Nasr)で、鷲の形に作られた偶像である。以上はコラーンに名を記載してある偶像のみであつて、更に此等の外に數多の偶像があつて、メッカ市なる神宮には三百六十以上の偶像があつた、即ち一年の日數と同じだけの偶像が安置してあつたのである。加之、個人の私宅にも偶像があつて家人が出入に禮拜する、風俗もあつた。メッカの神宮の偶像中、主要なるはホバル(Hobal)で、これはアムル(Amru Ebn Lohai)といふ者がシリヤのベルカ(Belka)といふ所から將來した神である、此神に祈る時は如何なる旱魃にも雨が降ると

信せられた、肖像は瑪瑙石で人間の形に彫まれ、一本の手が折れたのをコレイツシ人が黄金で作つた。此像は手に七本の箭を持つて居る、アラビヤ人は之を神圖として用ひるのである

ホバルの持つて居る箭は羽のない箭で、人民が先つ神を祈つて神意のある所を知らん爲めに此箭を探つて抽きとり以て是非を決するのである。通例神圖をとるには三本の箭を用ひる、而して一本には『神汝に命す』と記し、一本には『神汝に禁す』と記し一本は何も記してない。そこで人民が重大な事件に遭遇して自ら決し兼る場合には此神圖を探つて神意の贊否何れにあるやを決定する。これに就て笑ふべき話しがある、或時一酋長が其親の虐殺されたのを殘念に思ふて復讐しやうとして神圖をとつた、彼は三本の箭の中、一本は『禁す』一本は『命す』、一本は『猶豫』として神圖をひくと、『禁す』といふに當つた、依て滿足ができぬから再ひとり直すと同しく『禁す』と出た。再三ひき直すとやはり『禁す』と出た、是に於て酋長は大いに怒りて箭を寸斷して偶像の面上に抛ちて叫んだ、『此腐れ神、若し汝の親が殺されたなら、汝は復讐を禁じまい』といふた。此說話によりてアラビヤ人の信仰の程度も略ぼ察せられるであらう。アラビヤにて最も奇異なる偶像と



いふはハニフア族(Hanifa)の崇拜したる麵包の粉を揑ねた塊である。如何なる理由かは知れざるも彼等は之を尊んで饑饉の時にあらざれば敢て之を食はなかつたといふ。斯の如くアラビヤ人の大多數は宗教上洵に憐れむべき墮落をなしつゝあつたのである

サビアン宗の信仰は重もに半島の內部に行はれ、半島の外部、殊にペルシヤ人と交通したる土族の間にはマジアン宗(Magianism)即ち火教が行はれた、而して火教の制度が回教に及ぼした影響も看過すべからざる點がある

之を要するにアラビヤ人の宗教は極めて幼稚で、椰子の樹に美服、裝飾品、武器、卵などを懸けて祭るもあり、石塊の崇拜も熾んに行はれ、偶像は勿論、ジン(Jin)と稱する魔神の存在を信じた。ジンは火を以て其身體を形成したる鬼神で、毛髮多く、種々に變形して荒野山林に住し、時としては人家の浴場、井泉、竈などに侵入して害をなし、人に憑いて災を與へるものと信せられた。神を祭るには牛羊駱駝を殺して犧牲とし、其肉を野獸に與へ又は自ら之を食ひ時としては人間をも犧牲とした。人の死する時は其墓地に駱駝を繫きて餓死せしめ、死者の騎るものと信し、又死者の頭腦に近き所の血液は化してハアア(Hâmah)と

名つくる鳥となり、百年に一度其墓地に來ると信し、又横死を遂けたる人の魂は梟となりて絶えずオスカニ(Oscini)と叫ふ所は『飲むものを與へよ』との意で復讐の血に渴くから、復讐をしてやらねば成佛ができぬと信したのである。然れども多くのアラビヤ人は造化の神を信せず、萬物は自然に化成したりと思ひ、人間死後の生活を信せず、物質主義に走り死を以て萬事休すとして、現世に快樂に耽るを好んだ。故に彼等の詩人が好んで詠した題目は戰陣の興味、冒險的旅行、龍馬、駱駝の逸足、利劍、鋭槍、剛弓、電雷の霹靂たる、風雨の蓼々たる、古戰場、美人などにて宗教的敬虔の詩は殆んとないのである。例せば

『燒ける肉、火の如く赤く輝ける酒、駿足の駱駝に跨りて思ふ儘に荒地を縱横に奔馳する、色白き婦人が肖像の如くにて金色の緣ある、美服を著たる、資財、安逸、無病、琵琶の音の訴ふるが如き、此等は人生の快樂なり、人は時の餌にして、時は無常なり、人生は大なるも小なるも富めるも貧しきも時に於ては皆一なり、人は皆死せざるべからず。』

と歌ふて現世の快樂に耽たのである。



## 第三節　カアバ聖殿に關する傳說

全アラビヤ半島中にて最も神聖なる處はメッカ(Mecca)市である、這は回教勃興已前より聖市として土民に尊敬せられ、毎年無數の巡禮者は此所に蟻聚して拜禮を行ふが故にメッカの殷富は爲めに非常であつた。何故にメッカは聖地であるかといふに此の市中にカアバと名つくる聖殿があるからである。抑もカアバ(Kaaba)建設の由緒を原るにアラビヤ人の口碑に傳ふる所下の如くである

人類の祖たるアダム、イブの二人か神に背いて天國を追放せられたる時、アダムは錫倫島に落下し、イヴは紅海の岸なるアラビヤのジオダ港(Joddah)の所在地へ落ち、其後二百年間夫妻相離れて悔恨懊惱の歲月を送り、遂に神に許されてメッカ市の近傍なるアラファト山(Arafat)にて再會することを得た。此時アダムは痛く先非を悔い、天を仰きて神に謝し、且つ天國に於て天使が巡回しつゝ禮拜する神の聖殿と類似せる拜殿を授けられんことを神に祈つた。是に於て天より光明赫灼たる雲にて形成せられたる神殿が地上に下された。依てアダムは此神宮に向つて禮拜し、且つ毎日七回つゝ其周圍を廻りて拜すること猶ほ天國にて

天使の爲すか如くした。然るにアダムの死すると共に雲の神宮は天國に歸り去つたが、アダムの子セッ(Seth)が之に摸擬して土石を以て神宮を作つた、此土石の神宮はノアの洪水の時沒落して其跡を拂ひ、其後アブラハムの妻ハガル(Hagar)が其子イシメイル(Ishmael)と共に砂漠に漂泊して將に渴死せんとする時に天使が現れて以前の神宮の在つた處に湧き出つる井泉あるを敎へた、此清泉はゼムゼム(Zem Zem)と名け今日までイシメイルの子孫と稱するアラビヤ人によりて神聖として尙ばれつゝある。イシメイルは此所にて土人と婚して多くの子孫を生しアラビヤ人の祖先となつたと傳へてある。また彼は神の命によりて神宮を再建せんと企て其父アブラハムの幇助を得て之を完成したのである。かくして神宮を建築しつゝある時、天使か神聖なる一個の石を彼等に與へた。一說に此石は天國の石でアダムと共に地上に落ち、洪水にて泥濘の中に沈んだのを天使が取出して彼等に與へたといふ。又他の說には此石は天國にてアダムを看守すべき任務を帶ひた天使であつた、然るにアダムが罪を犯したるか故に天使も不注意の罪によりて石に變形せられアダムと共に天國より拋け下されたといふ。何れにしてもアブラハムと其子イシメイルは大いに悅んで此石を神宮の外壁に挿



んで信者をして接吻せしめた。かくして最初は光輝ある白石であつたが罪深き人民が多く接吻した爲に今日は黑くなつたといふ。これがメッカ市にあるカアバの神宮及ひ黑石に關する傳說で、固より信を置くには足らぬけれども如何にも神宮の起原が古いことは想像せらるゝ。

カアバ(Kaaba)とは方形の家といふ意で、不規則なる長方形の建物である。長さは四十尺より五十尺あり、廣さは三十五尺より四十尺に及ひ、高さ凡そ四十尺である。美麗なる灰色の花崗石にて疊み中央を空虛にしてある。所謂神聖中の神聖として信者の接吻する黑石は不規則なる卵形の石で、高さ六インチ、廣さ八インチあり、赤黑色を帶ひ、表面は凸凹して、十五個の突出點と一個の穴あり、周圍に水晶の如き小なる尖出物があつて、表面は接吻や摩擦で滑かになつて居るが一見噴火山の鎔化石らしいといふ。一說には隕石であるともいふ。當該黑石はカアバの東南隅に挿まれ地上四五尺の所にありて接吻に便にしてある。此神宮の中央にホバルの大偶像が安置せられ、外部に三百六十以上の偶像がある。此神宮の傍にゼムゼムの神泉があつて清き飮料を市人に供給する。されはメッカ市は此聖殿と神泉の存在する爲め聖市として全アラビヤ人に尊敬せられ、

マホメツト以前より毎年巡禮者の群集する處であつた

# 第三章　アラビヤ舊宗教とマホメツトとの關係

## 第一節　マホメツトの祖先とカアバ聖殿

回教の聖府にして教祖マホメツトの胡郷なるメッカ(Mecca)市は世界最古の都會中の一にして、其市内に有名なるカアバの神宮あるを以てアラビヤ宗教の中心であつた。メッカはベッカ(Becca)とも名け共に集會所を意味する名稱である、四面は山を以て圍まれ、磽确不毛の地で、南北の長さ大約二哩、廣さ一哩、其中央に石造の市街が建てられてある。此地の近傍にアブラハムの妻、ハガルが其子イシメイルを伴ふて漂泊し來り、將に渴死せんとする時、適々清泉を發見して此處に居住し、またカアバ神宮を創建したといふのである。元來メッカには一も飲用に供すべき清泉なく、井水は皆、鹽味と苦味とを帶ひて長く之を飲用する時は皮膚に風疹を生する。而して單一なる飲用水は、イシメイルの時に始めて濆出したりと稱するゼム〳〵の神泉のみである。故に住民は多く雨水を集めて飲用に供するのである。されればカアバの神宮とゼム〳〵の泉とが神聖視せ



られたるも決して偶然ではない。加之、メッカの地は不毛にして果穀の生産に乏しければ勢ひ商業によりて生計を營まねばならぬ。是を以て毎年無數の巡禮者が半島の各地よりカアバの神宮に來ると同時に通商貿易の市場を開き、又は隊商を組織してシリヤ地方へ遠征するのである。故にカアバの神宮はメッカの隆昌殷富を致すべき基礎であつたのである

マホメツトの種族即ちコレイッシ(Coreish)人はイシメイルの遠裔で長くメッカ市に殖民しカアバの神宮を監理する權利を有した。然るに紀元前第一世紀の項ジオル、ハム(Jorham)族が强大となつてコレイッシ族の特權を强奪して一時暴威を逞うした。其後紀元第二世紀にエメン王國より土民の大移住があつて、彼等の一部なるクゥザア族(Khozāa)がメッカ近傍に止住し、次第に勢力を得てジオルハム族を壓迫し、第三世紀には全くジオルハム人をメッカの市外に驅逐した。此時ジオルハムの最後の君主が市外に退去するに際して甲冑、武器、黃金の羚羊等の寶物をゼム〳〵の井泉に投入して去つた。かくしてクゥザア族は殆んど二百年メッカを支配し、神宮の瑣細なる儀式はジオルハム人に委任して置いた、當時に多くの偶像が神宮に安置されてらしいのである

然るに第五世紀に至りてコレイッシ族にコスサイ(Cossai)といふ英雄が出てクッザア族に大打擊を加へ、武力によりてメッカの全權を掌握し、再ひ神宮を監理する權利を恢復した。コスサイはメッカの政治上宗教上の特權を一身に集め、森林を拓いて市區を擴大し、散亂せしコレイッシ人を集めて市中の要處に住せしめ、且つ彼は神宮に接近して一の會館を建築し、之を社交上、政治上の中心點とし自ら之を監守した。即ち平時には會館を以て毎年隊商の出發點及ひ歸着點とし、或は處女の元服、又は青年男女の結婚を擧ぐる所とし、或は長老輩が公務を議する議事堂として用ひ、戰時にありては軍旗を此所に揭揚して、コスサイより之を旗手に交附するのである。次にアラビヤの舊法によりて毎年十一月、十二月、一月、七月の四ヶ月は聖月として休戰するのであるが、メッカの主長は一月の代りに二月を臨時聖月に轉用する特權があつた、此特權に加ふるに神宮の鎖鑰を保管し、巡禮者に飲食を供給するの權を自ら獲取した。其結果としてメッカ及び近隣の種族の君主となり、半島に有名の酋長となつた、此コスサイがマホメットの第五代の祖である

コスサイより傳はりたる宗教的儀式はマホメットの時に少しく訂正せられて今

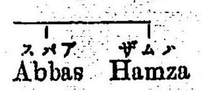


日尙ほ行はれつゝある。即ちカアバの神宮を七回廻りて黑石に接吻し、その上更にサフア(Safa)山とマルワ(Marwa)山の間を疾歩して七回往復するのを小廻禮といひ、更にアラファト山(Arafat)と名つくるメッカ東方十二哩の地に至り、之に攀登して後、歸りてミナ(Mina)山谷に於て小石を投するを大回禮といふ。かくして巡禮を畢れば髮を剃り爪を斫り、犧牲を殺して全く儀式を結了するのである。以上の如き宗教的儀式はアブラハムより傳承したといふのである。史家ヘロドタスがアリラト(Allat)をアラビヤの神として記したるを見れは彼の時代に最早(Allat)の信仰が行はれたるを知るべく、アラビヤの宗教は其淵源極めて遠いことを推想すべきである。またカアバの神宮も其起原は甚た古くして紀元前五十年頃にディオドラス、シカラス(Diodorus Siculus)の記した所によれば『アラビヤに土人の非常に尊敬する殿堂あり』とある。これ恐くはカアバを指したものであらう。开は兎も角もカアバは紀元前一世紀頃ヂョルハム族がメッカに全盛を極めた時には確かに存在したのである

上述の如くコスサイが宗教及ひ政治上の權利を掌握したるは紀元五世紀の中頃であるが、彼は老年に至りて總ての特權を其長子アブド、アル、ダル(Abd al Dar)

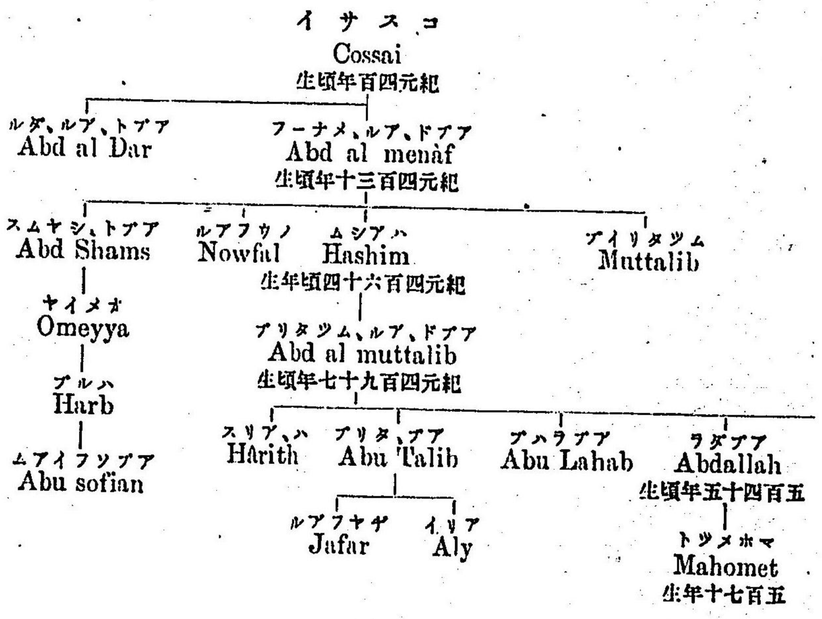
に讓つた。然るに其弟なるアブト、アル、メナーフ(Abd al Menaf)といふ者は其兄より優れた人物であつたから實權は却て後者に歸した。是に於て第六世紀の始めにダルの孫が此等の權利を相續せんとした時、メナーフの子息等はハアシム(Hashim)を巨魁として之に反抗し、一門の親戚は二派に分裂し、加ふるにコレイツシ全族は齊しく二派に分れて各々一方に左袒し、將に陣列を整へて兩虎の相搏たんとする危急の刹那に至りて平和の條件が成立して干戈を動すに及はなかつた。平和の條件といふはダルの子孫は神宮の鍵子を保管し、會館の統率をなし、軍旗を掲揚する權利を得。メナーフの子孫は巡禮者に飲食を供給する權利を得た此評論は洵に瑣細なる出來事なれども、之より後に生したる一家の分裂はマホメットの位置と回教の運命とに大關係を及ほした。依て吾人はコスサイよりマホメットまでの血統を記して豫め讀者の注意を乞はねばならぬ、略圖は下の如くである。

●注意日本字は右より左に讀むべし●






## マホメット系譜



斯くしてハアシムは充分なる飲用水を貯へて巡禮者に供給し、自己の富裕なる資産を喜捨して食物を惠與した、而して他の同族も之に倣ふて寛大に巡禮者を優待した爲め大いにメッカの聲望と繁榮を高めた。且つ彼は饑饉の時シリヤより多量の糧食を購ふて人民に給し、駱駝を屠りて其肉を配分し、永く人民の恩人として記憶せらるゝの名譽を博した。而して彼の同胞はアビシニヤ、ペルシヤ等の海外の諸國と通商旅行の條約を結ひ、ハアシムも亦羅馬の官吏及ひガッサン王と約してシリヤの通商旅行を安全にした。加旃、彼は毎年二回隊商を派遣する組織を確定した、即ち冬期にはエメン國及びアビシニヤに通商し、夏期は北方シリヤに商業的遠征を試みるのである。ハアシムの旭日の如き名譽は深く其甥オマイアの妬心を刺戟した、彼は少年なれども頗る資産に豐かなるを以て金品を浪費してハアシムと競爭を始め、公然優劣を爭ふて失敗し、五十頭の駱駝を科料として取られ且つ十年間アビシニヤへ追放せられた。これが抑もハアシム家とオマイア家の激烈なる諍鬪の發端となつたのである

ハアシムは老年に及びて、同族と北方に商業旅行の途に上りメジイナ市に行き、市場にてサルマ (Salma) と名つくる婉妖にして敏捷なる寡婦に邂逅した、サルマ



はクハヅラヂ (Khazraj) 族に屬し、血統も資産も兩なから具つた婦人である。依て彼は之を娶りて大饗宴を張り、夫妻相伴ふてメッカへ來り暫時滯在して其後サルマは胡鄕のメジイナに還りて一子を生んだ、これが有名なアブド、アル、ムッタリブでマホメットの祖父である、時は大約紀元四百九十七年頃であつたハアシムは其後通商的旅行中シリヤで逝去し、一切の權利を其弟ムッタリブに讓つたが、ムッタリブはハアシムの幼兒が其母を離れ得るに至るや否やメジイナより之を伴ひ歸つた。然るにメッカ人は、ハアシムの子なるを知らずして幼兒をムッタリブの奴隷と誤認し、アブド、アル、ムッタリブ、即ちムッタリブの奴隷と呼んた。そこで此人はアブド、アル、ムッタリブとして有名な人物となつた。彼が幼穉のうちに叔父のムッタリブが盡力してハアシムの一切の遺産と特權とを彼に與へた。然るに伯父のノウファル (Nowfal) は横暴にも之を妨碍し腕力に訴へて權利を强奪した。是に於てアブド、アル、ムッタリブは成人の後、自己の特權を恢復せんが爲めに援助をコレイッシの同族に求めたるも要領を得なかつた、そこで彼はメジイナ市に居住する外戚に書柬を以て依頼した。依てメジイナより八十人の騎馬武者が來つてノウファルガ同族の酋長等と神宮に居る

處へ迫り劍を以てノウファルを刼かし、彼が强奪したる特權を少ムッタリブに還さしめた。併し尙ほムッタリブは微力にして同族の反抗に勝つ能はず、子息も男子が僅かに一人で充分權威を張ることができなかつた。此時に方りてメッカの商業は幾百年間沈滯に沈滯を重ね、ゼム〳〵の神泉さへ拋棄せられて全く塡塞し、何人も其位置さへ知るものがなかつた。アブド、アル、ムッタリブは再ひ此神泉を發見せんと企て多くの勞働を厭はず遂に目的を達し、其子ハリス(Harith)と共に之を發堀したるに、黃金の羚羊二個、寶劍、武具等を見出した。これ等は三百年前にジオルハム族の王が投入したものである。時にコレイッシ人は彼の幸運を妬み、寶物を分配せんとし、又神泉は共有物とせねばならぬと主張した。然るにアブド、アル、ムッタリブは彼等の背理なる提言を排斥する實力がなかつた故、有名なホバル(Hobal)神の圖をとりて諍論を決し黃金の羚羊、は神宮へ納め、他の寶物と神泉はムッタリブの所有に歸した。かくして彼は一方には名譽を高め、一方には富を增した。之れと同時に彼はホバル神に祈りて十人の男兒を得、以て强大なる一族を造らんとした。而して若し幸にして十人の男兒を得たなら其中の一人を神へ犧牲に供するといふ誓願をした。すると不



思議にも目的の如く十人の男兒が生れて一族の大繁榮を來した。依て一子を神に捧くる爲め、圖に男兒の名を記さしめて、神意を探ると彼が最愛の一子アブドアラ(Abdallah)に當つた。然るに彼の子女等は痛く之を哀みてアブドアラを殺すことを諫めた。依て彼は十頭の駱駝を以てアブドアラに代へんとして神意を探りたるに神は之を好まぬ、そこで二十頭に增したがそれでも神が承諾せぬ、遂に三十頭に增し四十頭に增し、最後に百頭に增した時、神意はアブドアラの賠償を許した。是に於て百頭の駱駝を殺して神を祭り、メッカ市民を饗し、禽獸にまで殘肉を與へた。かくして生命を救はれたるアブドアラは即ちマホメットの父である。而してムッタリブの威權と聲望の旺んなるに從ふて其父ハアシムの時の如く、オマイヤ家の妬む所となり、同家のハルブ(Harb)は公然競爭を開始したがムッタリブの優越なることは認められ、再ひハアシム家、オマイヤ家の恨みを深くした。ムッタリブは更に自家の安全を保護する爲めメッカに居住するクォザア族(Khozaa)と防守同盟を訂結して神宮に揭げた、此時オマイヤ家の人は少しも之を知らなかつたのである

紀元五百七十年アビシニヤの王アブラハ(Abraha)は大軍を率ゐてアラビヤへ闖入

した、彼は熱心なる基督教徒にしてエメン國のサナア(Sana)市へ莊嚴なる禮拜堂を建てアラビヤ人の信仰を此所に集めんとした。然るに舊宗教の勢力昌んにして人民は皆カアバの聖殿に蟻集するが故にメッカの神宮を粉碎し武力を以て異教を壓伏せんと期したのである。アビシニヤ軍は途中アラビヤの小種族を擊破し破竹の勢を以てタイフ(Tayif)に來り、將に三日程にしてメッカに達せんとした。此時タイフ人はメッカの隆盛を嫉み、彼等はカアバの神宮と一も關係なしと公言し、剩へ一人の案内者を出してアビシニヤ人を導いた、依てアブラハ王は使節をメッカに遣はしていふた、『予はメッカ人に危害を與ふるを好まず、予が唯一の目的はカアバの神宮を毀つにあり、此目的にして成就せんか予は血を流さずして退くべし』と。時にメッカ人は武器を執て侵入軍に抵抗するの力なくまた神宮を毀たるゝを見るに忍びず、故に酋長ムッタリブを起して自らアビシニヤ軍に使せしめ以て談判せんと試みた。アブラハは大いにムッタリブを優遇して其好意を迎へたるもカアバを破壞せんことを主張して止ます。是に於てムッタリブはメッカより多額の償金を與へて神宮を毀つことを免されんことを請ふた。然れともアブラハは斷然之を峻拒して談判破裂となり、ムッタリブはメッカ人を



率ゐて近傍の山間に退き靜かに逆運の頭上に落ち來るを待ちつゝあつた彼はメッカを去るに臨んで神宮の門に倚つて神を祈り『神よ汝の宮殿を守り給へ、十字架をしてカアバに勝たしめ給ふな』といふたと傳へてある。然る間に激烈なる天然痘がアビシニヤ軍中に發生して日々多數の慘死者を生じ流石にアブラハの大軍も疫癘の猛威に敵する能はずして退却したが、途中にて山谷の間に斃死するもの數を知らず、殆んと全軍を擧けて疫神の犧牲となり、アブラハ彼自身もサナアに歸りて歿したといふ。這はアラビヤ史上有名なる大事變にして象の年として知られてある。开はアビシニヤ軍が一頭の象を用ひたるにアラビヤ人は始めて象を見たので大に之を奇異とし、アビシニヤ軍を象軍といひ、其指令官を象將軍といひ、其歳まで象の年といふたのである、同年が實にマホメットの誕生の年であるから益記憶すべきものとなつた

アビシニヤ軍の大失敗はコレイッシ族の光榮を增し、他の種族に優りたる高貴の血統として尊はるゝに至つた、仍て彼等は毎年アラファト山に巡禮するを廢し、巡禮中乾酪及ひ牛酪を食はず、革の天幕にのみ住する特權を得且つメッカの聖域外より來る巡禮者はメッカ人の供給する衣服及ひ食物にあらざれば用ふ

ること能はざる制限を設けた。斯くれはメッカ人は皆悉く神宮と特別の關係があるやうになり、就中コレイッシ族は神宮を創建したるイシメイルの子孫として其族長は宗教上の儀式を司り、神宮を監理し、神泉を所有し、無數の巡禮者に飲食を供給した。而して此權利はマホメットの祖父たるアブド、アル、ムッタリブに掌握せられつゝあつた。これがマホメットとアラビヤ宗教との殊特なる關係である

## 第二節　マホメット時代の宗教改革家

マホメットは自ら新宗教を開創すると謂はずして單にアブラハムの正教を恢復するといふたのである。渠は當時の偶像教を以て腐敗墮落せる信仰となし、純潔なる一神教の源泉に溯りて上天の甘露を掬せんとしたのである。然り而して當時渠と同樣なる意見を懷けるもの一に足らず、是の如き宗教改革家をハニフ(Hanif)と名けたのである。ハニフとはペニテント(Penitent)、即ち懺悔者の意であらう。回教史家の説に依ればマホメットの生れたるコレイッシ族(Coreish)の中に四人の宗教改革家が現れて渠の先驅をなしたといふ。乃ち次の如き説話があ



る。或日コレイッシ人が其崇拜せる偶像の祭祀を執行し、犧牲を供へて神宮の周圍を廻りて黑石を禮拜した、其時彼等の中、四人のものありて此祭典に與からず、別處に退いて互に心腹を披いて相語つた、其中の一人はいふ、『予は誓ていはん、我同族は眞の宗教を知らず、これ諸子の知らるゝ所である。彼等はアブラハムの信仰を腐敗せしめて黑石を崇拜しつゝある、それ石は見る能はず聞く能はず、利害を我等に與ふるの力なし。友よ、諸子は自ら道を求めざるべからず、何となれば諸子は今や正道を失ひつゝあればなりと。かくして彼等四人のハニフは各、路を異にしてアブラハムの眞宗教を求めんとして四方に出發した。此四人のハニフといふは、第一はワラカ(Waraka)にして、彼はマホメットの第一の妻たるクハデイヂヤ(Khadija)の從弟に當り。博學多才にして基督教の聖書を研究し、且つ猶太教の經典をも學ひ、其教理を咀嚼して基督教信者となり、福音書の一部を翻譯し、且つ彼はマホメットの開教に際して渠を以て預言者なりと承認し、有益なる助言をなした人である。第二はオトマン(Othman)といひ、同しくマホメットの第一の妻たるクハデイヂヤの從弟である。彼はメッカの偶像教に滿足する能はずして、羅馬の帝都たるコンスタンチノープルに到りて改

宗し基督教徒となりて、羅馬帝の優遇を受け、歸國してメッカの政權を掌握せんと企てたるも失敗の結果シリヤに逃亡し、ガアッサンの君主に保護せられたるも、遂に殺害せられたのである。第三はオベイド、アラ (Obeid Allah) といふて、マホメットが伯母の子である。彼はメッカにて改宗し回教徒となり、迫害の難に遇ふてアビシニヤに逃れ、同地にて基督教に入つた。彼は遂にアビシニヤにて客死し、其寡婦は後年マホメットの妻となりたるオム、ハビーバ(Omm Habiba) といふ婦人である。第四はゼイト (Zeid) である。彼はオマル (Omar) の從弟にして終身正教の研究に熱中したるも不幸にして懷疑の重擔を負ふて黄泉に赴いた。彼はカアバ神宮の偶像を否認し、其犧牲を食ふを拒み、少女を殺すの惡弊を痛罵し、老年に至りてアブラハムの眞宗教を維持するものは彼一人のみであると公言した。また神を祈りていふ、『主よ、予若し汝を禮拜すべき方法を知りたらんには、予はしかなすべきなり、されど予は之を知らず』云云。復曰く、『神を恐る者は失はるゝことなし、善人は天國の花園に住すべく、惡人は火中に投せらるべし。惡人は必す生前には榮ゆることなく死後には大苦を受くべし』。『主よ、予は洵に汝の僕なり、予は汝に歸命す、汝には大地も、雲霧も從はさるべからす』。彼は其種族の偶像を棄て大慈悲の神を信ずと明言した。而して回教史家は彼を以てマホメットが神の使命を齎して生ることを預言したものと信して居る。彼は宗教研究の爲め世界を遍歴せんと企て胡郷を出發してメソポタミヤ、シリヤを透して周遊し僧侶牧師を歴訪してアブラハムの正教を問ふた。されど一人も彼れを滿足せしむる者はなかつた、然るに一人の牧師が彼に諗けて、『汝の胡郷に預言者は現れ、將に舊宗教を恢復せんとす』といふた。是に於て彼は歩を轉して歸路に就きたるも半途にして逝去し、ヒラ山の麓に葬られた。マホメットがヒラ山の洞窟にて冥想に耽りつゝ宗教を求めたのも此因緣によるのである。以上四人の宗教改革家は皆マホメットと同族の人であるが此外にもタイフ市にはオマイヤ (Omayya) なる者あり、メジイナ (Medina) にはアブ、アミル (Abu Amir) あり、アブ、カイス (Abu Kais) あり皆有名なる改革家であつた。されはアラビヤの墮落せる迷信に對する反動は多少識者の間に起りつゝあつたに相違ない、而してマホメットの大材によりて此廓清の大事業は完成せられたのである

# 本論

## 第一章　修養時代に於けるマホメット

### 第一節　マホメットが運命の激變

矛盾を以て首まり矛盾を以て尾りたるはマホメットの一生である、磊々たる頑石も渠が脚下にありては晃々たる明玉となり、黯澹なる霧霖も渠が頭上にありては杲々たる晴天と變し、艶櫻素梅の美も渠が手に觸れては糞土朽木と化し去るやの慨がある、これアラビヤの預言者が一代に於ける不測の大變化である。

紀元五百七十年はアラビヤ人が忘れんと欲して忘る能はざる歳である。アビシニヤの王アブラハは三軍の貔貅を率ゐて將にメッカを包圍せんとして堂々破竹の勢を以て進軍しつゝある。アラビヤ人が祖先已來神聖中の神聖として瞻仰し來りたるカアバ(Kaaba)の聖殿は敵軍の土足に蹂躙せらるゝの運命に迫りつゝある。メッカの酋長にしてマホメットの祖父なるアブド、アル、ムッタリブ(Abd al muttalib)は敵軍に抵抗するの不可能なるを知りて同族と俱に山溪の間に逃竄して逆運の頭上に落ち來るを待ちつゝある。焉ぞ計らん、猛烈なる疫癘はアビ



シニヤの大軍を刻り倒し、痘瘡の毒焰はアブラハの貔貅を燒き殺して、其皮膚を爛らし、其骨肉を腐敗せしめ、逃くるを追ふて敵を炎々たる烈日に曝し、或は砂漠に斃死せしめ或は溪谷に顚墜せしめて殆んと全滅に歸したのである。於戲、此五百七十年は如何なる災ひの歳にして、また如何なる幸ひの歳であらう

此の如き歳に方りてマホメットは生れたのである。此出來事に先つこと數月、アブド、アル、ムッタリブは其最愛の一子アブドアラ(Abdallah)を伴ふてメジイナ市に住せる同族を訪ひ、彼の爲めにアミナ(Amina)なる佳人を得た。アブドアラは暫時其妻と共に蜜月を費して後、シリヤの南方に向て商業的遠征に出發し歸途不幸にしてメジイナ市にて病を得、二十五歳を一期として夭逝したのである。アブドアラは風采といひ性質といひ衆人の愛敬を値ひする所ありて彼とアミナとが結婚の當夜には失望せる二百人の處女が戀死したと誇張してある。此時に方りてアブド、アル、ムッタリブは古稀の老人にして痛く愛子の早世を悲しみたるも其後數月ならずしてアミナは愛らしき男兒を分娩して老酋長の掌中に置いた。これ即ちマホメットにして、時は西暦紀元五百七十年八月廿日、アブラハ退軍の後五十五日を經たる頃なりと推定せられてある

老祖父ムッタリブの悦びは如何ばかりであらう、彼は孩兒を懷ろにしてカアバの聖殿に詣で、涙ながらに神の恩寵を謝し、其誕生の一七日には重もなる同族朋友を招きて饗宴を催ほし、モハムマッド(Mohammad)と命名した。マホメットはモハムマッドの訛音である。かくしてマホメットが亡父の遺產は五頭の駱駝、一群の羊、女奴のバラカ(Baraka)のみであつた。されば渠はメッカの名門に生れて偉人ハアシムの血統を繼承したる幸福の身でありながら憐れ貧しき孤兒であつた

嬰孩なるマホメットは渠が伯父、アブ、ラハブ(Abu Dahab)の女奴トゥエイバ(Thueiba)なる者に委ねられ其哺育を受けて數日を費した。這は僅かに數日に過ぎざりしが、渠は之を以て德となし深く恩義に感して、渠が立身の後は常に彼女を敬愛し、永く衣服物品を贈りて、其死に至る迄渝らざりしといふ。元來メッカの空氣は小兒の健康に適せざるが故に市民の子女は概して砂漠を漂泊する遊牧の種族に托して生長せしむる風習であつた。マホメットも此風習に從ふてサド(Beni Sad)種族の一婦人なるハリイマ(Halima)に鞠育せらるゝことになつた。これ渠が當歲の秋である。かくして乾燥せる砂漠の空氣は渠が血液を新鮮にし、新鮮



なる血液は渠が筋骨を强壯にして、渠が三歲の春を迎へたる時は殆んと六歲の童子に等しき體量となつたのである。されば養母實母等の喜ひは想像するに餘りある。然るに彼等が喜ひの蕾は早くも憂惧の蟲に嚙まるゝの不幸に接した、开は渠が三四歲の頃より一種の奇病に襲れて卒倒することである、憐れ無智迷信に富める養父母は之を以て鬼神の渠に憑れるものと想像し、危惧憂慮の末、遂に渠を實母の許に還した。これ渠が五歲の頃である

回教徒の傳說によれば渠が三歲の時、其乳兄弟なるマスラウド(Masroud)と共に野外に遊戲しつゝありたるに天使ゲブリエル(Gabriel)が忽然渠の面前に現れ、渠を捕へて靜かに地上に仰臥せしめ、渠が胸腹を開いて其心臟を出し、罪過の源泉たる黑汁を除きて後、信仰と智識とを其中に入れて去つた。これによりてマホメットの顏面より神光を發するに致つたといふてある。これ渠が奇病を本として作爲したる唇氣樓に外ならぬ

砂漠に於るマホメットの生活は僅かに五回の霜華を累ねたるに過きぬ。されど此間に於て渠が强健なる體格は組織せられ、活潑なる性質は養成せられ、純粹なるアラビヤ語は習得せられた。『予は最も完全なるアラビヤ人なり、予が血統

はコレイッシ (Coreish) にして、予が言語はサド (Sad) 族の語なり』とはマホメットの常に人に誇つて所である。而して乳母ハリイマ及ひ其一族に對する恩愛の情誼は深く渠の肝膽に刻して後年渠か美德を發揮するに至つたことは後節に陳ふる如くである

メッカへ歸省してより其翌年の始に至るまでマホメットは慈母の膝下にありて水も漏さぬ家庭の中に樂しき月日を送つたのであるが、再ひ逆運の毒手は渠の上に加へられた。开は渠か第六歳の時、アミナは愛兒マホメットを伴ふて其胡鄕なるメジイナ市の親戚を訪はんと欲し、女奴に命して渠が保姆の任に當らしめ、二頭の駱駝に騎りてメジイナに到着した。アミナは亡夫アブドアラが逝去して葬られたる家に一個月間滯留した。此間に感し易き渠の頭腦は審かに當時の事情を銘記して、四十七年の後再ひ此處に來りたる時、『此家にて予は少女アイナザと遊ひ、予が姪と共に屋上に來れる鳥を追ひ、此所に予は母と共に臥し、彼所に予か父の墓に詣て、此沼にて予は泳くことを學ひたり』とて一々往事を追懷したのである。かくて一ケ月の後アミナは再ひメッカに向て出發したるが、半途にしてアブワ (Abwa) と稱する村落に達したる時、俄かに病を得て不歸の客



となり、直ちにこゝに葬られた。かくして全く兩親を喪ふたる六歳の孤兒は一人の女奴に伴はれて泣く〳〵メッカへ還つたのである。想ふに此時の悲劇は痛く渠の神經を刺戟し、終生除くべからざる悲哀の印象を與へ、沈欝にして默想がちなる渠の性格を作るに與つて力があつた。されば渠は後年巡拜の因みに悲母の墓に詣てたるに聲を放つて涕泣し、其從者さへ覺えず袖を霑したといふ。これ渠が寡婦孤兒の爲めに特に寛大なる法律を設け、また女兒を殺すの惡風を矯正したる遠因である

これよりマホメットは祖父の家に寄食することゝなり、悲母を喪ふたる哀痛の涙は祖父が慈愛の接吻に何時しか乾きて、今は一人の老祖父を父とも母とも怙むのであつた。アブド、アル、ムッタリブは今や古稀の齡を十年も超した老翁である、マホメットは彼が最愛の子アブドアラの忘れがたみであるのみならず、洵に可憐なる孤兒とさへなつたれば、祖父が愛情も一層深くして、渠が綠の黑髮を撫ては我子の面影に瓜二つなる渠の幼顏に見入るのであつた。されば祖父が宮詣にも其後に從ひ、祖父が眠れる時さへ其乳母を見捨て其室に入るを常とした。然るに祖父は最早八十の頽齡なれば渠を鞠育すること僅かに二年にして

黄泉の客となつた。これ紀元五百七十八年の出來事にして渠が八歳の頭腦は再ひ瘡すべからざる痛切の傷を受けたのである。憐れ父とも母とも怙みたる人の棺車に隨ふて泣く〳〵墓地に送り行く孤兒を觀たるものは何人も袖を絞らぬはなかつたといふ

## 第二節　少壯時代のマホメット

アブド、アル、ムッタリブは終焉に臨みて其子アブ、タアリブ (Abu Talib) を枕頭に招さて委するにマホメット養育の任を以てした、仍て渠は再ひ轉して伯父の家に寄食することになつたのである。アブ、タアリブは亡父の遺言を格守して極めて忠實に其委任を果し、孜々たる孤兒を憐みて我子の如く之を慈み、晝は食卓を俱にし、夜は臥床を共にし、出つるには必す渠を伴ふて、こゝに四回の春秋を送り迎へたのである。かくした渠が第十三歳に達したる時、アブ、タアリブはシリヤ (Syria) に向て商業的遠征を企畫し、將に駱駝に跨りて隊商と共に出發せんとするや、渠は切に伯父と共に往かんことを乞ひ其袖を捕へて放たす、伯父も亦其眷戀綢繆の情に動かされて渠を伴ふて出發した。これマホメッ



トが第一回のシリヤ旅行である

此旅行に渠は數月の日子を費やしボストラ (Bostra) に到りて貿易して還つたのである。渠は之によりて重大なる觀察の機會を得て將來の發展に大影響を及ほしたのである。渠は旅行の途次、ペトラ (Petra)、アンモン (Ammon) 等、零落せる大市場の舊趾を通過して人事の隆汚常なきを察し、迷信的傳説にて著名なる地方を訪ふては荒唐なる説話を聽き、砂漠の遊牧者と交りては其原人的風習に好奇心を喜はし、猶太人の殖民地に入りては彼等の宗教的儀式を實見した。殊に奇怪變幻を好むは少年の常なるか故に渠は必すや下の如き傳説に耳を欹けたであらう。這は回教の聖書コラーンにも引用されたる所である

渠が通過したる山間の地方にヘヂャル (Hejer) と稱する僻村があつて、太古の人民が巖穴を斫り開いて住居したる舊蹟があつた。傳説によれば、古へタムット (Thamud) 族と名くるものがあつて彼等はアブラハム已前より生存したる巨人であつたのである。然るに彼等は一神の正教を棄て偶像を禮拜し少しも愧つることを知らぬ、依て神はサレー (Saleh) と名くる預言者を遣はして正信を恢復せんとした。然るにタムット人は預言者の使命を信ぜすしていふた。『若し汝にして

眞に上帝の使命を帶ひたらんには妊娠せる駱駝を山岳の中央より出して奇蹟を現すべし、然れば我等は汝の敎誨に服すべし』と。是に於てサレエは天を仰いて神を祈りたるに、巖石忽ち開けて一頭の駱駝出て來るや否や小なる駱駝を產み落した。此奇蹟に感動して少數の人民は改宗したれども彼等の大部分は倨傲にして預言者を輕侮し、剩へ駱駝を捕へて之を絞殺した。是に於て天の一方に不可思議なる叫ひが聞え、續いて萬雷一時に轟き、不信者は悉く殺されてタムッド族は地を掃ふて滅亡したといふ。以上の傳說は固より架空の妄談であるけれどもマホメットは之と類同したる信仰を有したのである

また他の傳說によれば紅海に瀕せる一小都會にエイラ (Eyla) と名くる處がある、こゝに古へ猶太人が殖民して信仰の隨落せる結果、安息日に當りて漁業をなし、以て聖日を汚したる爲め天罰によりて老人は皆豚兒に變形し壯者は猿猴に變化したといふ。これ亦マホメットがコラーンの中に神罰の例證として擧げた所である

斯の如く種々の傳說に耳を傾けつゝ渠は隊商と共にシリヤに到達してボストラに暫時掩留した。當時ボストラは商業殷賑の地にしてネストリアン派 (Nestorian)



の寺院があつた。而してアブ、タアリブは該寺院の近傍に天幕を設けた爲めに僧侶に招かれて饗應を受け、彼等の一人なるサルヂアス (Sergius) (Bahira) は親しくマホメットと談話し、渠の鋭敏にして智識を求むるに熱心に、且つ宗敎上の事項に注意するを見て驚嘆措く能はざるありさまであつたといふ。开は兎も角もネストリアン派は極端に偶像を排斥する宗派で、基督敎に普通なる十字架さへ禁斷して用ひぬのであるから、アラビヤの偶像敎とは雲泥の相違である。後年に至りてマホメットが極端にも偶像を排斥したる事實より察すれば第一回の旅行は渠が全生涯の上に一變化を生する原因の一であつたに相違ないのである

此時に當りて(五八〇—五九〇)メッカ及ひ近隣の諸國は殘忍なる諍鬪の腥血に汚るゝの不幸に際會した。开はメッカの東方三日旅程なる處にオカヅ (Ocatz) なる都會ありて鬱蒼たる椰樹と潺々たる清泉とに富みて每年盛大なる貿易が行はれ、且つ詩歌の競爭もあつた。然るに此市場に於て驕慢なる一詩人は己れが種族の優逸なるを誇張して傍若無人なりしが爲め、ハワズイン (Hawazin) 族即ちメッカの近傍に住する豪族の一人に毆打せられたことがあり、またハワズイン族の少女がコレイッシ (Coreish) 族即ちマホメットの同族の少年に辱められたこともあり、

其他種々なる出來事より紛諍を生して血を流したのが原因となつて遂に不測の禍害を醸成したのである。是を以てオカヅの市中に入る者は皆其携帶せる武器をメッカの一酋長に托せしむることと定めて一時平和を繼續した。然るに或時ヒラ(Hira)王國の大守が麝香其他の香料を滿載したる隊商を送り、ハワズインの一酋長に其保護を依托してオカヅの市に來つた。此時コレイッシ人に黨比せる一酋長は之を妬んで、途中にて隊商を要擊して其酋長を殺し、荷物を横奪して逃亡し、且つ秘密に此の事をコレイッシの諸酋長に報告して、速かにオカヅの市場を退かしめた。またハワズインの諸酋長は虐殺の報を得て危速に武裝を調へ、コレイッシ人を追擊したるも、後者は早くも聖地に退いて如何ともする能はず。依て翌年必す決鬪すべしとの誓言を交換して別れたのである。乃ち翌年に至りてコレイッシ、ハワズイン兩族全體の決戰となり四ヶ年間慘酷なる紛諍をなして後、休戰をした。マホメットは疑ひもなく此戰爭に參加したるも何等の戰功をも立てなかつた。渠は單に盾を以て其伯父を蔽ひ、又は箭の落ちたるを拾ふて伯父に與ふるに過ぎなかつたのである。思ふに渠は天資温柔にして自ら陣刀を揮ふて奮戰するが如きは最も渠に不適當であつた。渠は當時二十歲に



近き青年であつたから勇猛なる人物ならば必ず血戰に加はつたに相違ない、されど渠は個人的勇氣には乏しくして決して勇將豪卒たるべき資質がなかつたのである。かくして渠の興味を感じたる所は赫々たる武勳にあらずして平和的藝術であつた。されど渠は不幸にして詩を賦し文を屬し、雄辯を習ふの機會なく、全く無文字の預言者にて一生を終つたのである。一說によれば渠は十六歲の時伯父に隨てアラビヤ南方なるエメン王國に通商したといふてある。蓋し渠は當時商業の繁盛なる各市に出入して觀察を廣め經驗を積みたるは明かにして、オカヅの市場にてナヂラン(Najran)の監督なるコス(Coss)より基督敎を聞いたといふも事實であらう。されば後年に至りて渠はコスより『アブラハムの正敎を聞けり』と自白したのである。されどオカヅには基督敎徒よりは却て猶太敎徒多く、彼等の信仰、彼等の聖書、彼等の儀式に就てはマホメットが夙に聞いた所であらねばならぬ

マホメットの祖父は資產といひ聲望といひ、勢力といひ、メッカに比肩する者なき大酋長であつたが、彼の死後は彼と同一の特權を相續すべき大人物がない爲めに、政治も法律も充分に行はれず、群小の酋長等が隨意に行動するが故に

壓制横暴のこと多くして幼弱の者は往々寃抂に苦んたのである。是を以て諸族の酋長等は同盟して正義を守り弱者を保護すべき誓約をした。『我等は大洋に一滴の水にても殘る間は壓制せられたる人に與して彼等の主張を果させ、又自ら果さんことを誓ふ』いふた。渠は此誓盟に參加したるを大いに喜ひて人に語り、『予は壓制せられたる人々に與みするの盟約に加つた、此記憶は予にとりては全アラビヤの最良なる駱駝とも交換するを好まぬ』といふた。之によりて渠が如何に義俠を好んだかも知れるであらう

渠か牧羊を業としたるも蓋し此時代のことであらう。渠はメッカの近傍なる丘谷の間に羊群を牧し、仰ては萬里際涯なき蒼穹に大小の星辰が運行するを觀、伏しては草木禽獸の自然に生長するを看、或は閑寂たる山中に閑坐して獨り冥想に耽り、或は霹靂たる殷雷の吼るに驚いて限りなき恐怖に打たれた。而して此等の經驗は渠を導いて天地を指導する所の神の存在を信せしめ、常恒にして遍在なる上帝の攝理を信せしめたであらう。されば渠は牧羊の業を以て預言者の必ず勤むべきものとして後年左の如くいふた。『予が爲めに覆盆子の最と黑きものをとれ、最も黑きものは最も甘ければなり、予はメッカにありて牧羊に從へる時、斯の如きものを取れり、古へより預言者となりたる者は一も牧羊を業とせざるはなし』と。かくして渠が羊群と共に山野に放浪せる間に、一夜肉慾的滿足を買はんと欲して其羊群を一友人に委ねて市中に入つたのである。然るに渠がメッカの境域に入るや否や結婚の纓莚に遭遇して之に心を奪はれ遂に睡眠して目的を達せすして歸つた。また他の一夜、同一の目的を以てメッカに到り、不思議にも空中より天樂の劉喨たるを聞いて覺えす熟睡して曉に達した。是に於て渠は大いに決心する所あり、再ひ誘惑に陷らなかつたといふ。以上の傳說は固より信憑するに足らずとするも、渠が青年の頃より頗る温厚、謹嚴、沈鬱にして、他の麤獷にして遊惰なる青年と全く撰を異にしたるは疑ふべからざる事實である。されば渠が方正謹直は何時しか世人の耳朶に傳はりて Al Amin アル、アミン即ち『忠實の人』と呼はれたのである



## 第三節　マホメットの結婚

上述の如くマホメットは其伯父アブ、タアリブの家族と共に極めて平穩無事なる生活をなして第廿五歳の壯齡に達した。是を以て伯父は渠をして獨立の生計

を營ましめ、一は以て一家の窘窮を救ひ、一は以て渠の爲に將來安全の計を立んと欲して其機會を待ちつゝあつた。此の時コレイッシ族にしてクハデイジャ(Khadija)と名くる寡婦ありて、彼女は再ひ他人に嫁したるも不幸にして所天を喪ひ最後の良人が遺したる巨額の財産を有する女主人であつた。彼女はシリヤに送るべき隊商の監督者を要し、此任に當るべき人物を求めつゝあつたのである。然るに茲にクハデイジャの甥、某なるもの商業上よりマホメットと相知り其品性の如何をも看破してマホメットを女主人に紹介した。アブ、タアリブは好機逸す可らずとなして左の如く渠に告げた。『予は汝の知るか如く僅少の資産を有するのみ、而して近時は家計頻りに意の如くならず、これ亦汝の知る所なり、茲に汝と同族に屬する隊商あり將にシリヤに向つて出發せんとす、而して其主人は隊商を指揮すべき人を求めつゝあり、汝にして其任に當んか、彼は喜んで汝を用ふべきなり』と。渠は直ちに承諾した。依てタアリブは寡婦を訪ふてマホメットを推薦し、寡婦も亦大いに悅で普通の報酬を倍增して渠に與んことを約したのである。即ち普通の報酬は駱駝二頭なるも渠は特に四頭の駱駝を受くべき契約となりて、愈〻シリヤに向て第二回の旅行をなしたのである



渠は悉なく隊商を率ゐてシリヤに到りボストラの市場に於て貿易を試みた、當時渠は單純なるアラビヤの一壯年である、されば縱横滑脫なる商略の如きは最も渠に適合せざる任務である、況や狡智に長けたるシリヤの老商を對手とするをや。されど渠は天性の鋭才を發揮して巧みに貿易を爲し、クハデイジャの甥、某等の幇助によりて頗る有利なる通商をなしたのである

這回の遠征に於て渠はシリヤの基督教徒に接觸し、其牧師と歡語し、其教理を傳聞し、其教式を實見するの機會を得て其聖書コラーンに於て此等基督教徒を敬愛するの態度を示した。されど同教の教理に對しては一も同情を傾けず、寧ろ迷信として唾棄せんとする意向を有したのである。何となればシリヤに行はれたる基督教は幾多の妄想、幾多の邪說を混入し、腐敗墮落したる教であつた。さればマリヤ(Mary)は女神の如く、神の妻の如く想像せられ、エスも亦『神の子』にあらずして『マリヤの子エス』としてコラーンに記されたのである

マホメットは貿易を終りて後、女主人の爲めに必要なる物品を購ふて歸路に就き、メッカに近くや否や、隊商に先ちて好運なる遠征を報知すべく主家へ還つた。時に寡婦は多くの侍女と共に高樓に登りし遙かに隊商の歸るを望みつゝあ

つた、渠は直ちに入りて遠征の成功を語り且つ女主人の意に適したる物品を購求したるを告げた。是に於てクハデイジャは通商の利潤によりて滿足を得るのみならず、見るもの聞くもの皆欣喜の材とならぬはなかつた、何となればマホメットが謹直にして謙遜なる態度といひ、温厚にして威風ある風姿といひ、一として彼女の心情を快くせぬものはなく、恍然として醉ひるか如くに渠を凝視したのである。故に隊商は既に解散してマホメットの身體は解雇せられたれとも渠の記憶は女主人の胸中に殘りて眷戀の情に堪へなかつたのである

クハデイジャはコレイッシ族の貴婦人にして門閥、資産共に衆に超え、其齢四十歳に達して一女二男の母であつた。されど容色あり、才操あり、兼て經驗に富み判斷に明かに、社交にも長したれば幾多の男子を惱殺する寡婦であつた。而して彼女の血統はマホメットが第五代の祖たる偉人コスサイ(Cossai)の第五代の孫クウエリド(Khuweilid)の一女である。彼女がマホメットに心を寄せたるは洵に天運が始めて渠の上に微笑を漏したのである。彼女の切なる情は日と共に深くなりて遂に默止難く、其妹をして月下氷人の任に當らしめ、極めて注意深く、マホメットの精神を探らんとした。忠實なる妹はマホメットを訪ふて何故に渠



は好仇を求めずして孤悽するやを問ひしに、渠は資産の以て配偶を得るに出なきを以て答へた。然れば富裕にして門地高き美婦人ありて其財産と生命とを渠に捧けて其夫人たらんと希ふ者あらば渠は之を如何すべきと問へるに、汗は何人なるかと叫んで渠は頗る驚きたるものゝ如くであつた。而して其クハデイジャなるを聞いて少しく疑惑の雲に掩はれたるも忠實なる妹の證言によりて直ちに結婚を約し、吉日良辰を擇ひて華燭の典を擧くることにした。此際マホメットは二十五歳にしてクハデイジャは四十歳であるから年齒の上より論すれば好個の配偶とは稱し難かりしも兩性の愛情には歳月の入るを許さずして、琴瑟相和するの家庭となつたのである

然るに彼等が結婚に對する一の妨害はクハデイジャの父によりて提出せられた。而して彼が反對の理由はマホメットの赤貧なるにあり。されど彼女は目的に向て直進した、一日クハデンイジャは盛宴を張りて親戚朋友を招き、且マホメットの伯父アブ、タアリブ、ハムザ(Hamza)など重もなる人物を饗し、殊に其父には痛く酒を強ひて泥醉の餘り前後を忘れて眠らしめた。而して衆客の耳熱し、興闌なるに乘してアブ、タアリブはマホメットの親戚に、ワラカ(Waraka)はクハデ

イジャの親戚に提言して二人の結婚を正式に確定した。而して立ろに儀式を擧行せん爲めに衆客に婚禮の正裝をなさしめ香料を撒布し、牝牛を屠りて規定の如く華燭の盛典を完うしたのである。此時マホメットは一頭の駱駝を殺して其肉を貧民に配與し何人にても來る者は皆祝宴の饗を享けしめ、新夫人の侍女等は起ちて四肢につけたる鈴を鳴しつゝ翩々として舞ひ、絃歌の聲は熾んに湧き、酒興、歡娛、快樂を極めた。されはマホメットの乳母たりしハリイマも特に此盛宴に招かれ、四十頭の羊群を贈られたのである。然るにクハデイジャの父は泥醉のうちより醒覺して茫然として牝牛の殺されたるを見、婚禮の正服が我身に掛けられたるに一驚を喫して、其所由を傍人に問ひたるに二人の婚儀は既に了れりといふ。是に於て彼は怫然として大いに怒り、血の雨を降らさんと罵りたるも遂に朋友に慰められて無事に局を結んだのである

上述の結婚によりてマホメットの運命は全く一變した、渠は憐れなる食客の身より一躍して富豪の一人となり、孑々たる孤獨の身より一朝にして暖かき家庭の主人となつたのである。クハデイジャは愛情、蜜の如く、節操、松の如く、マホメットは心術、雪の如く、品性、玉の如くで好個一對の夫妻であつた。加之、



渠は始めて其妻に於て千歳の知己を見出したのである、何となれば渠が偉大なる人物なるを確信し、渠が非凡の天才なるを瞭知したものはクハデイジャを以て始めとする、且つ忠實なる主婦は家庭に於ける一切の雜務を處理し、渠をして優悠として精神的事業に從ふを得せしめた

かゝれば新婚の夫妻は水乳相和して蜜月も夢の如く過きて十年若しく十二年の間に二男四女の父母と做つた。長男はカシム(Casim)と名つけたるが不幸にして二歳にして夭折し、長女はゼイナブ(Zeinab)と名け、二女、三女、四女は次第の如くロッケヤ(Rockeya)オム、コルトアム(Omm Kolthum)ファチマ(Fatima)と名け、最後に次男を擧けたれども是亦早く世を去つたのである

結婚後の渠の生活はアラビヤの商業的中心たる大市場に往復して資産を增殖するにありたらんも回教の史家は此間の消息を語るものがない。蓋し渠は商業家として適材でないことは昭かであるから其方面に於ては成効しなかつたであらう。併し渠が名聲は次第に高まりて衆望は自ら(オノヅカ)渠に集りつゝあつたことは次の出來事によりて知れるであらう

渠が第三十六歳の頃、恐るべき大洪水ありて爲めにカアバの聖殿は其圍壁に潰

裂を生し、將に顚覆せんとするの危險に迫つた。加旃、殿中の珍寶は掩蓋を失ふて雨露に曝され、竊盜は此機に乘して古器物を掠め去るに至つたのである。是に於てメッカ人は合議の末、園壁及び聖殿の屋根に修繕を加へんと欲して、如何に之を建造すべきかを熟考しつゝあつた。時に適〻グリイスの難破船が暴風によりし紅海の岸に漂着した。此報知がメッカへ達したから老酋長ワリイド(Walid)が自ら出張して破船の材木を購ひ、且つグリイス人の船長バカム(Bacum)なる者が建築に巧みなるを聞いて彼を雇ふてカアバの再建を助けしめることにした。而してコレイッシ人は四個に彼等自身を分隊して各々一方の園壁を修繕することに決した。されど一人も敢て崩壞したる園壁の碎片を除かんとする者がない、何となれば彼等は神の怒りに觸んことを恐れたのである。仍て酋長ワリイドは自ら鶴鋤をとり神を祈りて園壁の一部を破壞した。而して彼等は皆之を見て其儘に退き翌朝に至るも大膽なる酋長に何等の神罰もないのを見て始めて安んして業に就いたといふ。これより彼等は崩潰せる園壁を除いて地面を堀り綠石の基礎に至り、これを根基として再ひ花崗石を以て園壁の造築に著手したのである。而して此等の花崗石は近傍の丘山より人民の頭上に戴いて之を聖



地に運搬したといふ。かくして工事は大いに進捗し平地より四五尺の高さに園壁を建築せる時、コレイッシの酋長間に一の諍論を釀した。开はカアバの聖殿中最も神聖なる黑石を園壁の東北方に嵌入して拜禮者をして接吻せしむるのであるが、酋長等は各競ふて黑石を安置するの光榮を得んとしたのである。之が爲めに建築は四五日間中止せられたるも、コレイッシ人は再ひ此問題を解決せんが爲めに合議した。時に一老市民は提言して、『諸子、予が謂ふ所を聽け、予は汝等に忠告す、今日ハラアム(Al Haram)の門を過きて聖殿に來る者あらば彼をして汝等の異論を決せしめ、否らざれば彼をして自ら黑石を安置せしめよ』といふた。此提議は衆人の贊成を得て成立し、各々其結果如何を待ちつゝあつた。然るにマホメットは偶然ハラアム門より入り來つた。衆人は渠の近き來るを見て一齊に叫んだ、『忠實なる仲裁者は來れり、吾等は彼の裁決に一任すべし』。渠は從容として此難局に當るべく決心した。渠は忽ちに名案を以て凡てのコレイッシ人を滿足せしめた。渠は自己の上衣を脫して之を地上に廣け、其上に黑石を載せて四分隊の酋長四人をして之を揚けしめ適當の位置に持來りたる時、自ら黑石をとりて之を安置し了つたのである。これより渠の聲望は愈々重きを加

へ、黑石を安置したるの光榮を擔ひて殊特なる神の恩寵を感したであらう

カアバ再建の後、久しからずしてマホメットは渠が恩人にして伯父なるアブ、タアリブの一子アリイ(Aly)を養ふて實子の如く之を愛育した。這は偶然に出てたることにて或時メッカの市民が物資に缺乏し殆んど饑饉の如き狀態に陷りたるにアブ、タアリブは貧困にして多くの子女を養ふ能はず、困苦の狀を見るに忍ひすして渠は其從弟を養ふたのである。當時アリイは五六歳の小童にして、これよりマホメットの養子として生長し、終生渝らさる恩愛の情を繼續し、後年には大膽なる勇士となりて回教史上に大なる足跡を印したのである。また渠の妻クハデイジャは其甥アブル、アース(Abul Aas)なる少年を愛して其長女ゼイナブを嫁せしめたるが、新夫妻は眞正の愛情を以て結合せられ、回教勃興の爲め擾亂の渦中に投せられて一時破鏡の悲痛を嘗め小說的なる多くの出來事の後再ひ夫妻の交情を恢復したると吾人が後章に陳ふる如くである。また渠の二女三女なるロケイヤ(Rockeya)と、オム、コルトアム(Omm Kolthum)とは伯父アブ、ラハブ(Abu Lahab)の二子、オトバ(Otba)と、オテイバ(Oteiba)とに歸いだのである。また當時クハデイジャの奴隷に黑面矮身にしてゼイド(Zeid)と名くる二十歳前後の



青年があつた。彼はシリヤの南方に住する基督教信徒の子なりしが、母と共に旅行の途上に於て强盜の一群に襲はれて奴隷として賣られ、轉々して少年の時にクハデイジャの家に來た者である。彼は快活にして鋭敏なる忠僕であるからマホメットは大いに之を愛しゼイドも深く渠に懷いて親子の如くであつた然るにゼイドの父は其愛兒を失ふて痛く之を悲しみ、四方に人を派して其踪跡を求めたれとも遂に發見する能はすして畢つた。然るにシリヤの一種族にして巡拜の爲メッカに來りたる者ありてゼイドを發見して之を其父に告けた。是に於て父は直ちにメッカに來りて巨額の償金を以て彼を贖んとした、マホメットは敢て之を拒まずしてゼイドの意見に一任したるに、『予は汝を見捨さるべし、汝は予が父にしてまた母なり』といふてマホメットの從僕たらんことを乞ふた。仍て渠は直ちにゼイドをカアバの聖殿に伴ふて神に誓ひ、渠の養子として自由の人としたのである。これより後、彼は『マホメットの子なるゼイド』として知られ、有名なる勇將となつた。以てマホメットが如何に友誼に厚く貴賤を論せす人を愛したかを知るであらう

ゼイドは基督教徒なるか故に多少其教理を記憶したるべく、隨ひ而してマホメ

ットに多少の影響を及ぼしたらんと思はる。ゼイドの外に基督教的智識を有したるはクヘデイジャの從弟オトマン(Othman)にして、彼はコンスタンチノープル府にて改宗したるは吾人が序論にて述へた如くである、また同從弟ワラカ(Waraka)は猶太基督兩教に通して福音書を翻譯したれは、渠は此等の朋友より宗教的智識を得るの機會があつたのである

## 第四節　評論

吾人は本章に於てアホメットの修養時代を叙し畢りたるが故に之より少しく此時代に於ける渠が經歷に就て評論を加へんとす。惟ふに渠の修養時代は其誕生より第四十歳に至るの間にして渠が專ら私的生涯を送りたる時期である。吾人の觀察にして誤りなからんか、渠が私的生涯は白圭の玷けざるか如く玲瓏たる道德の完璧を保ち得たのである。抑も渠は潦倒の犧牲にして生れながらにして父を喪ひ、六歳にして母と別れ、それより一人の祖父を父と估み母と恃みて其家に寄食したるも、慈愛深き祖父も亦渠が第九歳の時に長逝したのである。逆運は感し易き少童の頭腦に沈痛なる印象を刻んだ。これより渠の眼瞳には一種



の悲哀なる光を放ち、少壯血氣の齡に達するも尚は放言せず、哄笑せず、平靜温柔は渠の一特色となつたのである。幼弱を憐み、奴隷を慈み、貧窶を賑はし、常に同情の暖き手を開いて人を待つの美德は渠が幼時の逆運より得たる賚である。また渠が廿歳にして得たる奇病の發作は尠なからず渠に影響して、異日神靈の渠に降るべき素地となつた。渠が伯父アブ、タアリブに寄食するや、伯父の慈愛亦祖父に讓らず、されど彼は絶えず家計の困難に煩ひつゝあつた、斯く貧困の家に寄食したるマホメットの境遇は洵に憐むべきものであつたに相違ない、されど艱難は却て渠が德性を涵養するの因となり、蠱獷淫蕩なる土人の中にありて能く其蠻風に染まず、アル、アミンの芳名を得るに至つたのである渠の修養時代に於て吾人の注意を惹ける點は渠が運命の急激にして突然なる變化にあり。試に見よ、渠が母は渠を携へて其胡郷に歸省し、半途にして突然路傍の露と共に消え、憐れなる孤兒を女奴に托して瞑す可らざる思ひを遺して黄泉に赴き、それより祖父の家に寄食したるもこれ亦二年にして他界に逝きたれば復もや渠の境遇に變化を及ぼした。渠は再轉して伯父に寄食するの身となるや、十三歳にして偶然にもシリヤに旅行し千種萬樣なる人民の風俗宗教等の視

察をなし、二十五歳にして再ひシリヤに通商して還るや、女主人に思はるゝ身となりて、一朝にして赤貧の寄食者よりメッカの富豪となつた。これクハディシヤにとりては多少の企劃によりて成就したる者なるも渠にとりては全く寝耳に水の如く突然であつた。且つ彼等が結婚の盛典さへ突然に提言せられて突然に終結したのである。殊に渠がカアバ再建の時にあたりて偶然にもメッカ人に撰はれで重大なる紛議を裁決し自ら黒石を安置したるが如きは意外中の意外なる出來事にして渠が忘れんと欲して忘る能はざる不可思議の幸運である。且つそれ渠か妻は四十歳の老婦と思ひきや、二男四女を生みて渠を慰め、渠が多くの妻の中唯一の賢母である。加ふるに渠が千歳の知己は僧老を契りたるクハデイジヤに非んとは渠の最も意想外としたる所でらう。渠の運命は斯の如く激變した、渠は不思議にも禍を免れて幸ひを得た。渠の運命は特に何者かの手によりで左右せられつゝあるではあるまいか、渠は上帝より一種の使命を帶ひて生れたではあるまいか、況や渠は病氣とはいへ一種不可思議の發作により乙幻覺を見るをや。古への傳説によれば渠の祖先なるアブラハムは唯一神の正教をアラビヤ人に教へた。カアバの聖殿は彼の建た所である。正教の滅亡は人民の腐



敗より來る、アラビヤ人は今や正教の何たるを忘れて狂愚なる迷信を固執しつゝある。神はモセス、エス、等の預言者を遣して正教を恢復し給ふたのである。されは今やアラビヤに正教を恢復する預言者の出づべき時である、而して正教を恢復すべき使命は何人に降されるであらう。渠は其使命を受けたではあるまいか。斯の如き疑惑と想像とは渠の頭腦に湧き出つべき自然の勢である

次に吾人の注意を要するは渠が親愛悃切なる情操を有したる點である。吾人が前節に略叙したる如く渠は幼時より此點に於て著しく人と異つて居る。されば渠は何人にも深く愛せられ、伯父アブ、タアリブの如きさへ寢食を共にして渠を愛撫した、況や祖父と母と乳母に於てをや。而して渠の恩義に感するの深き僅かに數日の哺育を受けたる女奴を德として之れに腆き贈ものを累ね、乳母ハリイマを愛して之を厚遇し、其恩惠は遂に一族に及んだ。また其從弟アリイを子とし、奴隷のゼイドさへ自由の身として之を子とし、相愛し相親みて遂に實父を棄て渠に從はしむるに至つた。然り而して渠の親愛は終生を期して毫も渝らず、一度渠と親交を訂したるものは水魚の想ひを以て死に至りて止むを常をしたのである。此點に關して吾人は後章に於て詳説するが如く、回教徒の强固

なる團隊は渠が親愛の連鎖によりて結合せられたるを知らねばならぬ。故に渠の個人的生涯に於ける特色は篤實にして平和を好み、社會の熱鬧を避けて閑寂の生活を欣んだのである。殊に渠は個人的勇氣を奮ふて競爭格鬪を事とするアラビヤ人中に生れなから、温雅なると婦女の如くにして一も此等の蠻風を實行しなかつた。されば渠は二十歳の壯丁にして伯父の從者として戰陣に出てたるも戈に劒ぬらずして還つたのである。故に世のマホメットを知らざる者は渠を以て剛邁猛勇にして乳虎の如き人物なりと思ふものあらんも事實は全く之に反するを知らねばならぬ。果して然れば渠が個人的生涯は其心術に於て、其操行に於て、殆んと完全といふへく、如何に回教に反對する基督教徒と雖も批難すべき點がないのである。吾人は既に本章に於て渠の私生涯を叙述したから之より次章に於て渠が宗教家としての公生涯を陳へ以て如何に渠の性格が發展するかを見るであらう

## 第二章　宗教家としてのマホメット

### 第一節　マホメットが宗教的煩悶



マホメットが宗教上の問題に其精力を集注するに至りたるは渠が第四十回の春秋を迎へんとするの時にして、當時渠は智識經驗に富み思想識見二つなから群を拔き、渠が旅行、通商、交際等の間に蘊蓄したる宗教上の意見は漸く舊宗教を厭忌するの因となり、且つアラビヤ人の殘忍なる蠻風は痛く渠の感情を刺戟した。是に於て乎、平生沈鬱的なる渠は一層の悲痛に陷り沈思冥想に耽り、宗教的疑惑は痛める頭腦に蝟集して其解決を促かし、アラビヤ人の道德的墮落は渠が雙肩の重荷となりて渠を苦めたのである。猶太教、基督教に關する不完全なる智識、アラビヤの世襲的迷信、女神、偶像の崇拜、預言者降生の夢想、人類の墮落、過去及ひ將來の神謎、アブラハムの眞宗教、此等の諸問題がマホメットの頭腦を嚙み惱ましたる疑問である。憂悶と疑惑とに充ちたる渠は世人と交るを好まず、和氣靄々たる已れの家庭さへ見捨て近隣なる山谷の間に退き、獨り無人の境に默坐して胸中の煩悶を遣らんしたのである。當時渠が好んで幽棲せる處はメッカ市の北方三哩なるヒラ(Hira)山下の一洞窟にして、渠は單獨に若しくは忠實なる妻と共に此處に退いて屢〻數日を費やしたのである。ヒラ山は圓筒形の高山にして周圍には磽确たる灰色の丘岳あり、磊々たる砂漠あり、

眼の及ぶ限り荒茫寂寞として一介の綠草だもなく、洵に寒じき處である。此間寂荒茫たる光景に加ふるにマホメットの面前に横はるものはゼイド(Zeid)の新しき墓である。ゼイドは眞正の宗教を求めんが爲めに焦慮憂悶して黯憺たる疑惑の中に其屍を葬りたるマホメットの先覺である。かくして渠は滿目寥々たる荒山を望み、ゼイドの運命を自覺しつゝ、熾くが如きアラビヤの長き夏の日を沈思默考の間に費やしたのである。されば渠の健康は次第に衰へ、神經は過敏となり、感情は亢進して極度に達した。渠は殆んと狂せるものゝ如く、夕陽を指して人類の零落を誓ひ、或は宇宙の主宰たる大慈悲の神を祈りて救濟を求め、斷片零碎なる韻語を叫びて胸中の苦悶を漏した、是吾人がコラーンの第百章、第百三章等に見る所の文字である

コラーンの文によりて察するに渠は上述の如く煩悶焦慮を累ねたる結果、黯憺たる疑惑の陰雲を披いて上天の光明を發見したやうである

唯一なる眞正の宗教は人間の曩祖たるアダムによりて開かれた。眞神は唯一である、宇宙の造物主である、人天の主宰者にして最後の審判者である。然るに眞正の宗教は腐敗し墮落して偶像教となつた。故に神は宗教を其本來の



純潔なる狀態に恢復せんが爲めに預言者を遣はして天啓を陳へしめた、即ちノア、アブラハム、モセス、エスなどである。今や世人は盲恐なる偶像崇拜の弊竇に陷りつゝある、此等の「迷へる羊」を正道に導くべき預言者の出つべき時は來つた。天國は樂むべし、地獄は怖るべし。善惡には必ず報償あり、於戲、此腐敗せるアラビヤの同胞を如何にすべき

かく思ひ煩ひたるマホメットは情熱に燃ゆるが如き言辭を聯ねて詩片を作り、或は人類の將來を望みて悲痛の涙を灑き、或は恐怖絶望の大地獄を描いて同族の不信者を誡め、或は神の懷ろに入りて言ふべからざる確信と慰安とを見出した。されば當時渠が吟し出したる詩片は壯麗にして雄渾、簡勁にして閑雅、一讀アラビヤ人をして神魂を飛はしむるの力があつた。渠は神が直接に渠に告る所の聖語を誦出した、されど未だ自ら預言者なりと公言し得ないのである。

日月は大海の中に頽墜し、蒼穹は融解し、火焰は海中に燃え、人類は飛蛾の如く散亂し、山岳は崩潰し、善人は光榮に入り、惡人は猛火に入るの日あらん

神は凡ての審判者中最も正直なる者なり、禍ひなる哉、誹謗者。地獄の猛焰は彼等を待ちつゝあるを知らず

塵芥の中に横はれる貧人に食物を與へ、憐れなる孤兒を救ひ、囚奴を解放し、神を信し、正直にして惠み深きものは天國の光榮に入らん

右の如き意義はコラーンの第百一章、第九十五章、第百四章、第九十章等の文字に見える。而して此等の韻文はマホメットが未た預言者なるを公稱せざる以前に作爲せられ、其妻クハデイジャ又はアリイ、又はワラカなどが筆錄のしたであらう。此時に方りて渠の教戒に耳を欹けたるは其妻クハデイジャを始めとして其奴隷ゼイド、養子アリイ、其親友アブ、ベクル、ワラカなどであつた。此等僅少の人々の外は何人もマホメットの熱誠に動さるるものなく、悃篤にして寛大なる伯父アブ、タアリブさへ渠が狂熱を笑ひ、アブ、ラハブなる伯父は渠を愚弄し且つ凌辱し、アブ、ヂヤルなる會長は渠を嘲罵して至らざるなく、同族なるコレイツシ人は皆冷淡に看過して半狂人として渠を待つたのである

是に於てマホメットは以爲らく、渠の福音は近親同族さへ感化する能はず、全能なる神は渠の至切なる祈禱を受け給はさるにや、若し神が渠の祈禱を受け給はずとせば、一神の靈感は何處より來りしか、神の力、神の攝理、神の賞罰等の靈感は何處より來りしか、渠の燃ゆるか如き思想、渠の流麗にして神聖なる



韻語、渠の熱烈なる福音は何者が渠に授けたるか。古への預言者も恐くは渠に優る靈感を得さりしならん、渠は神より直接に啓示を得たるにはあらさるか、渠は上天の使命を帶ひたるにはあらさるか。斯く疑ひつゝ信しつゝ、信しつゝ疑ひつゝ、煩悶し、苦慮し、焦思した。之が爲めに渠の身心は痛く疲勞して夜は怪夢に襲はれ晝も尙ほ幻覺に煩ひ、失神、眩暈、人事を辨せざるに至ることもある。妻のクハデイジャは大に之を憂ひて病患の原因を渠に問ふた。渠は默然として答へず。渠は遂に煩悶耐へすして幾度か自殺せんと思ふたのである。渠は萬仞峩々たる絶壁より顚墜して自殺せんと企てたる一刹那、何物か無形なる勢力が渠を止むるやうに感して危き一命を救ふた。乃ち渠は思ふらく

神の援助は來らん、勝利は近きにあり、汝等は群れる民衆が競ふて神の信仰に入るを見ん

と。これコラーンの第百十章に明記されたる文字である。今や渠が疲れたる精神には絶望とが交互に勢力を得つゝある、黯黑と光明とは憤闘し決戰しつゝある、渠は天を仰いて長歎し、地に伏して沈吟しつゝ、聖月 (Ramadhan) の一夜ヒラ山の洞窟にて祈禱、斷食、冥想を凝した。時に天より靈光赫々として輝き、

天使ゲブリエルはマホメットの面前に立ちて神勅を傳へた。これ渠が幻覺の中に得たる靈感にしてコラーンの第九十六章の文字である。翌朝渠は慄ひつゝ妻の家に還つた。渠が前夜見たる天使は果して眞の天使なるか、また渠は惡鬼に憑れたるにはあらざるか、種々に憂ひ悶えて疑惑と恐怖とに襲はれた。然るに愛と信仰とに充ちたるクハデイジャは徐ろに渠を慰めていふた、『汝は喜ばしき報知なり、クハデイジャが靈魂を委ねたる神に誓ふて、妾は君を我國民の預言者として尊敬すべし、神は決して君を恥辱に陷らしめ給ふ可らず、君は其親戚を愛し、其隣人を慈み、貧者を惠み、衆人を厚遇し、君の言行を慎み、眞理を保護したるにあらざるか』と。かくて彼女はマホメットの信仰を鞏固ならしむると同時に其從弟ワラカにも告げて共に渠を慰むるに努めたのである

此天啓を得てよりマホメットの生涯は一變した、渠は最早アラビヤの一商人にあらずして神聖なる預言者である。渠はメッカの一市民にあらずして上帝の使節である。隨ひ而して渠の說く所の福音は神の金言である。渠が靈感は神によりて惹起され、渠の命令は絕對的に信奉せらるべき神勅である。渠はかく信せざるを得ぬ



然るにマホメットが神の使命はメッカ市民より之を見れば狂人の夢である。罵詈讒謗の聲は四面より起つた、渠は荒唐なる空想に驅られたる詩人として嘲られ、魔術、僞誓、禁厭を行ふ妖人として惡まれ、惡鬼、魍魎に憑かれたる癡漢として翻弄せられた。渠は再ひ絕望に瀕し、煩悶し、疲憊し、懊惱して打ち倒れ、全身に衣服を纏ふて横臥した儘、人事不省となつた。時に天使ゲブリエルは再ひ現れて渠を呼ひ覺し、失神落膽の中より甦りて、奮起活動すべきを命し、猛然たる精力と、牢乎たる意氣を恢復せしめた。これコラーンの第七十四章に記されたる神勅にして其後天啓は屢〻下りて愈々渠は神命を受けたる預言者と自信したのである

マホメットが天啓を受くる方法に就ては學者間に議論ある問題なるも大略下の如くである。先つ渠は非常に戰慄して全身を震ひ動かし、それより身體を拘攣して人事不省に横臥し、嚴寒の候にも前額より汗を流し、口よりは泡を吐きて哮號するか如き聲を出し、暫時にして蘇生したるか如く眼を開いて天啓を語り出すのである。而して渠は自ら天啓を得るに二樣の方法があるといふた、第一は天使が人間の形に化して現はれ、人間の談話の如く神勅を宣べるので、これ

は至つて容易である。第二は神勅が單に鐘聲の如くに聞え、其音響が渠の心臓に徹して全身裂かるゝ如く苦痛を感するといふた。是を以て或學者はマホメットの天啓といふは癲癇に外ならぬと斷言した。されど渠は卒倒中にも充分の自覺があるか故に癲癇にあらずとの說もある、何れにしても今日は滿足なる說明はできないのである

## 第二節　預言者としてのマホメット

マホメットが懷疑の黯雲を一掃して上帝の靈光を拜し、危惧の陷穽を一超して確信の彼岸に達したる結果、アラビヤ人を警醒すべき神命を享けたりと明言して、絕對的に渠が新福音に向つて服從を要求すべくメッカ人の面前に現はれたるは紀元六百十三年即ち渠が第四十四歲の頃である。されどこれより已前紀元六百十一年の頃より渠の新福音は其親戚朋友の間に牢乎たる根抵を据ゑつゝあつた、されは六百十一年は渠が傳道の第一年と呼はるゝのである。而して衆人に率先して渠の使命を信したる者は渠が最愛の妻、クハデイジヤである、彼女は渠が精神的煩悶を分前し、渠を保護し、渠を慰め、渠の憂虞を除いた。され



ば渠が背信不德なる人民に排斥せられて最後に退くべき城廓は渠の妻が暖き胸である。蓋しこれマホメットが眞摯にして大人物なるを立證する適例であらう何となれば近親朋友の輩は夙に渠の性格を看破し其言行は一顰一笑の末に至るまて悉く熟知するが故に如何に彼等を欺瞞せんとするも全く不可能といはねばならぬ。若しマホメットが一個の詐僞師にして上天の靈感を受けたる如く表面のみを粧ふものとせは必すや其馬脚は近親の者によりて發見せられたであらう。然るに事實は全く之に反して渠の感化は先つ其妻に始まり其家人に及ひ次に其朋友に及んたのである

クハデイジヤに續いて熱心に回教を信したるはゼイドにして彼は基督教の素養あるが故に容易く改宗し、且マホメットと膠漆の如き親交を訂したれば一身を犧牲として預言者に捧けたるやの觀がある。また渠の養子アリイは當時十三四歲の少年にして早くも鋭智と決斷に富める徵候を現はした。彼は少童の時より回教の中に養はれたれば生れながらの信者といふも過言ではなからう。傳說によればマホメットは一日其隣人の嘲笑を避けんが爲めにアリイと共にメッカ附近の洞窟の中にて祈禱に熱中しつゝあつた。時にアブ、タアリブは偶然其處に

來りて、『汝が奉する所の新信仰は何物なるか』と問ひたるに、『這は神と天使と預言者との宗教なり、アブラハムの宗教なり、予は神の使徒として人民の中に遣はされたり、伯父よ、汝は予が宗教に入るを乞ふべき最も重要なる人にして神の預言者を補佐すべき最も價値ある者なり』と渠は答へた。されとタアリブは『予は我宗教を棄る能はず、祖先の風習を守らざるべからず、然れども予が生存する間は何人も汝を苦しむるを許ざるべし』と誓ひ、またアリイに向て『兒よ、渠は汝を招いて不良なることをなさしむる者にあらず、汝は渠に從ふて可なり』といふたと傳へてある

斯の如く回教の禮拜は其始めに方りては秘密に行はれたのである。何となればは舊宗教に對する反抗は即ちカアバの聖殿に對する凌辱にして、カアバの聖殿に對する凌辱は即ち其監理者たるコレイッシ族に對する攻擊に齊しきが故に、直ちに彼等の恨みを買ふこと勿論である。殊に渠が祖父の歿後ハアシム家は漸く貧弱となりて勢力を失墜したるに反して其競爭者たるオメイヤ家にはアブ、ソフィアン (Abu Sofian) なる大酋長ありて其勢力侮るべからざるものであつた。果せる哉、彼はマホメットの大敵として後世に其名を殘すに到つたのである



次に渠の莫逆の友にして最初に改宗したるはアブ、ベクル (Abu Bekr) にして彼はクハデイジヤの近隣に住し渠が結婚已來親交を繼續したのである。而してアブ、ベクルは夙に宗教改革に志ありたれば容易く回教に歸依して渠を以て眞の預言者と確信した。されはマホメットも、『予が信仰に入らんことを慫慂するや何人も狐疑逡巡せさるものなし、唯アブ、ベクル一人あり、逡巡せす狐疑せすして之に入れり』といふたのである。アブ、ベクルはマホメットより二歳の年少にして、短身、痩軀、前額高く秀て、顏貌風姿頗る愛すべきものがあつたといふ。彼は天才に於ては缺乏したるも智慮最も深く温柔沈著にして同情に富み、情に激せす、血氣に速らすして確信と理性とに充ちたる人物であつた。而して彼のマホメットに對する友情と敬愛とは十年一日の如く赤誠悃切を以て回教の爲めに努力し、爲めにアル、シディク (Al Siddiek) 即ち『眞誠の人』と呼はれたのである。彼は當時謹勉にして節儉なる富商の一人にして大約四萬個の銀貨を所有した。而して彼が仁惠にして同情に富めるや、新信仰に入りて迫害を蒙る奴隷ある時は直ちに私財を拋て之を贖ふを常とした、之か爲めに十一二年の間に彼は三萬五千個の銀貨を費したといふ。斯の如く仁惠を施して回教の爲めに信者を作り、

健全にして公平なる判斷力と、快活にして明晰なる言語を以て人に接したるが故に彼は同族中にて名望家の一人であつた。されば彼の改宗は回教發達の礎石にして後年マホメットの後繼者として守成の効を完うし、恰も大迦葉の佛陀に於けるが如き關係となつたのである

アブ、ベクルの感化によりて改宗したる者少からず、中に就てサアト(Sad)は十六七歳の青年にして弓箭を作るを業とし、回教徒の秘密會を妨碍したる暴民を攻擊し、回教の爲めに第一箭を放ちたる勇士として知られてある。次はゾベイル(Zobeir)にして彼も亦同樣の青年なるが、彼は屠獸を業とし、後年回教史に其名を垂れたる軍人である。次はタルハ(Talha)にしてアブ、ベクルの近親なる青年なりしが、これ亦有名なる軍人となつた。次はオトマン(Othman)にして當時三四十歳の商人なるが、マホメットは其女ロケイヤ(Rockeya)がオトバと離婚したれば彼女をオトマンに歸かしめた後年彼は回教王となりたる著名の人物である。次はアブド、アル、ラマアン(Abd al Rahman)にしてマホメットより十歳の年少なるが、富裕にして品性ある商人であつた

最後のアブド、アル、ラマアンがマホメットを訪ふべく伴ひ來りたる四人の者



も亦一時に改宗した。其第一はオベイダ(Obeida)にしてマホメットの伯父の子。第二はアブ、サルマ(Abu Salma)第三はマヅウンの子オトマン(Othman son of Matzum)にして彼は出家遁世の風を好み改宗已前より飲酒を禁し、妻子を棄て隱棲せんとしたるもマホメットは彼を諫止したのである。渠は以爲らく『神は其預言者をして出世間的ならしめす』。これ回教が徹頭徹尾世間的に流れ出家遁世の風なき所以にして吾人の注意せざるべからざる一特徵である。またアブ、ベクルが私財を投して解放したる奴隷の中にて最も著名なるはアビシニヤの女奴の子ビラアル(Bilal)にして、黑面長身、頭髮蓬亂、一見黑鬼の如く、大聲を放て祈禱の時期を教徒に報するの任務を帶ひたのである。這は回教にては鐘を用ひざりしが故に此の如き任務を必要としたのである。此外アブ、ベクルの僕なるアムル、イブン、フォヘイラ(Amr ibn Foheira)、マホメットの僕なるアブドアラ、イブン、マスウド(Abdallah ibn Masud)鐵工たりしクホバアブ(Khobab)など皆時期に改宗したのである。かく奴隷にして改宗する者の多きは彼等が外國人にして猶太教、基督教等に接觸し多少一神教の思想を有したるに由らねはならぬ。以上記載した る改宗者の外、當時宗教改革家の一人として知られたるオベイドアラ(Obeidallah)

も回教に入つた、彼は改宗の後迫害に耐へすして其妻と共にアビシニヤに逃れこゝに基督教を奉して同地にて歿した。是の如くにしてマホメットは開教已來三四年の間に大約四十人に近き信者を得た。されと彼等の大部分は少年、奴隷、外國人等なれば、回教の基礎は極めて薄弱にして、一の集會所すらなく個人々々に就て布教せられつゝあつたに過きぬのである

メッカ人は最初マホメットの新宗教を說くや單に無害なる宗教的狂人と認めたるのみ、されど回教徒の次第に增加するに從て漸く敵愾心を起し、其進路を妨礙せんとするに至りたのである。何となれば渠は極端に偶像を排斥するか故に彼等が祖先已來繼承せる諸神の祟拜を蔑視し、アラビヤ宗教の中心點なるカアバを凌辱すること太甚しい、これ彼等が憤懣措く能はさる所である。是に於てマホメット攻擊の聲は四方より反響して、新宗教の未た生長せざるに先ちて二葉のうちに其根本を斷つに如かすとなし、一方に於てはマホメットを愚弄し虐待し、他方に於ては渠が信者を脅迫して强ひて新信仰を放棄せしめんとしたのである。故に渠が上帝の使命は憎むべき詐僞的行爲として罵られ、渠が誠實なる訓誨は半狂的囈語として斥けられ、渠が熱誠を罩めたる祈禱は一種の魔術と



して誹られ、渠が福音に心を奪はれたる奴隷は鞭韃せられ呵責せらるゝの不幸に陷つたのである。されば回教徒は譏嗤抵排せらるゝのみにあらずして往々暴行を加へられた、其一例を擧ぐればサアド(Sad)が他の信徒と共にメッカに近き山間に退きて祈禱しつゝありたるにメッカ人等は偶然之に邂逅して罵詈を加へたれば諍論は變して格鬪となり、サアドは駱駝の針を以て對手を毆打し負傷せしめた、これ回教の爲めに流したる最初の鮮血である

紀元六百十三年即ち渠が第四十四歲の頃、メッカ人と無用なる紛爭を避けんとにや渠は信徒の一人なるアルカム(Arcum)の家を集會所として用ひた。而して回教徒の虐待せらるべき虞ある者は日中此家に潛伏し、夜陰に乘して逃れ去るものあり、或は不信者にして此家に伴はれてマホメットよりコラーンを聞き忽ちに改宗するものあり、或は數多の信徒こゝに聚りてコラーンを讀むことありて、アルカムの家は一種の秘密集會所の如く、また教會堂の如くなり、後には『回教の家』として著名のものとなつた。これより後マホメットの親戚知己の回教に入るもの多きを加へて皆アルカムの家にて教を受けたのである

吾人は回教勃興の始めに於て回教信徒が如何に熱烈なる信仰を有せしかを證せ

んが爲に玆に一例を擧げん。偉人ハアシムの曾孫なるムサブ(Musab)は一日アルカムの家に來りてマホメットの教に從ひたるも、彼の母及ひ其一族は皆激熱なる回教の反對者なるが故に彼は其改宗を秘密にしつゝあつた。然るに隱れたるより顯れたるはなく彼の改宗は忽ち世の風評に上りたれば彼の親戚は彼を捕へて固く之を禁錮した。されど彼は遂に幽囚を脫し逃れてアビシニヤに避難した。後年彼はマホメットの代理としてメジイナ市にて布教を試み、メッカに歸省したるに彼の母は使を以て彼に謂はしめた、『嗚呼、不孝なる兒よ、汝は母の住する市中に入らば何故に先づ母を訪はざるや』。彼答て曰く、『否、予は神の預言者に謁するに先ちて何人の家をも訪はざるべし』と。かくして彼はマホメットに謁して後其母を見たるに母は怫然として『汝は尙ほ背教者なるか』と問ふた。『予は主の預言者と回教なる眞宗教を奉す』、と答へたるに母は『汝は先きにアビシニヤに於て受たる艱苦と、今またメジイナに於て受たる楚痛を以て滿足せざるや』と叫んで再ひ禁錮せんとの謀計あるを仄めかしたれば、彼は毅然として、『汝は人をして强ひて其宗教に背かしめんとするか、汝若し我を禁錮せんと欲して、人をして手を吾に下さしめば吾必ず彼を殺さん』と叫ひて決心の動すべからざるを示



した。母は之を見て悲憤に耐へずして涕泣したといふ。以て回教徒の決心が如何に堅かりしかを知るであらう。斯の如くコレイッシ人の迫害は却て回教徒の團結を鞏固にし、一方には彼等に對する同情を深からしめ、他方にはマホメットをして武力的布教の口實を作らしめたのである。殊に回教信者の特色は一神を信ずるのみにあらず、マホメットを預言者として之を奉戴し、生命財產を犧牲にしても渠に服從の義務を果さんと誓約するのであるから、彼等が團結の固きも亦偶然ではないのである

此時に方りて回教の信者は少年、奴隷、婦女の輩のみ多くして有力なる人物に乏しきを以て、マホメットは努めてメッカの酋長等を誘引せんとし、一日ワリイド(Walid)なる酋長と懇談しつゝありたるに盲人アブドアラ(Abdallah ibn Omm Maktum)が適〻其處に來りて天啓を聞かんことを請ふた。マホメットは酋長との談話を妨げられたるを憤りて沸然として其無禮を咎め、一も彼の爲めに教を說かずして去つた。されど渠は忽ち之を悔ひ、神の啓示に托して、渠が富貴の人に阿諛して貧困の信者を等閑にしたるを批難した。これコラーンの第八十章に見えたる文字である。アブドアラは盲人なれども非凡の人物にしてコラーンに

於て造詣深く、マホメットに重く用ひられてメジイナ市長に任せらるゝに至つたのである

かゝればマホメットの教田は次第に開拓の運に向ひ、殆んと五十に近き生靈を支配するに至りたれば、コレイッシ人の反抗は愈〻激烈の度を加へ、奴隷、外國人、貧弱なる家族は或は凌辱せられ、或は幽囚せられ、或は燃るか如き日光の中に砂上に晒され、炎熱と饑渴の爲めに卒倒するものあり、かくして強ひてマホメットを罵りカアバの神を信することを自白せしめたのである。ビラール(Bilal)も亦烈日に晒され、劇しき拷問に遇ひたれども死を決して、アハド(Ahad)アハドと反覆して叫ひつゝありたるに、幸にしてアブ、ベクルが其處を通過し彼が心操を憐みて直ちに贖ふて之を解放し良心の自由を得せしめた。かゝれば迫害と凌辱とは毎日の出來事となりて保護者なき回教徒の慘況は謂ふに忍ひさるものであつた。されどマホメット、アブ、ベクルの如き人物は其親戚の保護によりて危害を免るゝことを得たのである

また當時アムル(Amr)と稱する少年ありて彼は天才の詩人にして巧みに韻語を聯ねてマホメットを翻弄し、嘲笑し、揶揄したる爲め著しく回教の進路を妨碍した。また一方に於ては人民は渠に迫りていふ、渠にして眞に神命を帶ひたらんには古への預言者の如く、盲者をして見せしめ、死者をして復活せしめ、瓦石を變して黃金となすの奇跡を示せと。渠は之に答へていふ、予が奇跡を見んと欲せばコラーンを見よ、コラーンは天啓にして無文字の預言者が誦出したる韻文なり、如何なる奇蹟もコラーンに如くものなし。かく答へたれとも爭で之を信する者あるべき。されば渠が死後復活の說は痴人の夢として斥けられ、上帝の審判は狂人の忘想として笑はられ、神罰、宿命の論は嘲弄と哄笑とを以て迎へられた。殊に渠が偶像に對する攻擊は人民の憤懣を挑發し、危險は益々太甚しきを加へた。是を以てマホメットは信徒の慘狀を見るに忍ひすしてアビシニヤを以て避難の地と定めて十一人の男子と四人の婦人をして紅海を渡りて逃亡せしめた。而して渠が娘ロケイヤの夫オトマン。アブド、アル、ラマアン。ゾベイル。ムサブなど此一行に加はり、アビシニヤの基督教徒によりて歡迎せられた。此出來事は渠が傳道の第五年即ち紀元六百十四年に起つたのである



## 第三節　マホメットの轗軻

此時に方りてマホメットが苦心煩悶は想像するに餘りある、コレイッシ人の毒罵は黒蛆の如く渠が胸を嚙み、侮辱は火箭の如くに渠の身に蝟集する、憐れ渠が親愛せる篤信者は住み馴れし父母の國を捨て遠くイジプトの野に逃竄し。渠が前途は全く暗黒である、一點の螢火さへも認められぬのである。斯る難境に處して悲痛なる光陰を送れる渠は日夜に惡魔の細語を聞かざるを得ぬ。如何にして此難關を切り拔けんか、如何なる方便を回らして不信の人民を改宗せしめん、如何なる善巧の策によりて酋長等の反抗を緩和せん、これ渠が焦慮したる處である。是に於て乎、渠は遲疑し、猶豫し、左顧右眄した、渠は直往邁進することを能はず、此機に乘して惡魔は渠に手を下したのである

一日メッカの重もなる酋長等は聖殿に會合して市政を議しつゝあつた。時にマホメットは彼等の側に座を占めて、コラーン(第五十三章)を朗讀した。驚くべし渠は舊宗教の迷信を容認し、アラビヤ人が從來崇拜したる女神、ラア(Lat)オッザア(Ozza)などを讃嘆し、無上大神と其信者との中間に立て女神は媒介をなすといふのであつた。これ何たる妄言であらう、這は渠が開教の始めより否定したる迷信である。アラビヤ宗教の墮落は實に此迷信に胚胎して居る。さるを今や



渠は之を容認せんとするのである、果して然らは渠が宗教改革の要、畢竟何處にかある。されど酋長等はマホメットがコラーンを讀むを聽いて大いに欣抃雀躍した。渠が最後に、『故に稽首して神を拜し以て之に事へよ』てふ結尾の語を誦したる時、彼等は一齊に地に伏して叩頭し、老耄せるワリイドは地に伏すること能はずして一握の土をとつて其額につけて禮拜した。此の如くマホメットは自ら讓歩して陳腐なる迷信と調和し、方便を回らして硬骨なるコレイッシ人を懷柔せんとしたのである

かくして回教と舊宗教との調和は成立し、諸酋長は攻擊の手を緩めてマホメットと和睦し、人民は擧つて新教に改宗せんとした。此喜はしき報知は早くもアビシニヤに逃れたる同胞に達して彼等は再ひメッカに復歸することとなり、またマホメットは之によりて暫時外部の壓迫を免るゝことを得たのである。されど汗は單に姑息偷安に過きすして衷心を欺ける表面上の平和は到底永續することを能はず。果せる哉、渠は天使として現れたる良心の非難を受けた。天使はいふ、『汝は何事をか做せる、汝は予が與へざる天啓を人民の前にて陳べたり』と。渠は痛く前非を悔いた、良心に背き、神命に戻り、自信を忘れて異教と調和し

たるは渠が生涯の過ちである。かく覺悟したる渠は直ちにコラーンを訂正し、女神を排斥し、偶像を非難し、眞神の外に瞻禮すべきものなきを明にした。嗚呼、君子の過ちは日月の食の如しとはこのことであらう

マホメットが一旦天啓として誦出したるコラーンの語を訂正したるは太甚しく批難の聲を高め、渠が預言者としての位置をも危くしたのである。『マホメットは我等を誑かし我等を瞞し、我等の神を汚辱したり、渠は信認するに足らず、神の預言者とは果して此の如き人物なるか』とは反對派の各々の口より出たる非難である。されば コレイッシ人の反抗は以前にも增して烈しくなつた。これ自然の勢である

アビシニヤに逃亡したる回教徒はマホメットとコレイッシ人との調和が成立したりと聞いて、滿二ヶ月の客寓の後メッカに向つて歸途に上つた。されど彼等は未だメッカに達せさるに早くも調和の破裂したる報知を得た。然れとも一度懷かしき故郷を訪はんと決心して各々親戚朋友の保護の下にメッカに入つたのである。之に反してコレイッシ人は回教徒がアビシニヤにて優遇を受けたることを傳聞して益々憤激し、迫害、虐待を以て之に臨んだ。是に於てマホメット



は再ひ其信徒をしてアビシニヤに難を避けしむるの止むを得さるに至つたのである。依て渠が傳道の第六年即ち六百十五年に先發隊はイジプトに向て出發し、他の信徒も之に尾してアビシニヤに移住し、合計百一人の亡命者を生したるが、其中八十三人は男子にして餘は婦人小兒等であつた。これが第二回の移住である

かゝればマホメット自身も亦其伯父アブ、タアリブの保護なかりせば渠が自由、否、生命の安全も恐らくは得られざる有樣となり、或は漫罵を兩注して渠を辱しむる者あり、或は不潔物を投して渠を汚す者あり、或は渠の寵に山羊の腸を投入する者もあつたといふ。また一日渠はカアバの聖殿にてコレイッシ人の爲めに要擊せられんとしたるもアブ、ベクルの援助によりて危害を逭れたともいふてある。コレイッシ人の憤懣もさることにて渠の爲めに其神は辱され、其祖先は辱められ、其朋友は奪はれ、彼等自身は愚人として呼はれた。これ彼等の忍ふ能はざる所である、『我等は此敵に對して復讎せざるべからす、我等は彼を得て滿足せさるべからす』とは諸會長がアブ、タアリブに迫りていふた所である。アブ、タアリブは今や進退谷れり、彼は進んてコレイッシの同族と絶交する能

はす、されど退いて其甥を捨つるに忍ひず、此窮境に陷りたる彼はマホメットを諫めてコレイッシ人と衝突せざらしめんと努め熱心なる忠言の末、『故に汝自身と予とを救へ、予が耐ふる能はざる重擔を予に課する莫れ』といひたるに渠は之を以て伯父が渠の保護を放棄したるものと想像し愕然驚駭の色を現はしたるも、渠が決心は牢として拔くべからず、『假令彼等が予の右方に大陽を持ち來り、予の左方に月を持ち來り强ひて予の企を拋棄せしめんとするも、神、洵に予に命し給ふにあらずんば死すとも予の目的を捨てじ』といふて最後の決心を示した。實に捲くべからず轉ずべからざるは渠が金鐵の意志である。されど感情に脆き渠は悲痛に耐へずやありけん、熱涙に咽ひて起て去んとした。是に於て伯父もホメットが何れへか姿を隱したりとの風評ありたれば、アブ、タアリブは是必ずコレイッシの詐謀ならんと想像して立ろに同族の壯者を武裝せしめ、自ら先頭に立ちてカアバに向て出發した。されど开は風評に止まりてマホメットには何等の危害もなかつたのである。翌日老酋長は同族の青年幷にマホメットを伴ふてカアバに至りコンイッシ人の面前に於て各々白刃を閃かして、叫んで曰く、



『汝等渠を殺さんか我等は一人も生きて殘らざるべし、汝等は死せざるべからず、然らずんば我等の各々は死せざるべからず』と。かくアブ、タアリブは一門の生命を賭してマホメットを保護したのである

マホメットの叔父ハムザ(Hamza)及びオマアル(Omar)の兩名士が回教に歸入したるは同じく六百十五年であつた。這は回教にとりて頗る重大の出來事なるのみにあらず善くアラビヤ人の性質を現はして興味ある說話である。或日マホメットはサフア(Safa)の小丘に登りて懇ひつゝありたるに酋長アブ、ヂャル(Abu Jahl)なるもの適〻渠の面前を通過し、忽ち毒舌を逞うして渠を侮辱した。されどマホメットは隱忍默堪、詬毒を呑みて一言をも發せざりしが故に何等の爭鬪もなくして二人共に其處を去つたのである。然るに一人の女奴が傍より此光景を實見してマホメットに同情を寄せたるにや、ハムザが佃獵の歸途、弓箭を肩にして此處に來るに逢ふて直ちに之を語つた、ハムザは怒氣心頭より燃えて飛ぶが如くにアブ、ヂャルを追跡してカアバに來り、コレイッシの群衆の中に彼を見出すや否や、『汝はマホメットを侮辱したり、予も亦渠の宗教を奉ずるものなるを知らずや』と叫びもあへず弓を以てアブ、ヂャルを毆打した。是に於てアブ、

ヂャルの親戚は起つてハムザと格闘せんとしたるも彼は之を制止し己れの過ちを自白し幸にして事なきを得た。ハムザは激怒の餘り回教を信ずと公言したのであるが遂に其言を踐みて改宗し、後年回教の爲めに奮闘して『獅子』の曉名を博したのである

此後久しからずしてオマアルも亦改宗した、彼は回教に對する敵愾心最も深く其教徒を迫害すること過酷なるを以て有名であつた。然るに彼の伯父なるアブ、ヂャルがマホメットを侮辱したるによりハムザの爲めに毆打せられたるを聽いて嚇怒措く能はず、且つコレイッシ人の教唆するさへありたれば彼は無謀にもマホメットを殺害せんと欲して其隱家へ赴きつゝある途中、意外にも彼の妹及び其良人サイド(Said)も秘密に回教を奉しつゝあるを聞いた。依て彼は驀直に其妹の家に闖入したるに、適〻夫妻は其奴隷をしてコラーシの第二十章を朗讀せしめ熱心に之を聽きつゝあつた。奴隷は他人の跫音(アシオト)を聞くや否や退いて身を隱したるもオマアルはそれと悟りて『予は汝等が背教者なるを聞けり』と怒號したるにサイドは之を遮りて『然れども他人の宗教にも眞理あるやも知るべからず』といふた。オマアルは此一言にて彼等の背教を看破し、サイドに飛ひ掛りざま烈し



く蹴て之を倒し、足にて其胸を蹈み將に大事に及はんとした。妻は良人の危急を救はんとして之を遮り却て其面部に負傷し、流血斑々として彼女の衣を染むるに至つた。彼女は最早耐ふる能はずして叫た、『我等は改宗せり、我等は神と預言者とを信ず、オマアル、汝は汝の欲するが如く我等を爲せ』と。オマアルは我妹の顏より鮮血の流るゝを見て其暴行を悔い、心を和けて、コラーンを示すべく彼等に請ふた、されど彼女は『清淨の者にあらざれは聖書に觸るを許さず』といふて先つ彼の手を洗はんことを要求した。是に於てオマアルは其身を清めてコラーンを讀みたるに忽ち其雄大なる思想に打たれて改宗し、奴隷に導かれて回教徒の集會所なるアルカムの家に向て出發したのである。時にハムザ等は集會所にありて戸隙よりオマアルの來るを窺ひ見て、驚駭措く所を知らす。されどマホメットは靜かに彼等の動搖を制止し、自らオマアルを迎へ入れたるに何そ圖らん彼はマホメットを預言者なりと證言して改宗の誠意を表した。されはマホメットは驚喜一番、覺えす『神は大なり』と叫んだといふ

ハムザとオマアルとはコレイッシ族中の龍虎ともいふべき勇士にして、彼等の改宗は著しく回教の勢力を增加した。ハムザは剛健なる體軀と制すべからさる

勇氣とを有し到る處に回教の敵を破りて『回教の獅子』として今日までアラビヤ全土に驍名を轟かしたるも不幸にしてオホド (Ohod) の戰爭にて亂軍の中に戰死した。此事は後章に至りて叙述するであらう。オマアルは改宗の當時廿六歳の壯丁にして、身體は長大に顏面は赤色にして嶄然群を拔くこと猛虎の群犬中にあるか如く、加ふるに性急大膽にして烱々たる眼光と鐵石の如き意志を有し、事に當りては能く其目的を達せざれは止まぬのである。されど彼の弱點は餘りに怒り易くして喜怒計り難きにあり、故にコレイッシ人は皆彼を乳虎の如く怖れた。彼はマホメットの死後アブ、ベクルを回教王に推撰し自ら之に代りて第二代の回教王となりて史乘に大なる足蹟を印したのである

オマアルの改宗は紀元六百十五年より十六年に亘る頃であるが、此時より回教徒はメッカにて公然回教信徒たるを告白したる一新時期を形成した。何となれは此時まで回教徒はアルカムの私宅を以て秘密なる集會所兼教會としたのであるが、オマアルの轉宗以後は彼の保護によりて公然カアバの近傍に會合し又は聖殿に來りて新宗教の禮拜を行ひ、毫もコレイッシの反抗を恐れざるのみか却て挑戰的態度を示したれは後者にとりては由々しき大事にして一大恐慌を來したるも亦自然の勢である



コレイッシ人は以爲らくアブ、タアリブはマホメットの邪法を制抑せすして留害を其卵殼の中に滅ほす能はす、爲めに今日あるを致した、これタアリブの責任である。またハアシム一家の徒は回教徒たると否とを論せす一致して渠を保護しつゝある、されば彼等も亦マホメットと罪を同うする。故にハアシム家全般に對してコレイッシ族は絶交を宣告せんと。乃ち彼れ等はアブ、ソフィアン (AbuSofian) を總理として同盟を訂結し、ハアシム家とは結婚せす、賣買せす、一切の交通を杜絶するとし嚴格に條約書に調印して之をカアバに納めた。これは紀元六百十六年の出來事にして渠が第四十七歳の時である

マホメット及び其一族なるハアシム家はコレイッシの高手的示威政策に壓迫せられて止むを得すメッカの東部に位置したる城砦の内に退いた、當該城砦は斷巖絶壁にて圍まれたる險要の地にして一條の細路ありて之に通するのみである。故に彼等は生命財産の安全を得んが爲めにアブ、ラハブ (Abu Lahab) 一人の外は皆此中に退いたのである。かくして社會と全く孤立したる回教徒は貧弱にして自ら隊商を組織する能す、また日用の物資を外界より得る能はす、日に月に窮

乏に陥りつゝあつた。唯毎年巡禮の聖月には一切の諍鬪は中止せらるゝが故に此間に多少の給供を得るのみであつた。マホメットは聖月の外は常に城砦を離れず。聖月に入るときは出てメッカに蟻集し來るアラビヤ人に向つて新宗教を說き、また他の市場にも往來して布教したのである。ハアシムの一族は嚴格なる絕交によりて愈〻衣食に窮し次第々々に餓孚の色を現しつゝあるので、彼等の苦痛に對する同情は自然にエレイッシ間に起り、且つ同盟條約を記したる羊皮紙は白蟻の爲めに喰はれ、滅裂して讀むべからざるに至つた。是に於て絕交同盟は全く崩潰してアブ、タアリブの一族は餓死の厄を逃るゝことを得た。これ紀元六百十九年の出來事として知られてある

今やマホメットは自由を恢復した、渠の信者は三ヶ年の長き絕交の間に幾多の苦き經驗を嘗めたれども神は決して渠等を捨て給はざるを確信するに充分である。かくして渠は幸にも外部よりの災厄を免るゝと殆んと同時に內部なる彼が家庭の中に一大不幸は生し來つた。絕交同盟の解けてより數月ならずして彼が最愛の妻クハデイジヤは回教の前途黯澹なる六百十九年の十二月に溘逝した。彼女は實に貞操なる夫人であり、賢明なる母親であり、また知己であり、保護者である。彼女は廿五年間、其所天に仕へて始終一日の如く、回教第一の改宗者である。宗教上の確信にも、傳道の成効にも、彼女の影響は大に與つて力かあつた、されは彼女は實に回教の母ともいふべき人物である。彼女の位置は他のアラビヤ婦人によりて補塡せらるべきも、彼女の忠實なる心操と渝らざる愛情とは永久にマホメットが恢復すべからざる損害である。情に脆く涙多き渠が悲痛落膽は喩ふるにものがなかつたであらう。然るに災厄の來るや必ず一回にて止まらず、クハデイジヤの歿してより數週間を隔て渠が大恩人たるアブ、タアリブも八十歳の高齡を以て病死したのである。タアリブはマホメットを八歳の時より養育したる伯父にして渠が開教以來常に生命財產を賭して渠を保護したる恩人である。渠は一大城砦を失ふた、渠は最早逃れ入るべき隱れ家がないのである。斯くして渠は六百十九年の末には其妻の棺車を送り、翌年の一月には伯父の柩を送りつゝ聲を放つて泣いたのである。哀い哉、第二のクハデイジヤは再び得らるゝこともあらん、されど第二のアブ、タアリブは再び得べからず、渠が涕泣したるも亦理ありである

マホメットの悲痛はコレイッシの歡喜である。渠が落膽は敎敵の好望である。

渠の血涙は反對派の甘露である。コレイッシは不幸なる渠を指して嗤ひ、渠の面に唾し、渠の頭に土を拋つのである。一日渠は暴民の爲めに其頭上に塵埃を載せられ、其儘に歸りたるに渠の娘は之を拂ひ落しつゝ、悲憤の涙に咽んだ。渠は『吾女。泣くこと莫れ、詢に汝の父を助くる者は神なればなり』といふて彼女を慰めた。以て當時汝の境遇を察すべきである

コレイッシは到底濟度すべからざる衆生である、彼等は濟度す可らざるのみにあらず、危險なる人民である、彼等は神の敵である。マホメットは今や保護者を喪ふて此敵中に生活しつゝある、彼等は必ずや其毒手を渠の上に加へん。故に渠は其保護者をメッカ以外に求むべき必要を痛切に感じたのである。されば渠はアブ、タアリブを葬りて未た二週間ならざるに早くも忠僕ゼイド(Zeid)一人を伴ふてタイフ(Tayif)に向て出發した。タイフはメッカの東方六七十哩なる都會にして其市民はコレイッシを嫉視するもの多ければ感情上メッカ人に反抗して回教に歸入すべしとはマホメットの打算した所であらう。渠は先づタイフの名士三人を訪ふて其新宗教を信奉し、且つ渠を保護してメッカ人に抵抗せんことを乞ふた。されどタイフ人は元來ラア(Lat)なる偶像の盲信者なるが故に渠の



說に耳を欹くる者なく、コレイッシと同じく渠の便命を排斥した。渠は殆んど十數日間タイフに滯在して遊說を試みたれども、蠻民は却て渠を以てメッカの秩序を紊したる反逆人の如く思ひ、預言者の獅皮を蒙りたる騾馬の如く賤みて、嘲罵に加ふるに暴行を以ててし、遂に石を投じて渠を市外に驅逐するに到つたのである。是れを以て渠は兩脚に負傷して流血淋漓として衣を染め、ゼイドは身を以て渠を掩はんとして頭部に負傷し、二人共に困憊し、懊惱し、落膽しつゝ、一の果物園に入りて葡萄の下にて休憩した。此時メッカ人なるオトバ(Otba)シエイバ(Sheyba)の二人はマホメット主從の有樣を傍觀し、隣愍に耐へずして其奴隷アッダス(Addas)をして葡萄一盆を持して二人に與へしめた。然るに彼はマホメット主從が疲憊困頓の間にも熱心に神を祈りて葡萄を受けたるを見て直ちに改宗して回教に入つた。此奴隷はニヲベ(Nineveh)より來りたる基督教徒である。かゝる時にも天を咎めず神を遺れざる渠はいふた、『主よ、予は人間の前にありては怯弱、羸劣、にして爲すとなきを汝に訴へざるを得ず、されと汝は貧者、弱者の主なり、汝は予の主なり、汝は何人の手中に予を棄んとするか、予の周圍なる未知の人の手か、予に打勝てる敵人の手か……予は汝の外に賴

むべき力なく、汝の外に憑るべきものなし』と。かくして渠は歸途、ナクラ(Nukhla)に淹留した。开は渠がメッカ人の敵視したるタイフに入りたれは其危害を怖れたるに由る。ナクラに滯在中一夕ジン(Jin)と稱する鬼神が渠の天啓を聞いて隨喜したりといふ。これコラーンの第四十六章、第七十二章等に記したる所である。渠は數日をナクラにて費やして後にメッカに近つき市中に入らずしてヒラ山の近傍に到り、メッカの諸酋長に哀願して渠を保護せんことを求めたるに多くは皆之を拒絶したるもムタイム(Mutaim)一人渠を憐みて其乞を容れ、其義俠によりて辛うしてメッカに歸るを得た。これマホメットが全生涯中轗軻不遇の極度に達しる時である

## 第四節　マホメットの出奔

今やマホメットの生涯は黯黑の極點に達し、進退困憊如何ともすべからす。メッカに止まらんか、保護者なくして危險は愈〻身に逼りつゝあり。タイフに往かんか、彼等は再ひ投石を以て渠を迎へん。されどメッカは透底回教の母國たるべき所にあらす、コレイッシと回教とは兩立すべからす、コレイッシ滅ひすんは回教地を掃ふて滅せん、回教滅ひすんばコレイッシは焦土とならん。これマホメットの一生中窮厄の最極である、されど窮すること極まれは則ち通するは天地の大法である。果然渠は一閃の光明をメッカ以外に發見したのである。紀元六百二十年の聖月、全アラビヤの各地方より群り來る巡禮者に向つてマホメットは熱心に新福音を傳へつゝあつた。渠の目的は一日も速かに有力なる種族若しくは市民の己れを保護するものを得んとするにあり。されどカアバの篤信者は「僞預言者」を嫌ふと蛇蝎の如く、不信者も亦コレイッシの豪族に惡まれたる、渠を保護するの不利なるを知るが故に、渠は到る處に冷遇せられたのである巡禮の儀式は將に終り群衆は皆散亂せんとす。時に渠はメジイナ市より來りたる六七人の一團に邂逅した。彼等は同市に於ける猶太人と同盟したるクハヅラジ(Khazraj)族に屬して、夙に一神教の思想に化せられ、猶太教の法律を聞き、其メシヤ(Messiah)の出現を信したれば、マホメットの說く所は彼等の信したる所と符節を合するか如くにして、忽ち渠の使命を信したのである。然れども渠をメジイナに伴ふて之を保護することは彼等の敢てせざる所であつた。何となればクハヅラジ族はアウス(Aus)族なるメジイナの豪族と累代の宿怨ありて未た

全く平和を克復するに至らなかつたのである。仍て翌年再ひ來るべきを約して彼等はメジイナに還り、回教の教理を其同胞朋友に傳へたるに皆饑渇の飲食に於けるか如くに之を歡迎した。されは今は一人も預言者マホメットの名を聞かぬ者なき有樣となつたのである

メジイナ市はメッカの北方殆んと二百五十哩にありて、其住民には多くの猶太人及び基督教徒あり、純粹なるアラビヤ人にはアウス(Aus)クハヅラジ(Khazraj)の二族最も强大を極め、互にメジイナを其掌中に握らんとして競爭嫉視し、紀元六百十六年以來大小の紛爭は絶えなかつたのである。故にメジイナには全く一も主長たるべき者なく徒らに群小の暗鬪を見るのみであつた。かゝれはメジイナ人は一方に於ては夙に一神教の思想を有し、將來預言者の出現を夢み、他方に於ては慘澹たる政治上の紛諍に懲りて有力なる君主を奉戴せんことを希望しつゝあつた。是を以てメジイナ人の回教に歸することは水の低きに就くが如くマホメットが否運を輓回するの時機はこゝに熟したのである

紀元六百廿年は早くも去りて翌六百廿一年の巡禮期は來つた。メジイナ人は前年の約を踐みてミナ(Mina)に近き丘陵の間に於てマホメットと會合した。此時



彼等は十二人にして十人はクハヅラジ族に屬し、二人はアウス族の人であつた。彼等はこゝにマホメットを預言者として承認し、且つ誓ふた、『吾等は一神の外何者をも拜せさるべし、吾等は竊盜、姦婬、殺兒、讒誣をなさざるべし、吾等は預言者に背きて不正を爲さざるべし』と。以上の盟約はアカバ(Acaba)なる處にて訂結せられたるが故に「アカバの誓約」として知られ、また當該盟約には預言者を保護するの條項なくして單純なる信仰に止るが故に「婦人の誓約」とも名つけられた、何となれは回教の男子は必す預言者を保護し之を君長として奉戴するも、婦人は單に渠の使命を信するのみである。這は瑣細なる出來事なりしも回教成効の東雲にして將に旭日曦々東天に昇るの端緒となつたのである

十二人のメジイナ人は今や回教信徒として其故郷に還りて新宗教を擴布するに努めたるに其蔓延は極めて速かにして恰も猛火の枯野を燎くが如く、口より口に傳はり、家より家に入り種族より種族に擴りて驚くべき成効を見たのである。是に於てマホメットは特にメジイナ人の請ひによりて回教の布教師としてムサアブ(Musab)を派遣した、彼はアビシニヤに逃亡し後にメッカに歸りたる青年にしてコラーンを讀むに熟し、最も有爲なる適材であつたのである

これよりマホメットの注意は絶えず北方に向けられ、メジイナは渠が希望の港となり、ジエルサレム(Jerusalem)の聖地は渠が夢幻の間に隠顯し、遂に渠は一夜夢に聖市に到りて古への預言者等に歡迎せられ、それより七重の天界に上りて神の玉座を拜し、直接に神より一日五回の祈禱をなすの命を受けたと傳へてある。これコラーンの第十七章に畧記する所である。かく渠は希望の光明を北方に發見したればメッカ人に對する態度は少しく温柔となり、メッカ人も亦「渠、能く何をか爲すに堪へん」と思ふたであらう。されど渠は平靜の水の中に確信の動かすべからざる大盤石を据ゑ、現在失敗の雲の裏に將來最終の勝利なる杲日の輝くことを疑はなかつた。故に當時渠が陳へたる天啓には沈毅にして動かすべからざる決心と將來の成効に對する希望を以て充されつゝある。これ吾人がコラーンの第廿一章、第十四章等に見る所である。古への預言者は蔑棄せられ凌辱せられた、されど神は彼等をして最終の勝利を得せしめた。神は渠に對しても必ずしかすべきである。古への不信者は皆神の冥罰によりて滅亡した。神は必ずコレイッシにもしかすべきである。神の命令は絶對である、不變である、永久である。これマホメットの信して疑はざる所であつた。果せる哉、饑饉は



メッカに起つた、これ預言者を虐待したる神譴である。これ亦渠が確信した所であつた。今にして改めずんばメッカは十倍なる神の復讐を蒙らん、「何人たるを問はず神と預言者に從はざらんか、彼等の爲めに地獄の猛火は設けらるべし、彼等は永久に其中に住すべし」、これコラーンの第七十二章に見えたる文字である。かくして一年は比較的平穏に過き、翌六百二十二年の聖月に到りてメジイナの信徒は再ひマホメットと會合の準備をなし、極めて秘密に群衆の中に混してメッカに入り、布教師たるムサアブは先つマホメットを訪ふてメジイナの形勢を語り、成効の意外に偉大なるを報告した。此時渠の悦びは如何ばかりであらう。回教の旭日は黄金の光りを東天に投け始めたのである。會合は巡禮の儀式了畢の後、アカバの巖洞にて深夜秘密に行はるゝこととなり、マホメットは草木も眠るてふ丑の刻に、伯父アッバス(Abbas)一人と共に之に赴き、メジイナの信徒は或は二人或は三人相伴ふて潜かに此所に集り合計七十五人となつた。而して二人の婦女が其中に居つたのである。彼等はマホメットに從ふて回教を信奉すると同時に預者者を奉戴して假令彼等の生命財産を犧牲にするも渠を保護すべきを約して、各、其掌を以てマホメットの掌を拍ちて終生渝らざるを誓

ふた。是に於てマホメットはメジイナに移住して彼等と苦樂を共にすべきを約したのである。且つ渠は七十餘人の信者中より十二人の名士を撰ひて基督の十二使徒に擬し、盟約は滯りなく完結したる刹那、何人か洞外にて叫ふものあり、一同は之を聞いてコレイッシの間諜ならんと思ひ動搖の色あり、仍てマホメットは直ちに集會を解散した。これを第二のアカバの盟約をいふのである

翌朝に至りてメジイナ人はマホメットと密會したりとの風説熾んに行はれたればコレイッシ人は使を以てメジイナ人に抗議したるも、メジイナの酋長アブドアラ、イブン、オベイ (Abdallah ibn Obey) は風説の全く無根なるを辨して無事に局を結んだ。然れともメジイナ人の出發して後コレッシは密會の行はれたる事實を發見し、多數の信者が預言者を保護する誓約をなしたりと聞いて直ちにメジイナ人を追跡したるも、時期既に後れて遲了八刻の嘆をなしたのである

此時に方りてコレイッシ人の怖れたる所は回教徒がメッカより逃亡して地方の土族と結ひメッカに向て復讐を企つることである。故に彼等は一方には回教徒を脅迫して其信仰を棄てしめ、他方には彼等を禁錮して其逃亡を防かんとした。然れともマホメットは第二アカバの盟約後、數日にして回教徒全般に對してメジイナに移住を命したれば彼等は皆三々五々隊をなして秘密に逃亡したのである。而して逃亡の始まりたるは紀元六百二十二年四月の頃にして大約二ヶ月の間に回教徒は悉く其の家族と共にメジイナに移住した、而してメッカに殘留したる信徒は或は禁錮せられたる者、或は奴隷の軛に繫かれたる少數の人のみとなつた。當時移住したる人員は大數百五十人ばかりにして彼等ば皆メジイナにて歡待を受け缺乏なく生活することを得たのである



今やメッカに殘りたる者はマホメット、アリイ、アブ、ベクル及ひ其家族のみとなり、アブ、ベクルは鋭意旅行の準備をなし、銀貨八百を以て二頭の駿足なる駱駝を購ひ、且つ熟練なる嚮導者を備ふて出發の機會を待ちつゝあつた。マホメットが斯く衆人に後れたるは何故なるか吾人の知る能はさる所である。されど吾人の推測によれば渠は先つ其信徒をメジイナに遣はして形勢の定まるを待ち、且つ彼等をして悉く危險の地を脱せしめ而して後自ら移住せんとしたのであらう。コレイッシの酋長等は相會してマホメットに對する處置を議したるも群議紛々として決せす、渠を捕へて之を禁錮せんか、渠の信徒は必す來りて渠を救ひ出すべし。渠を追放せんか、渠は土族と結ひてメッカに寇すへし。渠

を暗殺せんか、ハアシム家は必す默止すべきにあらす。渠が逃亡に際して途に之を要擊せんか、時機を失ふの虞あり。是に於て彼等は各族より代表者を出して何事かを渠に要求せんが爲めに渠を訪はんとした。而して回教の史家は皆彼等が暗殺を企てたりと斷するも、其證文なるコラーンの第八章は充分暗殺の陰謀を立證するに足らぬのである。然れともマホメットは危險の身に逼りたるを感したるにや、當時廿歳ばかりの青年にして豪膽斗の如くなるアリイをして己れの赤き上衣を著して、臥床に横はらしめ、潛かに家を出てアブ、ベクルを訪ひ、逃亡の時機既に熟したるを告け、立ろに準備を整へて夜陰を利用して南方の外廓に出て、路を南方にとりて崔嵬たる山坂を攀ち上りてタウル(Thaur)山の絶頂に近き一の洞窟の中に潛伏したのである。傳說によればコッイッシ人は彼等を追跡して洞窟の前に來りたるも、適〻蜘蛛ありて其網を以て洞口を蔽ひたれは必す人なきを信して去り、またアカシヤの樹は急に生長して洞口を塞き數羽の鳩は其樹枝に集ふて不思議にも彼等の危きを救ふたといふ。這は一個の小說に過きされとも、マホメットとアブ、ベクルの生命が累卵の危きにありたるは事實である。タウル山はメッカより僅に一時間半にして達し得へき所である。



若しコレイッシ人が彼等を見出したらんには如何にすべき、コレイッシは多くして彼等は唯二人のみ、これアブ、ベクルの戰慄しつゝ渠に語つた所である。時にマホメットはいふ、『我等は二人なり、然れとも神は我等と共にあり』と。嗟于、渠が確信は動かざること泰山の如くである。斯の如くにして彼等は三日間洞窟に潛伏し、毎夕アブ、ベクルの僕より乳の供給を受け、其娘アスマ(Asma)に食物を送られて外界の形勢を窺ひつゝあつた。コレイッシ人はマホメットが踪蹟を晦したるを聞くや直ちに其家に就て吟味したるにアリイのみ居りてマホメットは影だに見えす、乃ちアブ、ベクルの家に至り見れば彼も亦逃竄して其子女のみあり。是に於て四方に人を派して彼等を追跡したるも一も其目的を達せす。仍て彼等はマホメットは既に遠く逃れ去りたるものと思惟して追擊を止めたのである

逃亡の時機は全く熟した、一刻の猶豫は百年の憾を遺すやも知るべからす、彼等は出發の準備をした。嚮導者と二頭の駱駝とはタウル山頂に持來され、アスマは食物を調理して夜陰に糧囊を洞中に持ち來つた、彼女は火急のこととて糧囊を繩ふべき紐を忘れたれは已れの帶を裂きて一半を以て糧囊の口縛し一半を

以て之れを駱駝に結ひ附けた。かくしてマホメットはアルカスワ(Al Caswa)と稱する駿足の駱駝に騎りてアブ、ベクルと共に出發した、それより彼等は普通の道路によらすして少しく紅海に近接したる徑路を辿りてメジイナに向て急進し遂に虎口を免るゝことを得たのである。這はマホメットか第五十二歳の時にして紀元六百二十二年六月廿日と推定せられてある

アリイはマホメットの出發後三日間メッカに止り渠が他人より委托せられたる財産を處分せん爲め毎日公衆の中に出たるも何人も彼を妨礙するものなく、優然としてメッカを見捨て預言者の後を追ふてメジイナ移つた。而してマホメットの妻女及ひ、アブ、ベクルの家族も亦一時メッカに殘留したれとも何人も之に危害を加ふるものなく安全にメジイナに移住したのである。これマホメットが全生涯に於ける逆境の最終にしてこれよりメジイナに移りたる渠は恰も暴風雷雨頓に止みて清涼なる皎月の光に浴するか如く、また虎伏す熱帶の曠野を過きて百華爛熳として錦の色を染出す温帶の花園に入りたる如く、境遇頓に一變して順境に向つたのである。而して渠が單純なる宗教家としての生涯も亦こゝに終るが故に吾人は少しく次節に於て評論を加へやうと思ふ



## 第五節　評論

マホメットが宗教家としての經歷は渠が第四十一歳より第五十三歳に至るの間、即ち渠か傳道の始めよりメッカ逃亡に至るまでの十二年間にして、其後と雖も新宗教の預言者たるに於ては毫も變化はない、併しメジイナに移りて以後渠の生涯は政治的となり軍人的となりて單純なる宗教家ではないのである。渠の任務は宗教擴張てふ簡短なる者でなく、社會を形成し、法律を布き、外敵と戰ひ、外交を修むるなど複雜なる職責を有したのである。さればメジイナ移住已後の渠が行實を以て基督、釋迦佛等の聖哲がなしたる德行に比較して優劣を判するは大なる謬見である。渠が宗教家としての眞價値は這個十二年間に起れる事實を本として評定せねばならぬ。渠は果して眞の豫言者であらうか、詐僞師であらうか。宗教家中には豫言者の虎皮を蒙りて其羊質を隱し、生佛(イキホトケ)の法衣の下に墮落僧の醜體を飾りたるものは往々ある。マホメットも其中の一人ではあるまいか。吾人は此疑問に向て否と答へさるを得ぬ、何となれば渠が果して一個の詐僞師にして表面上天啓を受くるか如く粧ふものとせば渠が馬脚は必す其近親朋友によりて先つ發見せられたであらう。然るに事實は全く之と反對にして渠

か最愛の妻クハディイジャは先つ渠の使命を信し、其僕ゼイドも亦渠を戴いて預言者とし、それより渠が朋友に及びて、アブ、ベクルの如き謹直方正の士が先つ渠の新福音を喜び迎へて終生回教の爲めに盡したるを見れば渠が羊質虎皮の預言者にあらざるを證するに足ると思ふ。且それ渠の目的が富貴利達の外にありて醇乎として眞摯なる宗教的行動なりしとも瞭かである、何となれば渠がカアバの偶像崇拜に反對したるは却て渠が祖先以來の自家の利益に反對したるものにしてコレイッシ族と相爭ふは富貴利達の前途を擁塞する者といはねはならぬ。しかも渠は之を爲して省みぬ。加旃、渠はコレイッシの壓迫太甚しくしてアブ、タアリブさへ渠の保護を中止せんとするの逆境に處して尙ほ『假令彼等が予の右方に大陽を持ち來り予の左方に月を持ち來りて强ひて予の企てを拋棄せしめんとするも、神、洵に予に命し給ふにあらすんば死すとも予の目的を捨てじ』と決心して言ひ放ちたるに徵すれば渠は一切を犧牲にして一神の正教に捧けたるものなるや明かである。また渠の逆境が其最高潮に達して其妻は逝き、其保護者は歿し、其信徒は多く海外に逃れ、四面楚歌に滿ちたる時、タイフに布教せんとして失敗し卻て亂民の爲めに侮辱せられ放逐せられ兩脚に負傷して悲



痛困憊を極め路傍の果園に入りて葡萄の下に困臥したるも尙ほ天を咎めず神を誹らず、奴隷が一盆の葡萄を施すに遇ふて熱心に神を祈り神の名にて之を受けたるが如きは到底眞摯ならさる渡世的宗教家の企て及ふべき所でない。されば當該奴隷が忽ち其比倫なき敬虔の至誠に感し其高尙なる預言者的高風に打れて改宗を申出て、渠を上天の使節と呼ひ、其頭、其手、其足に接吻したるも亦當然であるといはねばならぬ。また渠が謹直にして詐譎なきや、貧賤なる盲人を閑却したりとて自ら其罪を責め、舊宗教と調和せんと欲して女神を稱贊したるを悔い、コラーンを訂正したるか如きは君子の過を改むるに吝ならさる美德を發揮したのである。されば吾人は如何なる點より觀察するもマホメットを以て詐僞的人物となすことはできぬ、否、渠が大盤石の如くなる確信、渠が比倫なき忍堪、渠が献身的なる宗教の宣傳、渠が謹嚴方正、渠が逆境中の逆境に處して嵩高にして雄大なる預言者的行動の如きは決して甚著教のエス、佛教の釋迦に比して少しも遜色はないのである。宜なる哉、渠は回教徒の爲めに預言者として奉戴せられ、其命令は神の命令として絶對に服從せられたるや。また渠の心術は即ち回教徒の心術となりて現はれ、渠の操守は即ち回教徒の操守となり

て傚はれたれば回教徒は皆其信仰の爲めに父母の國を捨つるをも厭はず、迫害雨注の間に毅然として其操守を失はず、アブ、ベクルの如きは多額の資財を抛つて迫害せられたる奴隷を解放し以て良心の自由と一身の自由を得せしむるの仁愛を施し、また回教徒間にありては貴賤高下を論せず、人種の差別を沒却して皆同胞兄弟と稱し人類平等の理想を實行したのである。『僞りは滅ひん』、『神の復讎は必ず來らん』、『最終の勝利は必ず神にあらん』、『神の命令は絶對なり、永久なり、變すべからず』、これ渠が疑はんと欲して疑ふ能はざる所である。アブ、ヂャルは渠を詬辱した、アブ、ヂャルの詬辱何かあらん。アブ、ラハブは渠を讒誣した、アブ、ラハブ讒誣何かあらん。亂民は渠の家に不潔物を投入した、亂民の暴行何かあらん。暴人は渠の頭上に土芥を撒き散ちした、暴人の妄動何かあらん。コレイッシは同盟して渠と絶交した、コレイッシの絶交何かあらん。タイフ人は渠を市外に放逐し渠に投するに石を以てした、タイフ人の迫害何かあらん。コレイッシは渠を暗殺せんと企てた、コレイッシの暗殺何かあらん。艱難は渠に來るべし、逆運は渠を見舞ふべし、渠の前途は暗黑なるべし、渠の親戚は渠に背くことあるべし、渠の朋友、渠の從者は渠を賣ることあるべし、



渠は全世界に孤立して一人となることあるべし、されど渠は神と共とあり、神は渠を捨てざるべし。これ渠が信して疑はざる所である。果せる哉、神は渠を捨て給はず、メジイナ人は來りて渠を保護せんと誓約した。渠の好運は地平線上に曙光の輝くを見たのである。渠が十二年間の轗軻不遇は此旭日を迎ふる爲めの暗夜であつた。此十二年間の長き暗夜を透して渠は困苦し、逡巡し。忍耐した、而して紀元六百二十二年は此の暗夜の終局にして、渠の逃亡は回教大成効の曉鐘である。されは彼等が此歳を以て回教の紀元としたのも無理ならぬ所である。嗚呼、人生誰か不如意ならざるものやあらん、艱苦辛酸は固より何人も覺悟せざるべからず。若し艱苦辛酸に處して能くマホメットの如くならは吾人は以て人に誇るに足るであらう。吾人の薄志弱行なる亦こゝに至りて奮起一番す、況や薄志弱行ならざるものをや

## 第三章　政治家并に將軍としてのマホメット

### 第一節　殿堂の創建及ひ宗規の成立

メジイナに於けるマホメットの生涯は單純なる宗教家のそれにあらすして、政

治家とし將軍としての公生涯である。然れとも渠が本領は固より宗教的理想を實現するにありて、干戈を動かすも、法律を設くるも、外交を修むるも、內政を革新するも一に上帝の使命を果さんとする大目的の爲めにしたのである。されば宗教家たり、預言者たるマホメットの外に政治家たり、將軍たるマホメットを論すること能はされども、渠がメッカに於ける生涯は單に宗教的運動に止りたるに反してメジイナに入りてより宗教以外に渠が大手腕を揮ふへき新局面が開けたのである。故に吾人は本章に於て此方面に關する渠が運動と其成否の結果とを主として叙述しやうと思ふ

マホメットとアブ、ベクルとはメッカを出發してより後八日にして月曜の朝に至りメジイナの西南五哩なる山坂險路を辿りて其最高點に達したるに彼等が目的の港たるメジイナ(Medina)は彼等の面前に横つた。即ちネジド(Nejd)の豐饒なる平野は眼の及ばんかぎり東南に廣かり、北方にはオホド(Ohod)の峭嶢たる山脈あり、西南にはジエベル、アイル(Jebel Ayr)の連山屏風の如く眼界を遮り太古より有名なる椰樹の果園に圍まれたるメジイナは綠翠滴るか如き花園を送り出して恰も彼等を迎ふるか如くコバ(Coba)の外廓に聯りつゝあるを見た。此時マホ



メットの胸中には萬感交〻往來したであらう。渠が卯歳にして母と共に此處に來りし時は如何にありしか、渠が母と共に父の墓に詣てし時は如何にありしか、渠の母が俄かに半途にて病みし時は如何にありしか、母が最後の接吻を渠に與へし時は如何にありしか。此の如き幼時の追懷一たひ去れば現在の境遇は之に代りて渠の頭腦を苦めた。渠は如何にしてメジイナ市民に歡迎せらるべき、渠の信者は果して渠を保護するの實力ありや、アウス(Aus)クヅラジ(Khazraj)の二族は如何にして渠を待つべき。かく思ひ煩ひたる渠は敢てメジイナに入らすして先つ其南方二哩なるコバ(Coba)に到著したのである。然る間にメジイナの信徒及ひメッカより移住したる「亡命者」はマホメットがメッカより出發したりと聞きて毎日險路を攀ちて一二哩の處に出て其來るを待ちつゝあつた。然るに此時一人の猶太人ありてマホメット主從が駱駝に騎りてコバに入るを發見し、其屋上に登りて高聲に『渠は來れり、汝等の翹望したる渠は來れり』と叫んた。是に於て人民は皆メジイナよりコバへ馳せ集り、喜ひの叫ひは四方に反響し、疲勞したる旅行者は舊友の涙と新知己の笑ひの中に迎へられたのである。これ實に紀元六百二十二年六月廿八日の月曜であるといふ

これより渠はアウス族の一酋長なるコルトアム(Kolthum)の家に僑寓し、其後兩三日にしてアリイも亦メッカより來りて渠と同居し、こゝに四晝夜を費してメジイナの形勢を視察したるに、市民は一齊に預言者を歡迎せんとし、三歳の兒女に至るまで『預言者は來れり、渠は來れり』てふ欣ひの叫ひを以て市街に反響せしめたのである。されば渠は金曜日を以て愈〻メジイナに入らんと欲し、有名なる駱駝アル、カスワ(Al Caswa)に騎り、アブ、ベクルをして其後に乘らしめ、數多の信者に前後左右を擁せられて出發し、途中にて殆んと百名に近き信徒と共に祈禱をした。それより金曜は毎週祈禱會を開くべき聖日となりて基督教の日曜の如くなつたのである。祈禱畢りて一行は再び進發したるにメジイナ人は先を爭ふて一行に加はり、知名の人々は皆金色燦爛たる武裝をなして行列に加はりたれば恰かも遠征せる將軍が凱旋式を行ふ如くにして、市の南方なる花園椰樹の間を縫ふて市街に入つた。此時市民は熱心に渠を迎へ各〻競ふて其家に宿らんことを乞ひ、渠の爲めに物資を供給し武器を充實せんと提言し、預言者を其家に宿すの光榮を博せんが爲めに渠が駱駝の手綱を捉へて之を止めんとする者あるに至つた。依てマホメットは深く彼等の厚意を謝し其歡待を喜ひたるも何人の家にも入らすして駱駝アル、カスワ(Al Caswa)が自ら止まる所を以て居住の地と定むへしとて徐ろに駱駝の行くに任せたるにアル、カスワは市街の大部分を左にして東街に入り數株の椰樹を生したる廣濶の地面を見出して此處に止まつた。依て此地を以てマホメットが居住の地と定めたのである。思ふに這は渠が巧妙なる策畧である、何となれば渠にして若し特に一市民の家を揀ひて之に宿りたらんには彼等は必す嫉妬競爭の結果累を渠に及ぼすべし、故にアル、カスワをして撰擇の任に當らしめ、宛然、神命によりて渠の住所を定めたるか如く表面を裝ふたのである。而して此策畧は渠がカアバの黑石を安置したる時の手段と全く同一筆法である。渠はメッカの酋長等の競爭を平和に解決して黑石を安置するの光榮を自家に收めたるが如く、今やメジイナ人の競諍を平和に解決して自ら神命によりて住處を定めたりとの光榮を博したのである

アル、カスワの留まりたる處に接近してアブ、アユブ(Abu Ayub)なる者の家あり、彼はマホメット主從の駱駝より下るを見て直ちに之を迎へて其家に宿らしめ厚遇歡待到らさるはなかつた。而して渠はメッカより其家族を呼ひ迎へて此處に七ヶ月間滯在して殿堂及ひ私宅の落成を待つたのである。上述の如く偶爾

として預言者の居住すべき地として揀はれたる處は二人の孤兒の所有に屬したるが彼等は殊勝にも無代價にてマホメットに捧呈せんと申出た、然れとも渠は敢て之を受けす、アブ、ベクルをして銀貨十個を彼等に與へしめて土地を購求し、之を以て殿堂の敷地となしたのである。これより回教徒は自宅の建築と殿堂の創建に著手し、マホメット躬ら其手を下して殿堂の土木を助け信徒と共に聖殿建立の聖詩を歌ふて彼等の熱心を奬勵した。かくして七ケ月の後落成したる聖殿は四角形の建物にして地面に近き所は石にて疊み上部は煉瓦にて造り屋根は椰樹の幹を以て支へ、其枝を以て組み其葉を以て補葺したる極めて質素なるものであつた。此殿堂に入るへき門は三個にして、第一は南方にありて公衆の用に供せられ、第二は西方に向て開け、慈悲の門と稱せられ、第三は東方にありてマホメットの專用する所であつた、而して此門の南に當りて殿堂の東壁の一部を形成したる諸室はマホメットの妻妾の私宅にして渠は其中に住居したのである。また殿堂の一部にソファット(Soffat)と名つくる所ありて貧寠にして家なき信徒はこゝに住し、マホメットは彼等に飲食物を配與するを常とし他の富裕なる信者も亦渠の慈善に倣ふて貧民を賑はしたのである



此時に當りてマホメットの信者には二種の別ありて、第一は『亡命者』と稱しメッカより逃亡したる信徒にして彼等は新宗教と預言者の爲めには生命をも犧牲にするの覺悟あるもの、第二は『同盟者』と稱し、メジイナ人にしてアカバの盟約に加はりたる者多く回教と預言者とに對する熱誠に於て『亡命者』に讓る所なきものであつた。而して彼等の總數は百を以て算するに至り、尙ほ日に月に增加しつゝあり。さればマホメットの勢力は隆々として旭日の昇るか如く、潛龍の淵を出て天に上るか如く何人も之を抑壓すべからざるの觀があつた。是を以てアブ、アーミル(Abu Aamir)と稱する宗教家は渠と頡頏する能はす娼嫉に堪へすして二十人の信徒を率ゐてメッカへ移住したのである。かゝれは回教を奉せさるメジイナ人も亦渠に抵抗するものなく渠の勢力は殆んと全市に及ひて今や渠は宛然メジイナの君長たるの觀を呈した。されどメジイナ人中には潛かに渠の聲望を嫉み、また預言者として信認せざる一派ありてクハヅラジ族の酋長アブトアラ、イブン、オベイ(Abdallah ibn Obey)は其巨魁であつた。此外に三個の猶太種族が市外に殖民地を有し獨立して居つたのである。然るに回教は元來猶太教と同一思想の系統に屬するが故に其宗禮儀式も亦猶太人の習慣に倣ふて行はれ、祈禱

の時は必す聖市ジエルサレムの方向に面して禮拜したのである。故にマホメットは猶太人と攻守同盟を訂結して猶太人には其信仰と財産の安全を保證し彼等の甘心を得て之を改宗せしめんとした。然れとも渠の猶太人懷柔策は全々失敗に歸した、何となれば渠が新宗教は單に迷信と妄執とを殲滅せんとするのみにあらす、渠が預言者たり、メシア (Messiah) たるを主張するが故に开は猶太人の透底承認する能はさる所である。猶太人の聖書は明かにメシアの降生を預言すと雖もメシアは必す猶太人中に生れざるべからす、デビッド (David) の遠裔ならさるべからずとは彼等の主張する所てある。さればマホメットの豫想は全く水泡に歸して猶太人は卻て渠が勁敵となり、往々難解なる宗教的疑問を以て渠を苦しむるのみにあらす、渠が預言者の聖權を確立せんとして引用したる舊約聖書は却て彼等によりて反對の證文として用ひられた。されば回教徒と猶太人とは徹頭徹尾調和すべからさる仇讎となり、猶太人はメジイナの不平家と相呼應してマホメットに反對せんとしたのである。故に回教徒は猶太人を目するに盲愚、硬頸、頑强の漢を以てし、古への預言者を殺し、今の預言者に服せさる、極惡人と評したのである



かゝる間に回教の祇園精舍ともいふべきメジイナの殿堂も落成し、教徒の數も增加したれば教會の組織も生して、金曜は其聖日と定められ同日正午の祈禱には必す殿堂に集會して禮拜するの風を生し、マホメットは祈禱後に一場の法話をなして彼等の信仰を深からしむるを常とした。また回教徒の祈禱は一日五回の規定にして、第一回は曉天、第二回は日中、第三回は午後、第四回は夕陽、第五回は初夜である。且つ祈禱に先ちて必す身體を洗ひ淨むるの義務もあつた。然り而して此等の祈禱を行ふに際して信者が向ふべき方向をキブラ (Kibla) と名つけ最初はジエルサレムに向つて稽首禮拜したれども、マホメットは猶太人の透底懷柔する能はさるを看破するやキブラを變更してカアバ (Kaaba) の方向とした。這は紀元六百二十三年十一月頃で渠が政策の最も時機に適したものである。抑もマホメットは最後の預言者にして特にアラビヤ人の爲めに上帝の使命を傳ふるものである。カアバはアラビヤ人が神聖中の神聖とする所にしてカアバをキブラとして尊崇するは彼等の中心より希望する所である。之に反してジエルサレムは猶太人の聖殿である猶太人は預言者を殺したる、神の罪人である。彼等は到底回教に入るべき人民でない、然れはジエルサレムをキブラとして彼

等の歡心を求るは最早不可能にして且無用である、況やカアバは預言者たる渠が祖先己來殊特の關係あるをや。次に渠は猶太人の習慣を應用して斷食の規定を設けた。开は六百二十三年の十二月にして毎年一ヶ月間日中は一切の飲食及ひ物質的娯樂を禁して克己敬虔の誠を神に致すのである。されど日沒より日出に到る夜間は快樂に耽るも妨けなく、また旅人と病者とは此嚴制に除外せられた。またキブラの變更後久しからすして祈禱の時間を信者に報知するの制を立てた、开は猶太教の如く喇叭を吹き。又は基督教の如く鐘を鳴らすにあらすして殿堂に接したる大厦の屋上より高聲に叫ふのである。これをアザン(Adzan)と名けてマホメットの忠僕なるビラール(Bilal)の職責となり、彼は毎日五回づゝ下の如く叫ふのである『偉大なる哉主、偉大なる哉主、予は主の外に神なきを證す、予はマホメットが神の預言者なるを證す、來りて祈禱せよ、來りて救濟に入れ、偉大なる哉神、偉大なる哉神、主の外に神なるなし』と。曉天の叫ひには更に『祈禱は睡眠に優れり、祈禱は睡眠に優れり』と附言するを例としたといふ。以上は回教の儀式を構成する要素にして之に大小の巡禮等の儀式を附加して大成を告けたのである



## 第二節　マホメット剣を拔いて起つ。ベドルの戰爭

「盲恐なる不信者、汝等は全能の神を信せす、神の預言者を嘲り、渠を侮辱し、渠を虐待し、渠を暗殺せんと計り、渠をして亡命せしめたり。神隨爭で汝等に及はざらん。神は汝等の爲めに猛火を用意しつゝあり」。これマホメットがコレイッシ人に對して懷ける復讎の念にして神が用意したる猛火は絶えす回教徒の胸中に燃えて何時しか其毒煙を迸出すべき機會を窺ひつゝあつたのである。今や彼等は安全にメジイナに殖民し、一個の教團は組織せられ、預言者の勢力は全市を壓し、渠の爲めに身命を擲たんと誓ふもの日に益〻多きを加へたれば、不信者に對する神罰の實現は遠き來世を待たすして目前に見るを得べき機運となつた。加之、メッカの商業的利益は彼等をして垂涎せしむるに足るものあり、二千頭の駱駝は五萬ディナルの價値ある大行李を運搬して海外に通商すること あり、或は更に二千五百頭の多きに及ふことあり。これ恰も餓ゑたる狼の前に投けられたる鮮肉に異らす、況や天性掠奪と復讎とを大牢の滋味よりも好めるアラビヤ人に於てをや。是に於て紀元六百二十二年の末、マホメットは其叔父

ハムザ(Hamza)を將として三十人の『亡命者』を引率して三百人のコレイッシが警衛したる大隊商を襲撃せんとしたるも其目的を達せず、翌六百二十三年一月オベイダ(Obeida ibn al Harith)を將として第一回に倍する兵力を以てアブ、ソフィアン(Abu Sofian)等二百人のコレイッシが警戒したる隊商を攻撃せんとしたるも兼寡敵せすして是亦失敗に了り、其の後一ヶ月を經てサド(Sad)をして二十人の從者と共に晝潜夜行、突然隊商を襲撃せんとしたるも目的物は既に通過し去りたれば空手にして歸り來つたのである。斯の如き遠征隊の出發に際してはマホメットは白旗を桿頭又は長鎗に結ひて其首領に渡すを常とした。かく三回の失敗を重ねたる渠は紀元六百二十三年六月躬ら小隊を率ゐて隊商を追擊したるも遂に追及する能はして一土族と同盟を結ひて歸り、翌七月には二百人に將として二千五百頭の駱駝を有する大隊商を襲はんとして同しく目的物を逃れしめ、同年十月同しく二百人に將としてアブ、ソフィアンの指揮したる大隊商を脅さんとしたるも好餌は既に通過し去りたれば土族と同盟してメジイナに歸つた。それより同年十一月に至りアブドアラ(Abdallah ibn Jahsh)を首魁とし七人の從者をしてナクラ(Nakhla)に遠征せしめたるに彼等は聖月にも拘はらす血を流して隊商を奪掠し



賍品と捕虜と携へてメジイナに凱旋した

是の如く聖月に血を流して物品を刧奪するが如きは背信悖德の太甚しきものなるにマホメットは天啓と稱して此汚れたる行ひを是認し、回教の爲めに戰ふたる効績を稱讃した。これ渠が部下を激勵する政策に出たのである。遮莫、一たひ流したる血は血を以て洗はざるべからす、一たひ抜いたる劍は必す血を見さるべからす。『汝等に逆ふ者あらば神の道の爲に彼等を討て』。『如何なる所にありても不信者を見出さば之を殺せ』。『戰爭は汝等に命せらる』。『神の宗教の外、宗教なきに至る迄戰ふべし』。一たび抜けるマホメットの劍は再ひ其室に收むべからす、果然、ベドル(Bedr)の戰爭は起つたのである

紀元六百二十三年の秋、アブ、ソフィアン(Abu Sofian)の率ゐたる大隊商はシリヤにて通商し、翌六百二十四年の春、メッカに向つて歸るとの報知はメジイナに達した。マホメットは好機失ふべからすとなし先つ渠が進軍の道途に住する土族と同盟して中立の位置にあらしめ、躬ら三百五名の勇士を引率して紀元六百二十四年一月メジイナを出發したるが、渠は僅かに二頭の軍馬と七十頭の駱駝を有したるのみにして交互に駱駝に騎りて進軍したのである。之に反して

アブ、ソフィアンはマホメット軍進擊の急報を得て大に愕き、一方にはダムダム(Dhamdham)と名くる者を急使としてメッカ人に援軍の派遣を促し、他方には隊商を率ゐて紅海に接近せる路をとり注意に注意を加へてメッカに向ふた。然るにマホメットは毫も此事を知らして三日間進軍の後ベドル(Bedr)の近傍に達し、二人の間諜を出して隊商の消息を偵察せしめた、依て彼等は潛かにベドルに入りたるに一井泉の傍に婦女の水を汲むものありて翌日隊商の來るべきを談話しつゝあつた。彼等は之を耳にするや直ちに還りてマホメットに報告した。然るにアブ、ソフィアンも亦隊商を率ゐてベドルに近つき、隊商に先ちて自らベドルに入り、敵狀を偵察せんか爲めに其酋長に就て質したるに彼は前日二人の旅客ありて井泉の傍に止りて駱駝に飲ふたる外何等の異狀なしといふた。依てアブ、ソフィアンは自ら井邊に來りて仔細に駱駝の臥したる藁を檢し、メジイナの特產なる椰子の核を發見し、之に由りてマホメット軍の近つきたるを悟りたれば、飛ふか如くに隊商の所に還り、路を右方に轉して海岸に接近し晝夜兼行、遂に安全の地に達したのである

これより先きアブ、ソフィアンの急使ダムダムは死力を出して一峯駱駝を驅り



息をもつかず馳せてメッカに來りカアバ聖殿の前なる廣庭にて駱駝より下り、直ちに鞍を逆まにし、己れの襯衣を裂き、駱駝の耳と鼻とを斫りて容易ならざる大事變の起れるを表し、聲を限りに『コレイッシ、コレイッシ、汝の隊商はマホメットの爲に追はる、速に救へ、速に救へ』と叫んだ。是に於て乎、全市は一時に動搖し、甲冑の音、駱駝の蹄、軍馬の嘶、叱咤の聲、囂々たり、譟々たり。劍は飛ひ、鎗は奔り、盾は舞ひ、親は子を助けて武裝せしめ、妻は夫を勵まして馬に跨らしめ、忽ちにして千人に近き軍隊は組織せられた。彼等は時を移さず勇しくもベドルに向て進軍を始めた。然るに半途にしてアブ、ソフィアンの第二の使は來りて隊商は最早安全の地に達したりとの報知を齎した。是を以て彼等は更に進軍を繼續せんか、若しくはメッカに歸らんかを議したるに大將アブ、ヂャル(Abu Jahl)を始め好戰的勇士はいふ、「我等若し此儘にして歸りたらんには世人は我等を以て卑怯とせん、如かずベドルに進軍して、井泉の傍にて宴席を張りて歸らんには、全アラビヤは之を聽かば必ず我等の後へに瞠若たらん」と主張して進軍を續け、之に反對の意見を懷きたる少數の人々のみメッカに還つた。さればマホメットは遠征の目的としたる隊商の行方を失ひ郤て意外なる

大軍の進撃し來るてふ急報に接したのである。依て渠は部下を集めて交戰すべきや否やを問ひたるに、彼等は皆快く一戰せんといひ、且つメジイナ人すら「預言者の行かん所には世界の終端までも行きて戰はん」といふたので軍議は忽ち一決した。マホメットは神を祈りて後、天の冥罰の不信者に下らんことを乞ひ、

『主よ、アブ、ヂャルを追し給ふべからす、彼はメッカ人のファラオ(Pharaoh)王なり。主よ、ザマア(zamaa)を追し給ふべからす、彼が父の眼は彼の死を悲むの涙に痛みて盲目たるに至らしめよ』と咀ふたといふ

それよりマホメットはアリイをして近傍の井泉に近き高地を偵察せしめ三人のメッカ人が水を汲むに逢ふて二人を捕ひ來り、敵狀を尋問して大約九百人より千人の敵あるを知つた、即ち回教軍に比して三倍以上の大敵である。されど回教徒は毫も躊躇せずして進み、最良なる井泉を占領して之に守兵を附し、他の井泉は悉く破壞して敵の用に供せざらしめ、砂岩の高地に陣を布きて敵の來攻を待つたのである

此時コレイッシ軍にオメイル(Oneir)なる者ありて回教軍を審かに偵察し歸りて報告していふ、「回教徒は洵に少數なれとも決死の覺悟は其駱駝にまでも現れたり、彼等は各〻一劍を以て隧家とし、沈默して靜かなること墳墓の如くにして、其口よりは毒蛇の如く惡氣を吐きつゝあり」と。實に三倍の大敵を目前に控へて必死の覺悟をなしたる回教徒はオメイルがいふが如くであつた。是に於てメッカ人は戰爭の無用なるを唱ふるものありたれども、七十歳の老將軍アブ、ヂャル(Adu Jahl)は頑陋鐵石の如くにして、非戰論者を批難するに臆病未練の醜名を以したるが故に各〻こゝに戰意を決して陣列を整ひ中央及ひ左右の兩翼となり、砂岩の丘陵を超えて肅々として進んた。然れとも前夜大雨ありたれば坂路に加ふるに泥濘を以てし向進意の如くならず、且つ彼等は東方に向て熾くか如き日光を前面より受けて一層の困苦を增したのである。マホメットは敵の大軍の現出したるを見て、退いて神を祈り『主よ、願くは汝が援助と勝利を與ふるの約を忘れ給ふ勿れ、我小軍にして敗北せんが、偶像崇拜は盛行して汝の純正なる崇拜は地を掃ふて滅せん』といふた、時にアブ、ベクルは、『神は必す來りて汝を援け勝利の喜ひを以て汝の顏を輝かすべし』といふてマホメットを慰めたといふ。敵は益〻接近した、されど回教軍は靜かなること林の如く、動かさること山の如くである。メッカ軍は長途の進軍に加ふるに日光に向ひたれは疲勞と饑渴と

に苦みたるも一滴の水も得ること能はす、乃ち決死隊を組織して回教軍の井泉を奪はんと企てた。されど彼等は悉く殺されアスワド(Aswad)一人挺身して井邊まで近つきたるもハムザ(Hamza)の爲めに其一脚を切斷せられたれば彼は隻脚にて戰ひつゝ井水を飲み且其脚を以て少しく之を破壞したるも遂にハムザの刀の下に斃れた。かゝる間に一騎打ちの勝負は始まり、メッカ軍よりシエイバ(Sheyba)、オトバ(Otba)、及ひ其子ウァリイド(Walid)の三人、陣頭に進み出て回教軍に向て一騎打ちの勝負を望んだ。此時マホメットは『誰かあるハアシム家のものども、彼等が息(イキ)のねをとめよ』と呼はりたれば、其聲未た畢らさるに回教軍より躍り出たるはオベイダ(Obeida)、ハムザ(Hamza)、アリイ(Aly)の三人であつた。ハムザは其胸に駝鳥の羽をつけ、アリイは胄に雪の如き白羽を翻ひしたるも全身甲冑を以て覆ひたるか故に一見何人なるやを識ること能はす、依てオトバは『汝等はそも何人なるそ』と問へはハムザは破鐘の如き大音聲にて『われこそはアブド、アル、ムッタリブが一子、ハムザなるぞ、神の獅子、預言者の獅子とはわかことなり』と呼はり、又アリイ、オベイダの名をも告けたれば、オトバは『よき敵なり、イザ、進め、我子ウァリイド、未棟の振舞すな、汝の父はこゝにあり、



イザ進め』といへば、ウァリイドは血氣の壯年、眼中何そ敵あらん、武者振勇(イサマ)しく進み來れば、之に向ひたるアリイも亦豪膽を以て聞えたる勇士とて忽ち龍虎の爭ひとなり二三合激戰の後、ヤ聲もろとも斫りおろしたるアリイが陣刀を受け損したるウァリイドは重傷に堪へす大地に倒れて絶息した。現在我子の無念なる最後を目前に見たるオトバは乳虎の其兒を失へるか如く血眼(チマナコ)になりて躍り出れば、ハムザは之に應戰して一擊二擊、閃電飛ひ、迅雷震ふの一刹那、回教の獅子はメッカの乳虎を打倒した。此時シエイバ進み出たるが之に向へるオベイダは六十五歳の老武者なから意氣は壯年に異らす、互に虚實の妙伎を盡して闘ひたるが、如何にしけんオベイダはシエイバの爲に其脚を傷けられて堂(ドウ)とばかりに地に倒れた。ハムザ、アリイは『もの〳〵しきシエイバ奴(ヤツ)が振舞かな』とて忽ち之を殺したればメッカの勇(ユウ)將は三人共に戰場の土と化した。此の如き雄々しく勇ましき六勇將の振舞にメッカ人も回教軍も陶然として酒に醉ひたるか如く彼等の奮闘を見物した。されどメッカ人は今や夢より覺めたる如く無念の叫ひを上け、マホメットは此機を外(ハツ)す全線總進擊を命したれば回教徒は狂熱的剛勇を振ひ起してメッカ軍を四角八面に斫りたて切りたて敵に逼り兩軍入り亂れ

て混戰に陷らんする時マホメットは砂礫を握りて敵陣に投け、『混亂、汝の面を捕へよ』と大喝じた。恰もよし敵の陣列は崩潰し、隊伍を亂して退却し、人馬駱駝互に相蹂躙して武器を棄て糧食を拋ち天幕を捨て逃竄した。かくして回教の勇士は各〻偉勳を奏したるが中にもムアード(Muadh)の如きは一刀の下に敵の老將アブ、ヂャル(Abu Jahl)の隻脚を斬り落して之を倒したるに、傍にありたるアブ、ヂャルの子イクリマ(Ikrima)の爲めに肩口より斫られて殆んと一手を落し、皮膚のみにて垂れさがつた。ムアードは之を以て邪魔なりとや思ひけん足を以垂れたる手を蹈み、メリ〳〵と引き切りて打捨て更に前進して奮戰したといふ。以て如何に回教徒が猛勇を鼓したかを知るであらう。此激戰に於て回教徒の戰死者は僅かに十四人に過ぎさりしがメッカ軍にありては戰死者四十九人、捕虜同數、負傷者に至りては其數を知らず。マホメット軍の捕獲したる戰利品は百十五頭の駱駝、十四頭の軍馬、及ひ武器、衣服、毛氈、革等山の如くにして、其分配に關して議論を生したるも渠は天啓と稱して其五分の一を自ら收め、他は之を均等に分配した。かく五分の一を自ら收むるは渠が永久の法則としてコラーンの第八章に記してある。マホメットは二三の捕虜を殺して所謂神の復讐



を實現したる後他は皆悃切に待遇して改宗せしめ又は贖償を許して局を結んたのである。これ回教史上最も有名なるベドルの戰爭にしてマホメットが始めて將軍としての才能を發揮したる戰ひである

## 第三節　カイヌカア族の追放。オホドの戰爭

回教徒がベドルの大戰勝はメッカ人に對する打擊よりは寧ろメジイナに於けるマホメットの位置を確立するに與つて力があつた、即ち渠は之によりてメジイナの不平家を悉く威壓することを得て預言者の前には何人も反抗の頭を擡くるを許さぬやうになつたのである。されば女詩人アスマ(Asma)は預言者を攻擊し渠を奉戴する信徒を誹謗するの詩を作りたる爲め、マホメットは盲人オメイル(Omeir)を敎唆して深夜に之を慘殺せしめた。斯は渠がベドルより凱旋して後數日の間に起つた悲劇である。これより二三週の後猶太敎徒にしてアブ、アファク(Abu Afak)なる百有餘歲の老詩人も亦アスマと同一の罪によりマホメットの指嗾によりて暗殺せられた。此等の無法にして殘虐なる暗殺はメジイナの不信者をして心膽を寒からしめ、猶太殖民地にも亦一大恐慌を惹起した。渠は今や

回教を擴張するに口舌を以てするの迂路をとらずして兵杖の威力に訴ふるの直截手段をとりて猶太人カイヌカア(Cainucaa)族に向て渠が預言者なるを承認せんことを要求した。然るに彼等は斷然之を峻拒したれば征服の機會を窺ひつゝありたるに適、カイヌカア族の鐵器市場に於て回教の一少女に戲れたる猶太の青年は殺され其復讐として一人の回教徒は殺害せられた。此出來事を耳にしたる渠は忽ちベドルの野に飜したる大白旗を揚け迅雷の耳を掩ふに遑あらざるか如く疾かに兵を率ゐて猶太殖民地を包圍した。カイヌカア族は十五日間防戰したるも其甲斐なく無條件にて降伏をなし、一族悉く捕虜となりたるにマホメットは冷酷にも彼等を慶殺せんとした。然れともメジイナの會長アブトアラ(Abdallah ibn Obey)の强請によりて死刑を宥恕し、遠くシリヤに追放し、其資財武具等は悉く占領して其五分の一を自ら收め殘餘を兵士に分配した。これ紀元六百二十四年二月の出來事である

ベドルの戰爭に大敗したるメッカ人は回教徒より受たる怨恨の瘡傷容易に癒ゆべくもあらす、乃ちアブ、ソフィアンの統督の下に二百の騎兵を率ゐて潛かにメジイナの郊外に來り、農家を燒き農民を殺し田園を破壞して退去したるは同



年四月のことである。また同年五月メッカ人の同盟者にしてネジト(Nejd)の平原に住するスレイム(Suleim)族、及ひガタファン(Chatafan)族は聯合してメジイナに來襲すると聞きてマホメットは躬ら二百人に將として彼等の機先を制せんか爲めに其集合地點に達したるも一兵をも發見せず單に五百頭の駱駝と一童子とを捕獲して還り、翌月再ひ四百五十人を率ゐてガタファン族の進襲を邀擊せんとしたるに敵は風を望んで散亂し同八月三百人に將としてスレイム族に對して示威的遠征をしたのである

かくてメッカの隊商はマホメットの爲めた脅かされてシリヤとの通商全く杜絶したれば彼等は中央の砂漠を横斷して東の方イラク(Irac)に向て大隊商を送らんとした。マホメットは之を聞いてゼイド(Zeid)を將とし百騎の兵を以て之を襲擊し、絹布等の貴重品の外に銀貨十萬個を掠奪し、自ら五分の一をとり兵士一人各、八百個を配布した。これ紀元六百二十四年九月のことである。また同年六月猶太詩人カブ(Kab)なるもの韻語を以てメッカ人を慫慂し以て預言者に反對せしめたりとて、其義弟をして彼を欺かしめ言ふに忍ひざる卑劣の方法によりて之を暗殺し、且其翌朝には一般の猶太人を暗殺するを認許したればムヘイアサ

(Muheiassy)なるものは一猶太商人を暗殺した。是に於てムヘイアサの兄は其不法を詰責したるに彼は『阿兄よ、マホメットが汝を殺すべしと命せは吾亦之をなさん』と絶叫した。ムヘイアサの兄は此狂熱的信仰に打たれて忽ち改宗したりといふ。またマホメットの養子アリイ(Aly)は今や二十四歳の壯年となり渠の末女にして芳紀十七なるファチマ(Fatima)と結婚したるか、彼は剛健なる體軀を有し武勇絶倫、加ふるに信義、明智、温情に富み、マホメットの股肱腹心となりて後年回教大帝國の一半を領有したる人物である

紀元六百二十五年一月、ベドルの屈辱を忘れと欲して忘る能はさるメッカ人は遂に復讎の血に渴せる三千の勇士を募り、七百人は甲冑を裝ひ、二百人は駿馬に跨り、餘は皆駱駝に騎らしめ、且つ勇猛なる女丈夫十五人を加へて堂々として出發し、復讎の軍歌を歌ひつゝ勇ましく十日間の行軍をなしてメジイナより殆んと五哩なるオホド(Ohod)山下の平野に侵入し、敵軍を誘出せん爲め近傍の田園果穀を蹂躙した。之より先き、マホメットは伯父アッバス(Abbas)より急報を得て絶えす間諜をして敵狀を偵察しめつゝありたるが愈〻敵の大軍が接近し來りたるを見て、重もなるメジイナ人を殿堂に集めて軍略を議した。時に酋長ア



ブドアラ(Abdallah ibn Obey)とマホメットとは市外の人民を悉く城壁中に退かしめ持久の策を講して敵をして戰はすして勞れしめんと提議したれども血氣に充ちたる猪勇の輩は爭で之に耳を欹くべき、速かに敵を邀擊するに如かすしと主張し、マホメットも之に同じて自ら一千人に將としてオホド山下の平原に進出したるは六百二十五年一月十一日の土曜であつた。時に晨朝の祈禱を爲すべき時間なりしが故にビラール(Bilal)は總軍に向て祈禱を促かし、敵軍の面前に於て一齊に稽首禮拜した。然るに酋長アブドアラは固よりマホメットに快らす、俄然三百の兵を引いて回教軍と分離してメジイナに退却し、殘るは僅かに七百の少勢にて四倍以上の强敵に向つたのである。マホメットは前面の高地に陣しオホトの險嶮を以て後方を塞き、左方の間隙には敵騎の進擊を防く爲め、回教軍中、弓兵の花と呼はれたる士卒を以てし、彼等に命して如何なることありとも寸歩も動くなからしめ、以て敵の進擊を待つたのである。此時敵の總司令はアブ、ソフィアン。右翼の大將はクハリド(Khalid)左翼の大將はイクリマ(Ikrima)即ちアブ、ヂャルの子にして三軍齊しく進み、兩陣相對して雙龍の珠を爭ふか如くであつた。間もなく一騎打の勝負は始まり、第一にコレイッシの旗手タル

ハ(Talha)はアリイの大刀の下に斃れ、『大なる哉、神』の勝鬨は回教軍より起りてオホドの險崖に反響した、之を見たるタルハが弟オトマン(Othman)は飛鳥の如く躍り出て血に染める軍旗をとり、更に戰を挑めばハムザは之れ應して獅子の羊を搏つが如くに斬り殺した。然るに尙もタルハの兄弟二人三子相續て軍旗をとりたるも一々回教徒の爲めに無念の最後を遂けたのである。これより全線の戰鬪となり、少數なる回教軍の狂勇猛烈、譬へんにものなく、アブ、ドッヂヤナ(Abu Dujana)は兜の頂上に紅ゐの布を飜へしつつ敵を斬ると數を知らず、バハザは駝鳥の羽を胸間に飾りて到る處死骸の山を築き、アリイは白羽長く頭上より飜り、ゾベイル(Zobeir)は黃色の頭巾を戴き何れも一騎當千の働きをなしたのである。此時敵の右翼の大將クハリドは騎兵を以て回教軍の左背を衝かんとしたるも豫て備へたる弓兵の爲めに射たてられて目的を果さず。メッカ軍は遂に陣列を紊して退却に移りたるに、愚かなる哉、回教徒は勝敗未た全く定らざるに早くも戰利品の押收を始めたのである之を見たる弓兵の一隊は垂涎三尺、マホメットの嚴命をも打忘れて掠奪に赴いた。かくして回教軍の後方に缺陷あるを認めたるクハリドは騎兵を以て驀然回教軍の左側背に出てメッカの前軍と力を



合せて前後より挾擊したれば回教軍は大敗北となり、旗手ムサアブ(Musab)先つ斃れ、ハムザは投鎗に傷いて死し、マホメットも面部に負傷して地に倒れたれは「預言者死せり」てふ叫びはメッカ軍に起つたのである。されど渠は單に氣絕したるのみにて從者に助けられてオホド山の洞窟に退き生き殘れる回教徒は皆山谷の間に隱れたのである。メッカ人はマホメットの死骸を得んとして鮮血滾々たる戰場を搜索しにるも見出す能はず、依てアブ、ソフィアンはオホド山の麓に來りて『マホメット。オマル。アブ、ベクル』と其名を呼びたるも何人も答ふるものなければ、『彼等は皆死せり』と叫びたるに『汝、妄言する勿れ、彼等は皆生けり』とオマルは山上より叫んだ。是に於てアブ、ソフィアンは向後一年の後、再ひベドルに會戰せんと約してメッカに凱旋した。此戰に於てマホメットは七十四人の勇士を失ひ、敗殘の傷兵を率ゐてメジイナに歸りたるに、夫を喪へる妻の哀哭、其子を殺されたる母の悲泣、其父を失ひたる孤兒の叫ひ、通宵絕えず、寔に人をして斷腸の思ひあらしめた。されど渠は失心せず、落膽せず、殉教者には天國の光榮を約し生存者には將來の勝利を約して、彼等を慰め、彼等を勵まし、且つ翌朝にはビラールをして全市に布告せしめメッカ軍を追擊する爲め

兵を集めてサフラ(Safra)に到り此處に三日間滯陣して近傍の高地に五百の篝火を燃しメッカ人をして其兵の大なるを思はしめてメジイナに歸つた。これ一は敗殘の兵をして意氣を恢復せしめ、一はメジイナの不信者を威壓し、一はメッカ人に武威を示すべき政策に出たのである

オホドの戰爭後、渠は二人の捕虜を殺し、またハリス(Harith)なるものオホドの戰爭中其混雜に乘じて其父の仇なる回教徒を殺害したりとて嚴格に死刑を宣告し、戰死者の家族を憐みて男子の相續者なきものは其妻と娘にて父の遺產を相續し其少分を死者の兄弟に與ふる法律を制定したのである

## 第四節　メジイナの包圍。コレイツァの鏖殺

オホドの敗北はマホメットに對する土族の反抗を奬勵したるにや、八方より回教軍に敵對する運動は起つた。即ち紀元六百二十五年四月にはネジド(Nejd)なるアサド(Asad)族の蜂起するありて、渠はアブ、サルマ(Abu Salma)をして百五十人に將として之を潰散せしめたるも、同月再びメッカに近きラアヤン(Lahyan)族の蜂起するありて、渠は刺客を派遣して其酋長を暗殺して無事なるを得た。然



るに翌五月に至りて六人の回教徒は同地に於てラアヤン人に要擊せられ三人は立ろに殺され、他の三人は擒となり一人は殺され二人はメッカに賣られて虐殺せられた。同月またネジドの一酋長に欺かれて四十人の回教徒はアーミル(Aamir)族長に改宗を慫慂せん爲め預言者の書柬を携へ行き、二人を除くの外悉く虐殺せられた。此アーミル族と同盟したる猶太人にしてナディール族(Nadhir)なるものはメジイナより四五哩の地に殖民しつゝあつた。然るにマホメットは彼等の酋長が己れを暗殺せんと計りたりと稱して彼等の追放を宣言した。されど彼等は之に服すべくもあらず、アブドアラ(Abdallah ibn Obey)の和解も其効なくして、猶太人は愈〻戰爭せんと決したればマホメットは直ちに之を包圍し、三週間にして降伏せしめ、悉くシリヤに追放した。以上の如くにしてメジイナに近き猶太人の殖民地は三ヶ所の中、二個は全く滅ひて單に一個となつたのである。かく猶太人と仇讎となりたる渠は以前の如く猶太人を己れの書記官として用ふるの不利を悟りて、メジイナの青年なるゼイド(タアビトの子)(Zeid the son of Thabit)をしてヒブリユウ語、シリヤ語を學ばしめ、之を書記官に任じて一切の重要なる書類を認めしめた。此ゼイドが後年に至りて回教の聖書コラーンを編輯

したのである

此時に方りてメッカ人と回教徒とが再びベドルにて會戰せんと約したる期日は來りたるも、旱魃太甚しく物資に缺乏したればメッカ人は會戰を延期せんと欲し、遊牧民に賄賂を贈りて之をしてメジイナに赴しめ、メッカの軍勢を誇張して針小棒大の流言を放たしめ、以てオホドの瘡痍未だ癒えざる回教徒を脅して其出陣を躊躇せしめんと試た。然れともマホメットはメッカ人の策略を看破したる者の如く、千五百人に將として器具商品の大行李を山の如く運搬してベドルに出張し、八日間陣營を張りつゝ一方にはメッカ人に挑戰的態度を示し、一方には貿易をなして利益を獲てメジイナに歸つた。メッカ人は之を聞て切齒憤懣に堪へす再ひ大軍を以てメジイナに進擊せんと企てたるも其計劃の實行には多くの日子を要したのである。然る間にマホメットは諸處に小遠征を試みて軍隊を訓練すると同時に武威を四方に輝かした。即ち紀元六百廿六年の五月渠は自ら四百人を率ゐてガタファン(Ghatafan)族の反抗を鎮壓し其住宅を襲ふて婦女を捕獲し十五日を費して凱旋した。此遠征中敵の要擊に備ふる爲め戰時の祈禱には一部の兵をして常に警衛せしむるの制を立たのである。これより回教は愈



〻益〻武裝的宗教となりて宗教の義務は交戰の義務となり、預言者の命令は將軍の命令と殆んと同一となつた。されば、當時の天啓は勝利を宣言し、成効を約し、武勇を稱し、偉勳を贊し、怯懦を咎め、失敗を辯護し軍事上及ひ政治上の行動を指揮する命令を以て充され、宛然十字軍の司令官が發したる命令の如くであつた。これコラーンの第四章等に見る所の文字である。同年七月渠は再ひ千人を率ゐてシリヤの境なるドツマ (Dumah) の方向に遠征してメジイナを脅さんとしたる暴民を威壓し歸途フェザアラ(Fezara)族長と同盟して凱旋した。次に同年十二月に至りメッカ人の同盟者なるムスタリク (Mustalik) 族が峰起してメッカに援軍を送ると聞て渠は其計劃を挫折せん爲め自ら將とし大膽なる遠征を試みた。而して此遠征には酋長アブドアラ(Abdallah ibn Obey)の如き僞善的の市民も加はり、八日間にしてメッカの近傍に達し、直ちにムスタリク族を襲ふて悉く捕虜となし二百個の家族、二千頭の駱駝、五千頭の羊及ひ一切の家具に至るまて悉く占領した。斯くして回教軍が露營しつゝある間に一の騷擾を惹起した。

开はオマル(Omar)の僕なる[亡命者]が激論の末、一メジイナ人を毆打したるにメジイナ人は其復讐をなさんとし、[亡命者]の朋友は之に反對して互に暴言を交換し、

白刃を揮ふて將に相鬪はんとし、酋長アブドアラの如きも固よりマホメットに心服するものにあらざれば大いに不平を漏し、危機一髪の際、渠は迅速に露營を撤して行軍に移らしめ晝夜兼行、長途の里程を進繞したれは、紛諍は何時しか疲勞と行軍の勤務に沒却せられて無事に凱旋するを得たのである

かゝる間に紀元六百二十七年の二月は來りてメッカ人は捲土重來熾んに軍備を充實し四千人の精兵を以てメジイナを衝かんすれば回教徒に恨みを含める猶太人等は土族を煽動してメッカ人に應援せしめ、アシジャ(Aahja)族とムルラ(Murra)族とは各、四百の猛卒を以て之に參加し、フェザラ(Fezara)族は一千頭の駱駝に騎れる大軍を以て之を援け、スレイム(Suleim)族は七百人の勇士を出し、サド(Sad)、アサド(Asad)の二族も亦兵を出して之に加はり合計一萬の同盟軍を編成して三軍となし、アブ、ソフィアンを總司令としてメジイナに向て進發した。マホメットは此警報に接して防禦の方法を議したるに、ペルシヤ人サルマアン(Salman)なる者ありて軍略に老巧なれば彼の助言によりて塹壕を以て敵を防止するの策を定めた。塹壕は當時アラビヤ人の未た知らさる奇策であつた。是に於て回教徒は勿論メジイナ人は皆手に鶴鋤をとり、ショベルを携へ、舁器を肩にして深壕



を堀り堤塘を築き、マホメットも躬ら土を運ひつゝ衆と共に勞働し、彼等の歌に和して歌ふたのである。かくして六日間にして土工は竣り、壕中には大小の石を積聚して敵に投下するに便にした。此等の防禦工事が辛うして竣効したる時メッカ軍は最早オホドの山下まで進んた。これ同年三月のことである。仍てメジイナ軍は塹壕と城壁の間に三千人を以て陣したるにメッカ軍は塹壕の新たに成れるを見て眼を驚かし、遠距離より飛蝨の如く雲霞の如く箭を放ちたるも何等の成効もなかつた。是を以てアブ、ソフィアンはコレイツァ(Koreitza)なる猶太人の殖民地に人を派して一方にて同盟軍の强大なるを語り、他方にはマホメットの猶太人に對する深怨を告けて其酋長カブ(Kab)をしてメッカ軍に加擔せしめた。マホメットは之を聞いて二人のメジイナ人をコレイツァに遣はして事實の確否を檢問せしめたるに。猶太人は『マホメットとは何人ぞ、我等に服從せよてふ預言者とは何人ぞや』と傲語して全々回教徒と分離するの態度を示した。されば此時マホメットの苦辛は非常にして渠は此のコレイツァの猶太殖民地に面せる市街を警戒すると同時にメジイナの不平家の内部に蜂起するをも禦くの必要を生し、ゼイドと一市民とを將として晝夜となく交代に市中を巡邏して警戒せ

しめたれば、さらぬだに寡兵なる回教軍は塹壕の防禦に缺陷を生したのである。同盟軍は早くも此缺陷を發見して此所に向て大攻擊を加へ、イクリマ(Ikrima)等數騎のメッカ人は猛勇を鼓して塹壕に突入し、進んで回教軍の前に現はれた。

此時アリイは迅速に運動して一隊を以て彼等の退路を遮りたるに、イクリマの隊中にアムル(Amr)なる老酋長ありて一騎打ちの勝負を望み、アリイの爲めに殺され、他は皆馬に鞭ちて再ひ塹壕を超えて逃走した。かく一回塹壕を超えたる同盟軍は防禦軍の弱點を知りたれば翌日よりは或は全線攻擊をなし、或は數個處に軍隊を集中して突擊し、或は飛箭の援護の下に守兵の寡少なる點を劇烈に攻擊して强襲によりて塹壕を蹈破せんと企て、クハリイド(Khalid)の如きは騎兵隊を指揮して晝夜を分たず、機を見て塹壕を突破せんとしたれども、守兵は間斷なく奮戰を繼續し、弓兵隊の一齊射擊によりて屢〻敵を擊退し得たのである。

かゝれば守兵は終日間斷なき激戰にて五回の祈禱は一回も行ふ能はず、夜に入て敵の退くを待て祈禱するの止むを得さるに至た。さればマホメットは猶太人とメジイナの不平家に後方を脅かされ、前面には同盟軍の大敵を控へ、忠實なる兵士は晝夜の激戰に疲勞し、落膽して頗る窮境に陷つたのである。是に於て



渠は一策を案出し、同盟軍中の一酋長ヌエイム(Nueim)なるものを買收して之に告ていふ『汝、試みに此同盟を破壞し見よ、戰爭は畢竟詐術の遊戲なり』と。仍てヌエイムはコレイツァの猶太人殖民地に行き彼等が同盟軍を援くる爲め人質(ヒトシチ)を要求せしめ、次に同盟軍に說いて猶太人が人質を殺してマホメットに應せんとする意あるを告け、巧みに離間して相疑はしめたれば、同盟軍は危懼の念を懷きて總攻擊をなす能はず、且つ糧食缺乏して駱駝、馬匹の斃るゝもの多く、加ふるに暴風大雨一時に來りて天幕を飛ばし、炊器を失ひ、衣服を濕ほし、寒威は暗夜と共に彼等を圍みて如何ともすべからす。遂に同盟軍は陣營を撤して離散したのである、マホメットは同盟軍の解散を聞いて大いに喜ひ、風雨を以て神の援軍なりと公言したといふ

マホメットは同盟軍の退却を見て之を追擊せす、直ちに全軍を殿堂に集め、アリイをして軍旗を掲けしめ、自ら三千人に將としてコレイツァの猶太殖民地を包圍したるに彼等は突然の敵襲に防禦の手段なく、條件を定めて降伏せんとしたるも渠は斷乎として之を斥け、十五日間にして之を陷落せしめた。依て猶太人は彼等に對する處分をアウス(Aus)族の裁斷に一任すろの條件にて降伏したる

に渠は同族なるサアド(Sad ibn Muadh)を裁判官に指定した。時にサアドは重傷を蒙りて病床にありしが同胞の切なる哀願に耳をも假ずして捕虜の面前に現れ驚鳥の群雀を睥睨するが如く、恐怖と落膽に打たれて面色土の如くなる二千の捕虜を眼下に見て『男子は死刑に處し、婦女小兒は奴隷とし、戰利品は回教軍に沒收す』と宣告した。マホメツトは之を以て神の判決なりとして之を實行し、直ちに預言者の面前に於て七百人の男子を屠り、餘の婦女幼兒は奴隷として賣却し、戰利品を押收して將士に分ち、一少美女リハアナ(Rihana)は己れが妾としたのである。這は紀元六百二十七年三月に起つた出來事である

## 第五節　羅馬との交通。海外の傳道

マホメツトは上述の如くにして猶太人の三殖民地を全滅せしめたれはメジイナ附近にては最早渠に反抗するものなく、渠に敵する者は其災ひ九族に及ふが故にマホメツトなる名は遠近の土族の間に一種の恐怖を惹起すに至つた。されはメジイナに於ける渠の位置は預言者幷に君長として極めて安固となり、これより、外征に力を用ふることを得たのである。即ち紀元六百二十七年六月自ら二



百二十人を率ゐてコレイッシの同盟者ラアヤン(Lahyan)族を征し、敵を欺かんが爲めに先つ路をシリヤの方向にとり、それより進路を變してメッカの近傍に至りたるも、敵は既に山中に退き去りたればメッカに對する示威運動をなしたる後空手にして歸つた。また同年八月マホメット、イブン、マスラマ(Mohammed ibn Maslama)なる者を遣はしてメジイナの駱駝群を警護する任を帶ひ十人の從者と共にヂジト方面に至らしめたるにヅル、カッサ(Dzl Cassa)にて土族の爲めに襲はれ、從者は皆殺されマホメット一人半死半生にて逃れ歸つた。また同年九月アル、イス(Al Is)地方にてメッカの隊商を襲ふたる回教徒は掠奪物の外にマホメットの義子アブル、アース(Abul Aas)を捕ひ來つた。アブル、アースはマホメットの娘、ザイナブの夫にして回教を奉せされども夫婦の關係膠漆も曾ならすして回教徒がメジイナに移住して後もザイナブはメッカに止りて夫婦同棲したのである。然るに不幸にしてベドルの戰爭にアブル、アースは擒囚せられ、ザイナブは其良人を贖ふ爲め夫婦が結婚の時、實母クハデイジヤより與へられたる頸飾まで提出した。マホメットは亡妻の紀念物なる頸飾を見て大いに心を動かし、ザイナブを送り還すべき約を結ひてアブル、アースを解放した。其後

ザイナブは幾多の辛苦を經て父の許に還りたるが、良人の再ひ虜にせられたるを見て挺身其生命を乞ひ、アースも亦其妻が親情に感して改宗し再ひ夫妻同棲の幸福を得たのである

此時に當りてマホメットは羅馬帝國と交通を開かんとてディヤ(Dihya)なる者を使節としてシリヤに送りたるに其歸途彼はジュザム(Judzam)族の爲めに其所有物を强奪せられたれども幸にしてマホメットの同盟者ありて悉く物品をディヤに還附して無事なるを得た。マホメットは此報に接するやゼイドを將として五百人の勇士を派遣し、ジュザム族を襲ふて百人の婦女幼兒を奪ひ他の家畜と共に戰利品としてメジイナに歸つたのである。然れとも同族はマホメットに服從して回教を奉したれば、掠奪物は悉く還附して局を結んた。幷は紀元六百二十七年十月のことである。翌十一月アブド、アル、ラマアン(Abd al Rahman)は七百人を以てドゥマア(Dumah)の基督教徒を征し、土族を脅かして回教を奉せしめんとしたるに一酋長は其從者と共に改宗し、他族は附庸たらんこと乞ひたれはこれを許して歸つた。また十二月セイドはシリヤに通商の途次フェザラ(Fezara)族に掠奪せられたるを怒りて、兵を以て盜賊の女魁オム、キルファ(Omm Kirfa)



を捕へ、殘忍にも四頭の駱駝に彼女の四肢を縛して捆裂して之を殺した。然るにマホメットは此蠻行に對して何等の非難をもしなかつたのである。又同月マホメットに追放せられたる猶太人にしてクハイバル(Kheibar)に殖民したる者は尙ほ反抗の氣勢を示すを以て其酋長アブル、ハケイク(Abul Huckeik)を暗殺せしめ、且つ其繼嗣オセイル(Oseir)幷に其從者三十人を欺きて之をメジイナに導き途中にて一人を除くの外悉く虐殺した。此等の暗殺はマホメットが自ら刺客に依頼し且つ其成効を賞して神の勝利として感謝した所である。また當時渠はアムル(Amr ibn Omeyya)に命してメッカの酋長アブ、ソフィアンを暗殺せしめんとし、アムルはメッカに行きてカアバ聖殿の近傍に潛伏して機會を待ちつゝありたるもコレイッシに發見せられて逃亡し、途中コレイッシ三人を殺し一人は捕へてメジイナに歸つた。また同年マホメットはメッカとメジイナの中間に住する遊牧民を悉く歸伏せしめ、チジトのアブス(Abs)族の十人をも回教に入らしめた。此十人はメジイナに移住して後年有名なる軍人となつたのである

かくしてマホメットとメッカ人との反目は回教徒のカアバ禮拜を許ざること六年の久しきに亘りたれば、祖先以來彼等が宗教的並に社會的義務として缺くべ

からざる要件を充す能はず、頻りに故郷なる聖地の巡拜を憧憬して止まず、殊にマホメットはジエルサレムの崇拜を棄てカアバを以て崇拜の中心點としたればカアバ參拜の必要を痛切に感じたのである。依て渠は一夜夢にメッカに詣りて安全にカアバに參拜したりと稱して之を信徒に告げたるに、彼等は皆大旱の雲霓を望むが如く、渠の夢想を現實にせんと希望したのである。是に於て「亡命者」及ひメジイナの信徒を合して一千五百人の一隊を組織し、各〻巡禮者の服裝をなし、マホメットはアルカスワ(Al Cáswa)なる駱駝に騎りてメッカに出發した。彼等は七十頭の駱駝を犧牲とするの準備をなし、各〻一刀を帶し弓矢を持して聖地に近づきたるにメッカ人は之を聞いて警戒を嚴にし、猛將クハリド(Khalid)幷にイクリマ(Ikrima)を將とし精兵を以てメジイナの路を塞き、豹皮の鎧を著けて以て最後の決心を表しつゝ將に回教徒の先鋒と衝突せんとした。依てマホメットは道を右方に轉し、山坂險路を辿りて聖域に近きホデイビヤ(Hodeibia)の平地に至りたるに渠の駱駝アルカスワは盤石の如く兀立して寸歩も動かされば、渠は之を以て神力の然らしむる所となし、一時此處に休憩した。これよりメッカ人とマホメットの間に使節の往復ありて渠は熱心にカアバ參拜の外他意なき



を辯したれともメッカ人は之を信せすして絶對的に之を拒み、翌年を以て之を許すべしと提言し、數回の交渉を經て遂に平和條約を訂結した。即ち第一に十年間休戰の事、第二に種族と個人とを問はす隨意に兩派に連合するを許す事、第三に保護者の許諾を得すして回教に入りたる少年は送還する事、第四に回教徒にしてメッカに還りたる者は送還せさると、第五に回教徒は翌年に至りて三日間、武裝を解きてカアバ巡拜をなすを許すことを契約したのである。當該條約の本文はアリイによりて認められ、マホメットは先つ『最も仁惠にして慈悲ある神の名にて』と記さしめんとしたるにコレイッシ人は之に抗議して但に『神の名にて』と改めしめ、また署名にも『神の預言者たるマホメット』と記すを拒みて但に『アブドアラの子マホメット』と改めしめ、本條約書はマホメット之を保管し、寫書をメッカ人に與へたのである。かくて十數日間ホデイビヤに滯在の後條約成立して回教徒は無事メジイナに歸つた。これ紀元六百二十八年二月のことである。

ホデイビヤの條約はマホメットがコラーンの第四十八章に於て『明白なる勝利』と宣言せる所にして、此によりて渠はメッカ人と對等の主權者なるを承認せられ、

また各種族と個人とは隨意に回教に入るを許されたれば其影響は直ちに現はれて、クゥザア (Khozaa) 族の如きは率先してマホメットと同盟しメッカの青年は其保護者の承諾なくして逃亡し來るものあり。されどマホメットは條約の明文ありて彼等を收容する能はざるが故に彼等を敎唆してメッカの隊商を脅さしめた。然るに彼等の數は次第に增加して七十人の多きに及ひ其勢、猖獗なればメッカ人も止むを得すしてマホメットに乞ふて彼等を改宗せしめたのである

マホメットはアラビヤ全半島には回敎の外如何なる宗敎も其存在を許さざるを理想とし、猶太基督二敎は例外として寛大に之を待遇し其信徒より貢物を徵するを例としたるも、今や渠はアラビヤの小天地を以て滿足せす、遠く海外に向て回敎を擴張し、外國の君主をして渠が預言者たるを承認せしめんとの大望を起したのである。依て渠は新たに銀印を鑄造し之に『神の預言者マホメット』と刻して、ローマ (Rome)、ペルシャ (Persia)、アビシニヤ (Abyssinia)、シリヤ (Syria)、イジプト (Egypt)、ヤマーマ (Yamama) の各君主に使節を遣はし、渠の使命を承認すべしと要求するの手束を送つた。時は紀元六百二十八年の二月より三月に亘るの項にして羅馬皇帝ヘラクリウス (Heraclius) はペルシャ人と戰ふて大に之を亂り、



武勳赫々として城下の盟を爲し盛名を博したる時であつた。此時皇帝はボストラ (Bostra) の知事より傳達したる奇異なる書束を接手したのである。皇帝は開いて之を見れば、神の預言者マホメットよりヘラクリウスに宛てたるものにして『エス及び其母の墮落せる崇拜を止めて一神の正敎を信せよ』といふのであつた。皇帝は之を以て齒牙に介せず、單に一個の宗敎狂者の所爲として何等の答書も與へなかつた。次にマホメットの發したる同樣の書束はグハスサン (Ghassan) の君主ハアリス第七世 (Harith VII) に宛て送られ、これ亦羅馬皇帝に傳達された。されど皇帝はハアリスをして何等の回答をも爲さしめずして了つたのである。またペルシャ帝シロース (Siroes) はマホメットの書束を見て大いに怒り、之を寸斷して棄却せしめた。之を聞きたるマホメットは『主よ、彼の王國も亦此の如く裂き給へ』と祈りたといふ。是より先きシロースの先帝なるチョスロース (Chosroes) は回敎の勃興を傳聞してエメン (Yemen) の知事なるバザン (Badzan) に事實の詳細を報告せんことを命じた。依てバザンは使節數人に書束を附してメジイナに送りたれとも使節の來りし時はチョスロース弑逆の報知は既にメジイナに達したればマホメットは使節に之を告け且つバザンの改宗を促し、バザンは喜んで回敎に

歸入したといふ。次にマホメットの使節はイジプトに行き羅馬の知事たるムコウカス(Muckoukas)の爲めに優遇せられたるも彼は預言者の要求に應せず、使者に托して二人の女奴と一頭の騾を贈つた。マホメットは騾を以て己れの乘用に供し、女奴メリイ(Mary)は妻とし、其妹シリン(Shirin)は詩人ハスサン(Hassan)に與へたのである。次にアビシニヤ王ヂガス(Negus)に對しては渠は二個の手束を送り、一方に於て改宗を勸誘し、他方に於てはメッカより逃亡したる回教徒をメジイナに送らんとを乞ふた。ヂガスは喜んで回教を奉する旨を答へ、且つ二隻の船を以て五六十人の回教徒を護送せしめ、同年八月に至りて安全にメジイナに到着した。次にマホメットが最後の使節はエマーマの基督教酋長なるハウダハ(Haudha)に至りたるに彼はマホメットと共に權力を分配せんと乞ひ渠は之を斥けたのである。さればマホメットの大膽なる企劃は未た實行の運に到らすして他日渠の相續者が鐵血を以て之を遂行するに至つたのである

## 第六節　メッカの征服

マホメットはホデイビヤ條約の歸途、回教徒を奬勵せんが爲めに日ならすして



大勝利を博し、以て山積せる戰利品を與へんと預言し置きたれば此預言を實行せんが爲めに渠は紀元六百二十八年八月一千六百人を率ゐて出發し、シリヤの方向に三日間の迅速なる進軍をなして百哩を跋涉し、クハイバル(Kheibar)の猶太殖民地に達するや、强襲を以て高丘上に並列したる小域砦を陷落せしめ、進んてカムツス(Camuss)の城砦に逼りたるに猶太人は酋長キナアナ(Kinana)を首領としてこゝに最後の決戰をなさんとし、二三回の小攻擊は全く無効に畢り、愈、全軍總攻擊を開始し、一騎打の勝負は始まりてマルハブ(Marhab)なる猶太の猛卒はアリイの爲に腦上より梨割に切られて死し、又其弟はゾベイルに殺されて非業の最後を遂け、それより全軍の攻擊となりたるに、アリイは其盾を失ひて門楯を以て盾に代へ之を縱横に打ち振りて鬪ふた。かゝれば猶太人は遂に九十三人を殺され大敗北の上降伏するの止むを得ざるに至つたのである。而して降伏の條件は一切の財產を沒收せられて他國に移住するにあり、然るに酋長キナアナと其從弟とは財產の一部を隱匿したりとてマホメットは殘酷なる拷問をなし火を以てキナアナの胸上を燬きて絕息せしめたる末其頸を刎ね且つキナアナの新婦にして十七歳の美女なるサフィア(Safia)を納れて妻とした。此時クハイバルの

猶太婦人の中にゼイナブ(Zeinab)なるものあり、彼女は勇士マルハブの妹にて此戰爭中父を殺され、夫を喪ひ、兄弟を害されたれば深くマホメットを憾みて、羊の肉を毒液に浸して調理し以て恭しくマホメットに奉呈した、マホメットは山肉を得て大に喜び、アブ、クベル及び他の朋友等に配與し自ら其一片を口にして其少分を嚥下したるも毒ありと知りて殘餘を口より吐出した。されど中毒の爲め病を惹起し、非常なる苦痛に陷つたのである。此際ビシル(Bishr)なる者は劇毒に中りて立ろに死亡し、ゼイナブは死刑に處せられたのである。かくしてカムッスは陷落したれは他の猶太人殖民地は風を望みて降り同年九月全くメジイナ以北の猶太殖民地は悉く平定して、戰利品は金銀、寶石、椰子、油、蜂蜜、大麥、駱駝、山羊等前古未曾有の多額に達したといふ

また同年秋冬の間にアブ、ベクル、オマアル等を將としてメッカを越えてナジラン(Najran)の方面に出征し、東はヂジド(Nejd)、北はクハイバル等に出征して其勢力を擴張したのである。されどこゝに記すべき重要の結果は生せなかつたのである

然る間にメッカ人と契約したるカアバ參拜の期日は達した。是に於て渠は前年



ホデイビヤに蒐りたる千五百人に更に五百人を加へて殆んど二千人とし各〻巡禮服を着け一刀を帶し、百騎の兵をして先驅たらしめ、外に甲冑武器の行李を別途に運搬して變に備へしめ、犧牲とすべき六十頭の駱駝を準備してメッカに近つき、先つ甲冑武器を市外に置きて二百人の勇士をして之を衛らしめ、周到なる用意の下にメッカに入つた。時は紀元六百二十九年二月のことである。コレイッシ人は回教徒と衝突を避けん爲め悉く市外に退き近傍の丘山に登りて回教徒の擧動を瞰下しつゝあつた。マホメットは「亡命者」及ひ其他の勇士に前後を擁せられてカアバに詣り其杖を以て三度黑石に觸れ、それより全隊にて三回は疾驅し四回は徐走してカアバの七周を完うした。此時マホメットの駱駝を導きたるアブドアラは高聲に挑戰的なる歌を唱へしも、オマアルは之を制し、マホメットの命令にて『主の外に神あるなし、神は彼の人民を庇護して高貴ならしめ給へり。雷神のみありて同盟軍を敗り給へり』と叫ひ二千の衆皆之に和して叫ひたれは其聲山河を動してメッカ人をして顏色を失はしめた。次に彼等は近傍の高地なるサファ、とマルワ(Safa and Marwa)の間を七回往復し、犧牲を殺し、頭髮を剃りて全く巡禮を畢つたのである。翌日渠はカアバの中にて祈禱し、衆を

導いく禮拜を行ふた。かくして三日間の滯在中渠は市民の家に入らすして天幕に住し、市民の渠を訪ふものを厚遇し、親愛と誠實を以て彼等の心を和らけ、メッカ人との調和を計り、二十六歳の寡婦メイムラ(Meimura)を娶り、其結婚の盛式にメッカ人を招かんと提言したるも彼等は之を拒んだのである。されどメイムラとの結婚の爲め其親戚たるクハリド(Khalid)は久からすして改宗した。彼はオホドにて回教軍を破りたる名將にして改宗後にも「神の劍」として驍名を轟かした人物である。それよりクハリドの朋友なる詩人アムル(Amru)及ひカアバの監理者なるオトマシ(Othman son of Talha)も改宗した。アムルは文才縱横にして兼て事理に明かに、曾てメッカ人を代表してアビシニヤに使した有名なる詩人である。かゝればマホメツトのメッカ參拜は著しくメッカ人の勢力を減すると同時に回教に對する敵愾心を冷却し、マホメツトの地位をして益〻高からしめたのである

メッカより歸りて一ケ月の後マホメツトは五十人を遣はしてスレイム(Suleim)族を改宗せしめんとしたるに彼等は飛箭を以て迎へられ大半は殺されたるも、久しからずして同種族は降服し、更に同年六月に至りてメッカへの通路に住する



レイツ(Leith)族を征し、またムルラ(Murra)族を征して捕虜は皆悉く殺さしめた。此の時渠は『若し神が汝の手に彼等を渡さば一人も免れしむる勿れ』てふ嚴命を與へたといふ。翌七月に至りて十五人をシリヤの境なるザア、アトラ(Dzat Atlah)に遣して群民に回教を奉せしめんとしたるに郤て群民の爲めに一人の外悉く殺された。それより同年九月に入りて先きにマホメツトの使節を殺したるミユタ(Muta)の酋長を膺懲せんと欲して三千の兵をゼイド(Zeid)に授け、マホメツト躬らメジイナより少距離なる「訣別山」まで送り來りて其成効を神に祈りて出發せしめた。然るに此事は早くもシリヤの境界なる種族の間に傳はり、羅馬皇帝ヘラクリウス(Heraclius)の兵さへ加はりて回教軍を防止せんと待ち構へつゝあつた。さればゼイドはマアン(Maan)に達したる時敵は羅馬皇帝の旗下に二十萬の大軍を以てマアブ(Maab)に陣するとの風説を聞いた。依てゼイドは進軍を中止して二日間軍議を凝したるも『勝利を得るにあらずんは殉教者の冠を得ん、二者必すや一を得るや必せり』てふ大膽なる議論は勢を得て愈〻進軍となり、死海の南岸に至りたるに計らすも回教軍が未た曾て見たることなき大軍は眼を眩するばかり輝ける甲冑を着けて堂々として進軍し來つた。回教軍は恐慌狼狽してミユタに

退き此處に一地點を揀ひて敵と對陣した。然るに敵は中央に羅馬の方陣大隊を置き兩翼にアラビヤ兵を雲霞の如く集めて進攻し來り三面より回教軍を包圍したればゼイドは有名なる白旗を掲けつゝ陣頭に立て奮戰し、遂に名譽の殉教者として戰死し、次にヂャファル(Jafar)之に代りて指揮をなしたるも、これまた羅馬人に殺され、次にアブドアラ之に代りてこれ亦戰死したれは今や回教軍は全く指揮官を失ひて崩潰せんとしたるに新改宗者なるクハリド(Khalid)は衆に推されて敗兵を收拾し巧みに追擊を免れてメジイナ還つた。かく大敗したる殘兵の還るを見るやメジイナ人は其腑甲斐なきを憤りて之を讒謗し土石を投するもの、さへありたるもマホメットは之を制止し、悃切に彼等を犒ひ、ゼイド、ヂアファル等の死を悲みて其家族を慰めたのである

上記ミユタの大敗は北方種族の反抗に油を注きて彼等は大軍を集めてメジイナを攻擊するとの風説あり、マホメットは之が機先を制せんが爲めに新改宗者アムル(Amru)に三百の兵を授けてシリヤの境に遠征せしめ、更にアブ、オベイダ(Abu Obeida)に二百人を授けて之に應援せしめ、土兵を解散して再ひ回教の勢力を恢復した、これ同年十月のことである。以上の如くにしてシリヤの境界なる



種族を平けて後はアブス族(Abs)、ムルラ族(Murra)、ゾビアン族(Dzobian)、フェザラ族(Fezara)、スレイム(Suleim)族など悉く回教の旗下に降り、四方より使節を派して預言者に臣從を提言するに至り、渠は其使節を悃待して其甘心を買ひたればマホメットは智仁勇を兼備したる預言者として益〻盛名を博したのである。さればマホメットは渠が畢生の大目的の一なるメッカの征服を遂行せんと欲し機會の熟するを待ちつゝあつた。然るに紀元六百二十九年十二月、メッカ人と同盟したるベクル(Bekr)族はコレイッシ人と共に回教徒と同盟したるクゥザアKhozaa)族を脅かして數人を虐殺したるが故にベクル族は四十人を使節としてメジイナに來りて之を訴へた。マホメットは之を以てメッカ人が休戰條約を破棄したるものとし、愈〻メッカ攻擊を決心した。メッカ人は之を聞いてアブ、ソフィアンを使節としてマホメットに會見せしめ條約破棄にあらざるを辯して友誼を繼續せんとしたるも要領を得ずして了つた。されどメッカ人は回教軍の進擊あらんとは夢にも思はなかつたのである。然る間にマホメットは極めて秘密に軍備をなし、紀元六百三十年一月殆んど一萬に近き精兵を引率し、ゾベイル(Zobeir)をして二百人を以て殿軍たらしめ、迅速なる進軍をなしてメッカ附近に

到達した。此時渠の伯父アッバス(Abbas)はメッカより來りて回教軍に投しメッカ人は未たマホメットの大軍が虎口を開いて聖市の上に臨みつゝあるを知らず。アブ、ソフィアンは同夜市外を偵察せんとて諸處を巡回し居たるに何そ計らん一萬以上の篝火は四方の高丘に燃え、炎々天を焦さん計りであつた。此狀態を見て彼は茫然自失し居たるにアバッス來り會してメッカの救ふべからざるを告げ、彼れ若し速かに預言者の憐みを乞はされば一族の大難を惹起さんとて相伴ふてマホメットの陣營に赴いた。マホメットは其夜アブ、ソフィアンの謁見を許さず、翌朝に至りて之を接見し直ちに回教に入るべきを要求したるに、釜中の魚にも齊しき酋長は遂に餘儀なく改宗を宣誓した。是に於てマホメットはアブ、ソフィアンと約してメッカ人の彼が家又はカアバに入りて謹愼を表し、若くは自家の戸を閉ちて出さるものは害を加へすとの條項を定めアブ、ソフィアンをしてメッカ人に布告せしめた。こゝに至りてメッカ人の抵抗は螳螂の龍車に當るに異らず、彼等は皆自家に入りて戸を閉ち、避難して各、生命を全うせんとしたのである。マホメットは全軍を四個に分裂しゾベイル(Zobeir)の率ゐたる一隊は北方よりし、クハリド(Khalid)の率ゐたる一隊は南方よりし、サド(Sad ibn Obada)



の率ゐたる一隊は西方よりし、アブ、オベイダ(Abu Obeida)の率ゐたる一隊はマホメットと共に最近路をとりてメッカに入り、若し四個分隊の一に抵抗する者ある時は他の分隊は直に其後方に出るを得べきやう配置したのである。斯の如く周到なる注意をなしてメッカに入りたれば各隊は安全に市街を占領したるも、只クハリドの一隊が南方に入れる時スヘイル(Suheil)、イクリマ(Ikrima)等を巨魁として少數の市民は抵抗を試みたるも忽ちにクハリドに敗られ、無事に占領を全うした。マホメットは駱駝アルカスワに騎りてカアバに詣り其杖を以て黑石に觸れ七回其周圍を巡りて參拜し、偶像は悉く破毀せしめて一物をも殘さず『眞理は來り、虛僞は去れり』と叫んだといふ。それよりカアバの聖殿を開かしめ、中に入りて禮拜をなし、カアバの鎖鑰を保營するの權利をタルハの子オトマン(Othmen ibn Talha)に與へ、ゼムゼムの神泉の水を巡禮者に與ふるの權を伯父アッバスに與へ、カアバ中の肖像畫像等を皆咸く破毀して一掃し去りたる後、ビラールをしてカアバの屋上より高聲に祈禱の時を報せしめて一齊に祈禱を行ふた。渠は今や胡鄕なる聖市を掌中に握りて喜ひに耐へすやありけん、『汝は予が地球上最も好める所なり、最も樂しき所なり、汝の人民にして予を追放せすんば予

は汝を見捨ざりしなり』と叫んだ、之を聞きたるメジイナ人は渠かメッカに止りて再ひメジイナに還らざらんことを憂ひて暗に不平を漏したるに、渠は『汝等を捨るは神の禁し給ふ所なり、汝等の住する所は予の住する所なり而して予は汝等の中に死せん』と誓ひて彼等を慰めたといふ。それより渠は數人の惡漢を死刑に處し他は悉く自由を許し寛大に待遇したれはメッカ人は悉く回教に歸入し永久に預言者を奉戴して一神を信するやうになつたのである

メッカ占領後二週間、マホメットは一方には市政其他の整理に從事し、一方には分隊を近隣の部落に派遣して其偶像を破壞せしめた。即ちクハリドは一隊を率ゐてナクラ (Nakhla) に至り女神アル、オッザ (Al Ozza) の殿堂を粉碎し、アムルは他隊を率ゐてホゼイル (Hodzeil) 族の信奉するスワ (Suwa) の偶像を毀ち、メジイナ人の一群はマナー (Manat) の肖像を破壞した。またクハリドはナクラより轉してメッカの南方に住せるヂャズイマ (Jadzima) 族に向て降伏を勸告したるに彼等は直ちに服從して改宗した。然るにクハリドは此種族に對して宿怨ありたれば悉く彼等を捕虜として死刑を宣告し、殘忍にも殺害を始めたるに幸にして『亡命者』メジイナ人等ありて之を救ふたのである。クハリドは是の如き殘忍なる猛將



なるか故に後年、『神の劍』なる異名を受け、不信者をして其名を聞くも心膽を寒からしめたのである

マホメットがメッカを征服し其餘勢を以て近隣の種族を併呑するとの噂は八方に聞えて各種族の大なる恐慌を惹起したるが、就中、メッカ東南なる丘壑の間に住したるハワアズィン (Hawazin) と稱する大種族は其支族遠く廣かりてタイフ (Tayif) を中心として高原に居住し、メッカ人と同一の偶像を奉するか故に、マホメットの攻侵を預期して、タイフの東北なるアウタアス(Autas)に大兵を集中した。之を耳にしたるマホメットは最早メッカに淹留する能はす、乃ちメジイナ人ムアード(Muadh)に命してメッカの新改宗者に回教の教理儀式、コラーン等を教授せしめ、市政はアッタアブ (Attab) なるメッカ人に委任して聖市を出發し、一萬の軍勢に加ふるに新たに歸伏したるメッカ人二千人を以てし合計一萬二千の總勢となり、各種族の旌旗を風を飜して海潮の寄するか如くにホチイン(Honein)の附近に到達した。ハワアズィンの酋長マアリク (Malik) は大部隊を率ゐ後部には婦人小兒家畜をも從はしめて兵氣を强烈にし、ホチインの入口を占領して險路に據り山谷の間に伏兵を設けて回教軍の進擊を待つた。回教軍は之を悟

らずして到着の翌日未明より運動を起し、クハリドを先鋒として羊腸たる嶮路を曲折迂回して攀登したるに俄然敵の伏兵に陷り、不意の襲撃に度を失ひたる回教軍は陣列を亂して退却を始め、忽ち狹路を擁塞して混亂名狀すべからず、遂に全軍敗走せんとするを見て、マホメットは『汝等何處にか行く、神の預言者こゝにあり、何ぞ歸らざる、何ぞ歸らざる』と叫ひて逃走するものを防き、アバッスをして大音にメジイナ人を召集せしめ非常なる困難を以て再ひ陣形を整ひ、猛烈に攻撃を開始し、兩軍の戰ひ闌なるに及ひてマホメットは一握の砂礫をとりて之を敵に投し『零落、彼等に及はん、予は彼等の敗北せんことを誓ふ』と叫ひたるに敵は始めて敗退の色を現はした。それより回教軍の攻撃前進は一層猛烈となりて追撃に加ふるに追撃を以てし遂に敵の後部なる婦人少兒にも負傷者を生するに至つた。敵の酋長マアリクは勇敢にも其手兵と共に殿軍となり、回教軍の追撃を防止せんとしたるも婦人小兒等の後續部隊は悉く回教軍の手に落ち、二萬四千頭の駱駝、四萬頭の山羊、四千オンスの銀、六千人の捕虜を殘して敵は潰亂した。而して敵の敗殘兵の大部隊はタイフに入れるを以てマホメットは直ちに之を包圍した。されどタイフの胸壁は堅牢を極め、糧食は充實し、井泉



も亦充分なれば容易に拔くこと能はず、回教軍は城中より發つ飛箭の爲めに多くの戰死者負傷者を出したれば渠は遠く陣營を退け、新たに堅牢なる楯を製し、投石車を用ひて城壁を破壞せんとしたるに城中より赤熱せる鐵丸を投して之を防きたれば目的を達する能はす。かくして半月を費したるも陷落せしむる能はしてタイフの圍みを解き掠奪物の分配に從事した。此時捕虜の中にマホメットを哺育したる乳母の一女ありたれは渠は其縛を解き悃切に待遇して多くの物品を贈り、其一族なるサド種族も改宗をなして自由を得、更に一般のハワアズィンの捕虜にも及ひて悉く解放せられ極めて寛厚なる處分に感して酋長マアリクも回教に歸入したのである。これ紀元六百三十年二月のことにして、それより再びメッカに歸りて小巡禮をなして後メジイナに凱旋した

## 第七節　アラビヤ全半島を掌握す

マホメットが畢世の目的たりしメッカの聖市は今や渠が掌中に落ち、二十年間渠に反抗したる大敵コレイッシ人は今や渠に臣從し、ハワアズィンの豪族は今や渠が馬蹄の下に屈服したれば全半島中何人も渠と主權を爭ふものなく、渠が

盛運の日輪は今や將に中天に達せんとしたのである。之に加ふるに渠は新宗教の信仰とカアバの崇拜を聯結し、大小の巡禮、斷食祈禱等の宗儀をも此中に編入して回教はアラビヤ人の信すべき唯一の宗教となり、且つ神と預言者に對する信徒の服從は交戰平和、外交の大より、家庭に於ける一小瑣事に至るまで絶對的に其命令を遵奉するが故に渠は宗教上の法王たると同時に政治上の君主となつた。されば渠が打ち建てたる回教教會は同時に回教王國となり、此王國を維持すべき歳入は每年普通信徒より徴集する教稅と献納金を以て之に充て、外に基督教徒及び猶太教徒より貢物を納めしめたるのである

マホメットはメッカ征服より還るや久しからずして渠に臣從せる種族より教稅(十分一稅)を徴集せんが爲に四方に徴稅吏を派遣し、多くの種族は喜んで之に應したるも、獨り、テミイン(Temin)族は刀鎗を執りて徴稅吏を驅逐した。故に渠は軍隊を派して彼等を要擊せしめ男女小兒を合して五十人を捕虜とし之をメジイナに禁錮し、テミイン族は止むを得すして遂に臣從を申出て回教に歸入した、幷は紀元六百三十年四月のことである。それより反覆常なき土族の膺懲をなし、超えて同年七月に至りてアビシニヤ軍を紅海の一島に敗り、またタイ(Tay)族の



殿堂を破毀して其酋長の子アディ(Adi)を改宗せしめ、メッカの有名なる詩人カアブ(Kab)をも改宗せしめ、アラビヤの重もなる種族は使節を遣はして預言者に臣從せんことを乞ひ、エメン(Yemen)、ハドラマウト(Hadhramout)、マアラ(Mahra)、オマン(Oman)等、幷にシリヤ、ペルシヤの境よりも使節の來朝ありて皆預言者の臣民となつたのである。而して此等の使節はメジイナの殿堂にてマホメットに謁見し、恂切と敬愛を以て待遇せられた。さればメジイナの殿堂は回教王國の中央政廳となりて一切の内治、外交、交戰平和等皆此處に決定せらるゝに至つた

然るに同年の秋に至りて羅馬帝は土族の大集團を指揮してメジイナ攻擊の擧を企てたりとの風評ありたればマホメットは自ら第一擊を羅馬人に加へんと決心したのである。されど這回の遠征は道程遼遠にして酷熱耐ふべからず、早魃の中にありて砂漠を横斷するとなれば多くの市民は此遠征に加はるを欲せざりき。然れども砂漠の遊牧民は皆從軍を命せられ、熱心なる信者は競ふて義勇兵となり又軍資金を献納して出征の準備をなし、マホメットは一萬の騎兵を有する三萬の大軍を組織することを得たのである。是を以て同年九月渠は躬ら回教軍を指

揮してメジイナを出發し、炎熱と饑渴とを犯して〜ヂャル(Hejer)の部落に達したるも、此地は太古不信者の住める處なるが故に其井泉を飲むを許さずして雨水によりて辛うして渴を醫し、それよりテビユク(Tebuk)まで進軍したるに羅馬人が大軍を集めたりとは全々無根の流説に過ぎざることを知つた。是を以て渠はクハリド(Khalid)を將として一分隊を派遣し、ドウマ(Dumah)の基敎督會長を征して之を改宗せしめ自ら近隣の種族を說いて之を降し、殊にアイラ(Ayla)の君主ジオン(John)は基督敎徒なるが故に嘗東を以て降伏を勸告したるに彼は黃金の十字架を其前額につけマホメツトの足下に平伏して物品を献上した。依て渠は懇ろにジオンを遇して平和條約を結ひ、アイラ市より每年金貨三百を貢せしめ、他の猶太人殖民地よりも降伏を納れて貢物の多寡を決して後メジイナに歸りたるは同年の十二月であつた。其後久しからずしてメジイナの不平黨の巨魁たるアブドアラ(Abdallah ibn Obey)は死亡し其黨派も土崩瓦潰して中心より回敎を信するやうになつた。されは今やマホメツトの主權は北はシリヤの境に達し、南はエメンに及ひで全半島中タイフの小市を除くの外は悉く渠の命令を奉し回敎徒は最早半島中に戰ふべき敵なしとて甲冑を無用として之を買却する者あるに至つ



たといふ

先きにタイフの包圍せられたる時其會長の一人なるオルワ(Orwa)はエメン地方に行きて兵器の製造を學ひつゝありたるが其歸國するに方りてメツカ其他の大市が皆マホメツトに臣從したるを見てメジイナに行きて改宗し、それよりタイフに歸りて其改宗を人民に報し彼等も亦其例に倣はんことを勸誘し、屋上より高聲に叫ひて祈禱すべきを告けたるに彼は忽ち不信者の爲めに八方より射られて殉敎的最後を遂けたのである。されどタイフ人はハツアズィンの會長マアリク(Malik)の爲めに絕えず四邊を脅かされて市外に出る能はす全く孤城落日の觀を呈したれば六人の會長を代表者としてメジイナに降伏した。マホメツトは彼等を悃待し且つ自ら回敎の敎理を說いて之を信せしめ其女神ラア(Lat)の偶像を毀たしめんとしたるにタイフの婦人等は之を悲みて三ヶ年の猶豫を請求し、マホメツトは之を許さざるか故に二ヶ年とし、一ヶ年とし、六ヶ月としたるも、一日の猶豫も許されすして婦人等の叫喚悲鳴の中に偶像は破壞されたのである。

また渠はアブ、ベクルをして三百人を率ゐてメツカに巡禮せしめアリイをして聖市に蟻集したる無數の參拜者に對して天啓を宣へしめた。开はコラーン第九